
東方夢幻記

八神凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢幻記

【Nコード】

N0390L

【作者名】

八神凜

【あらすじ】

気付くとそこは見たことのない地。
記憶喪失のこの物語の主人公、璃空。見知らぬ地で果たして生き抜くことはできるのだろうか。
璃空の隠された過去とは…？

プロローグ

ここは忘れられた者が行き着く地、幻想郷。
幻想郷には、人間、妖怪、神、吸血鬼、鬼、亡霊など幅広い生物が
住んでいる。

いつも平和な幻想郷…

そこにある男が突如幻想入りしてしまう。男はある過去を抱えていた。そしてこれから待つ男の運命とは？

この幻想郷でまた新たな歴史が刻まれていく。

これは東方Projectの二次創作です。

文才の欠片も微塵もないド素人です。

誤字やら脱字がひどいです…。泣

また二次創作、オリキャラ入り、主人公最強、チートが無理な方は
戻るを(r y

挨拶

どうも初めまして。

マリアリが俺のジャステイスな八神凜です。

小説初です。

結構オリジナルです。

キャラが違う！！

とか

こんな内容だっけ？

とか思いそうな要素が多々あるかと思います。

また少々グロテスクな部分が出るかもしれません。

マリアリ要素を出すかは気分まじ気分です。

以上のことが無理な方は戻るを（ry

初心者なので温かい目で見てくださると嬉しいです。

感想などお待ちしておりますm（――）m

では、

本編をどうぞ（^^）／

幻想入り

《魔法の森》

樹々が広がるこの地は妖怪や妖精といった者の住処となっている。そのためこの地に近づく人間はほとんどいない。そんな魔法の森にある一人の人間が…

チュン…チュチュン…

小鳥たちの囀りが森に響く。その小鳥たちの囀りで目を覚ます。

「どこだ？」

その声の主はどうかやら10代後半の男のようだ。体を起こして周りを見渡す。

…見たことのない場所のようだが…なんで俺はこんなところに…？

俺は確か…

…？

あれ？

お、思い出せない…

いわゆる記憶喪失ってやつですか…

ついたため息が出てしまう。しかしこの状況で慌てない自分に驚く。しかしこの状況はまずい。

まずここがどこなのか…俺は…あれ？俺の名前は…

…

…まさかそれも思い出せない…？

…いや、すまん。

ボケただけだ。自分の名前は覚えている。俺の名前は璃空。名前は

覚えているが、何故森にいるのか、そして何故記憶がないのか、色々と考えてみるがやはり記憶がないのでわかるはずがない。ふと我に戻ると、近くで幼い少女の歌声が聞こえる。

「よし！行ってみるか。色々聞けるかもしれない」声から察するに少女のようだが、まあ子供でも少しはこの辺のことを知っているだろう。

「お嬢ちゃんちよつといいかな？」

璃空は少女？に話しかけるいや、たしかに少女なんだが…なんだその羽とその耳は！どうみても雀じゃねえか！そしてその帽子はなんですか…最近の子供はコスプレが趣味なんですか？

そんなことを考えながら雀ちゃん（仮）を方へ視線を向けると不思議そうな顔をしている。

「お兄さん人間？なんでこの歌を聞いてて大丈夫なの？」
はい？

いきなり何言ってるんですかこの雀ちゃんは…
聞いてて大丈夫？

まあ確かに下tt（ry

「…そんなことよりここはどこだか教えてもらえないかな？」

色々と思ったことはあるがまさか初対面で、しかも少女に言うのはかわいそうなので言わないでおこう…

「ここは魔法の森。じゃあ襲ってもいいよねお兄さん」
おいおいおい！！

襲っていいってなんだよ！！そんな満面の笑顔で言われても困る！
え？まさかこんな少女に襲われ（ry

「ちよ…」

考え事をしてる最中、不意に雀ちゃんが勢い良く突っ込んでくる。反射的に雀ちゃんの突進はなんとか避けることに成功する。しかし通りすぎてから直後、左腕に痛みが走る。

「痛ッ…」

見るとまるでナイフで切り付けられたような切り傷があった。まさかこんな幼い少女がナイフなんて持ち歩いてるのか！？今の時代物騒ですもんね…

とか思ったが次の瞬間それはかき消される。少女は鋭い爪を立てている。ああなるほど、あの鋭い爪で切り付けられたのか。とか呑気に言ってる場合じゃない！このままだったら俺こんな幼い少女（人と言っのかわからんが…）に殺される！主人公一話目にして幼い少女に殺害される…いやいやいや！！

何この死亡フラグ！！

そんな俺を嘲笑うかのように雀ちゃんは次の攻撃体勢に入っていた。さつきよりも殺気がパネエすけど…汗

「今度は逃さない」

「ッッ！！」

先ほどの突進より更に速く、これはさすがにかわしきれないだろう。せまいくる突進に覚悟を決め、目を瞑る。

直後、いきなり空から声が聞こえる。

「おいおい、ミステリア。何やってるんだ？」

俺もミステリアと呼ばれた雀ちゃんも攻撃を止め、空を見る。そこには箒に股がつて、トンガリ帽子に手を添えている白黒が印象の服装をしたこれまた少女がいた。うん、誰がどうみても魔法使いだろ！！って言いたくなるような少女だ。ってか、俺も巻き沿いくらいそうになっただけですが…

そんなことを考えていると「妖怪はそんな簡単には死なないから大

丈夫だぜ」

…おまいは俺の心が読めるんですか？

それよりあの白黒は魔理沙というらしい。

「あの…魔理沙さ「魔理沙でいいぜ」…じゃあ魔理沙。助けられてくれてありがとう（もう少しでおまいに殺されてたがな！！）」
お礼を言うとは地面へと降りてきた。怪我はないかと言われたが軽い切り傷さと笑って見せるが怪我をしてるなら手当てしてやるぜと魔理沙が手当てをしてくれた。

「そうだ、このままここにいちや危ないだろうから私が人里まで送るぜ？」

人里？なんすかそれ？

という顔をしてる俺に魔理沙も驚いている。とりあえず今の現状を魔理沙に話すことにした。

「なるほど、理解したがこのままここにいてもまたいつ襲われるか分からないぜ？今日は私の家に泊まると良いぜ」

確かにこのままこの森にいたら120%また襲われるだろう。それに魔理沙から聞いたのだが夜の方が妖怪たちが活発になるらしい。妖怪という単語に驚いたが目の前に魔法使いもいるし、先ほどのミステリアという少女の動きも人間離れすることから納得する。ここはお言葉に甘えて魔理沙の家に泊めてもらうことにした。

（しかしこれでも一応男なんだが…初対面の見知らずの男を泊めるか普通…まあ泊めてもらわないと困るのだが…苦笑）

（エ…ント…ター）

？

な、何だ？

眠りに付いてから結構時間が過ぎた頃、いきなり誰かが俺に話しかける。

俺はある場所にいた。なんて表現したら良いのか分からないが、強いていうならばそこは宇宙のような空間で薄暗い場所だ。そして目の前に輝く何かがある。俺は警戒しつつその何かを見つめる。

(…記憶を失っているようだな)

記憶喪失のことは言っていないはずなのに何故か知っていた。その光輝く者は何かを知っているような感じだった。

(あなたは何者ですか？何か知っているのですか？)

そういうと少し間をおいて(お前に敬語を使われるとはな…我はお前の能力の一部とでも言っておこうか)

能力の一部…？

俺にも能力があったようだ。しかし肝心な能力が分からない。聞いてみるがお前は忘れているだけで体は覚えている。いずれまた使えるようになるだけ言われ、詳しくは教えてくれなかった。

どうやら以前は使うことが出来たようだ。

考えているとまたいずれ会おうとその光輝く者は消えてしまった。直後意識が薄れていった。

(…なんだったんだ)

起き上がり先ほどのことを考える。一人考えていると魔理沙が部屋へと入ってきた。

「よ、璃空。良く寝れたか？」

「お陰さまでよく眠れたよ。ありがとう」

そういうと魔理沙は笑顔を見せた。考えていても仕方ない。いずれ分かることだろうと考えることをやめる。朝食を頂き、今は朝食の後の一服をしている。魔理沙がお茶を入れてくれたのだ。決して煙草ではない。一口お茶を飲むと魔理沙が

「今日は私の友人のところに行く予定なんだが、璃空も来るか？」

と言われたのでここにも暇なのでついていくことにした。

外へ出て、また箒に股がる。昨日気持ち悪くさせたのを気にしているのか今日は丁度良いくらいのスピードで飛んでいる。

数分後、神社が見えた。

「…神社？」

疑問に思っ一言言ってしまった。そんな俺を見て、「ここは博麗神社たぜ。ここの巫女が私の友人なんだ」

そついうと鳥居をくぐり、地面に足を着ける。

すると巫女の姿をした少女がいた。

（幻想郷って女しかないのかなあ…）

「あら、魔理沙じゃない。…その方は？」

魔理沙に話しかける巫女さん（仮）は箒で落ち葉を集めていたのを止め、こちらを向く。

「霊夢遊びに来たぜ。こいつは璃空だ。昨日森で妖怪に襲われてたのを私が助けたんだぜ」

こいつって…

まあ助けてもらったのはほんと感謝しないとだが（殺されかけたけどな）

「霊夢さ「霊夢でいいわよ」（いつもこのパターンだな…）霊夢。

俺は璃空。よろしく」

軽く挨拶をすると、

立ち話もなんだからと神社の中へと案内された。

中に案内され、俺と魔理沙は座布団に座る。すると少し遅れて霊夢がお茶とお菓子を出してくれた。お茶を一口啜る。

「そついえば今日夢で俺の能力が話しかけてきたんだ」

そついうと二人は顔を見合せ不思議そうな顔をしている。どうやら能力が夢に具現化したり、はたまた夢に出るようなことはないらし

い。

「璃空の能力はなんなの？」

霊夢に聞かれるが自分でもよくわからない。魔理沙が記憶喪失のこ
とを言ってくれたため大半は理解しただろう。しかし、能力がわか
らないのはここで暮らすのはさすがにきついだろう。そこで何か武
器を使うことを思い付く。

「武器ならあそこに行くといいぜ」

どうやら良いところを知っているようだ。魔理沙が後で連れてつて
くれるみたいだ。いや、ほんと助かります…

宴会（前書き）

文才がほんとなくてすいません・・・

それにここの機能がまだよく分からないorz

ほんと脱字、誤字がひどいです・・・

日本語って難しいですねwww

更新頑張りと思います。

感想を頂けると嬉しいです。

宴会

「おーい、霊夢ー？お、魔理沙もいたんだ。…誰？」突然角の生えた少女が訪問する。容姿を見る限り鬼だろうと察する。しかし見るからに少女なんだが…つるぺた（ry

「俺は璃空。えっと…」「私は萃香だよ。よろしくね。」
軽く握手をする。

どうやら萃香は宴会をするために来たらしい。察するに宴会は日常茶飯事のように。どうやら今日も宴会やることになったらしく、俺も誘われる。酒か…まあたまにはいいだろうと返事をする。夜にするから来てねと言われた。まだ自分が未成年だとは思うが少女が飲んでるくらいだから構わないだろうという何とも安易な考えだ。まあ鬼だからその容姿でも100歳以上だろうとは思うが…
夜までに時間はある。そろそろ武器を持っておきたいので魔理沙に頼み、武器屋？に連れてってもらおう。

暫く移動すると《香霖堂》と書かれた看板が目につく。中に入ると眼鏡をかけた男の人が俺と魔理沙を出迎えた。

「やあ魔理沙。ん？初めて見る顔だね、僕は森近霖之介。よろしく」
「初めまして、俺は璃空です。えっと…唐突ですが何か武器はありませんか…？」

霖之介に事情を話す（ry
少し考え、何か良いものがあつたのだろうか店の奥へ行ってしまった。

「いろいろあるんだけど、璃空くんにはこの短剣はどうかな？使い安く、軽いから護身用にはぴったりだよ」

ふたつの短剣を差し出す。見るからに使いやすそうではあるが、あることに気付く…

（俺金もつてないじゃん…）

それを察したのか霖之介…通称コーリンはお金はいらないと言う。
魔理沙も払うことないぜと言うので、言葉に甘えることにした。「
ありがとうございます。」

お礼を言い、香霖堂を後にする。帰る際にまた遊びにおいでと言われる。

行く宛もないので

とりあえず霊夢の処へ行くことにした。

「あら、早かつたじゃない」

霊夢が出迎えてくれた。萃香はいないみたいだが… その代わりに
金髪の髪長い少女が霊夢とお茶をしていた。

「何で紫がいるんだ？」

「あら、私がここにいちや悪いのかしら？…あなたが璃空ね。私は
八雲紫。よろしくね」

「自己紹介はいらないみたいです。紫さんよろしく。」

何か違和感がある。霊夢や魔理沙とは違う感じだ… 威圧感があり、
とつさに見構えるが…

「そんなに警戒しなくていいわよ。別にとって喰う訳じゃないんだ
から…それに敬語はいらないわ、紫って呼んでいいわよ。それより
璃空、あなた自分の能力が気になるみたいね？」

どうやら俺が香霖堂に行ってる間に霊夢が話したみたいだ。まあ確
かに自分の能力は知りたいが…一体どうやって調べるんだ？

疑問に思っていると紫が近くに来るよう手招きをする。警戒を解き、
近づく。そして俺の頭に手を置く。

（…何なんだ？これで分かるのか…？）

数秒後…

「…あなたの能力がわかったわ。璃空…あなたの能力はエレメント
を操る程度の能力よ…それと他にもまだあるわ」

霊夢と魔理沙は驚いている。まさか複数の能力を持っているだなん

て幻想郷でもあまり聞かないことだ。

俺自信それが珍しいことだということも知るわけもないが…

とりあえずエレメントを操る程度の能力ってことはあらゆること
ができるってわけか？風を操ったり、火を操ったり…一人そんなこと
を考えていると

「せっかく能力もわかったんだし、使ってみたら？」 霊夢が素っ
気なく言う。

（それもそうだな…）

庭に出て、意識を集中させる…

ボツ！！

意識を集中させ、目を開くと目の前に炎が出ていた。「…なるほど
…こういう能力か」

使い方はわかったが、やはり能力を使うことが出来ても記憶は戻ら
ない。「璃空、あなたの他の能力はあらゆるものを無にする程度の
能力。そして召喚する程度の能力よ」

（そんなにあったのか…）

しかし今はどんなに意識を集中させてもエレメントを操る程度の能
力以外は使うことが出来ない。

宴会の時間まであと数時間ぐらいだろうか、霊夢は宴会の準備があ
るため忙しそうだ。紫は一度家に帰るとスキマを開き帰ってしまっ
た。魔理沙というと…

「私はアリスのところで時間を潰してくるぜ。丁度用事もあったか
らな」

と言いついてしまった。

（アリスって誰だろう…名前から察するにまた女の子のようだけど
…人間かな？）

そして俺はというと、

霊夢に手伝うかと訪ねるがあまりやることもないらしく、適当に休んでいいわよと言われてしまいまあ暇なわけだ。
だから博霊神社の近くをうろろろすることにしたのだが…

「ここはどこだ…」

はい、迷子というやつですね。また森で迷うことになるだなんて…
しかし丁度良かったかもしれない。色々と試せる。相手がいれば尚
良いんだが…

「お兄さん誰なのだー」

後ろを振り向くとリボン？いや、御札のようなリボンをつけた少女
がいた。

「俺は璃空。迷子になってしまつてね…ところで君は？」

「ルーミアなのだー」

この子は人間かな？それにしても幼い子ばかりによく会つな…

「璃空は食べていいのかー」

そうそう食べて…はい？おま…今なんつた？食べる…！？

「ちょ…もしかしてルーミアって妖怪か…？」

「ルーミアは妖怪なのだー」

さいですか…なんでこう森で妖怪と出会す度に襲われる羽目になる
んだ…

まあ確かに森は妖怪や妖精の宝庫だけどさ…

さて、どうしようか…戦うっていつでもこんな幼い子と戦うのは気
が引けるし、とりあえず説得はしてみるか。

「なあルーミア、今回は見逃してくれるかな？」

「ダメなのだーお腹が減つてるのだー」

ギュルルルル…

ルーミアさん、あなた空腹ですか…

「じゃあ頂きますなのだー」

突っ込んでくるルーミア。見た目はほんと幼くかわいい少女なんだが…

少量の風を全身に纏い、スピードを強化し、難なくルーミアの攻撃をかわす。

「うー早く食べさせるのだー」

「ッー!!」

何か丸い弾を複数打ってきた。これが弾幕とかいうやつなのかな？魔理沙のマスタースパークとはまた違うようだが…

スピード強化している今の俺には当たることなく通りすぎていく。

「なんでかわすのだー」

その直後、何かを取り出し唱える。

「『月符 ムーンライトレイ』」

魔理沙も使ってたスペルカードとかいうやつか。

輪っか状に弾幕が放たれ、そこに二つのレーザー。なるほど、月光から差し込む…ってことかな？

シュン…

（なッ！？）

纏っていた風が消えてしまった。どうやら効力が消えてしまったようだ。

これはまずい。まだ能力を完全に使いこなせてないため次の能力を使うまでに少し時間が必要なんだが…

（能力を使う時間はなさそうだな…）

あと数mまで弾幕とレーザーが迫っていた。

迷ってる暇はないか…自力で避けるしかない。

そんなに数多いわけではなかったため、避けることは容易かった。自然に体が動いちゃうんだ（ry

「なあ、ルーミア。俺を食べるより今日博霊神社で宴会があるんだが…一緒にいかないか？」

多分勝てるだろうが少女をいたぶるのはさすがにな…それに無駄な戦いはしたくない。

「そーなのかー、じゃあいくのかー」

(ふう…うまくいって良かった…)

二人は弾幕ごっこを止め、博霊神社へと向かう。ルーミアを連れて博霊神社に無事たどり着く。どうやらもう宴会が始まっているようだ。それなりに集まっている。

余談だが森からは風を操り飛んできた。まさかこううまく飛べるとは思わなかったが…

「帰ってきたみたいね。あら、ルーミアも一緒だったの?」

霊夢に森での出来事を話す。不運だったわねと笑われてしまった。まあ確かに不運だが…

「初めての方が多いな…どうせなら挨拶でもしてこようかな。ルーミア、あとは楽しんでくれ」

自分が主催者ではないが、ルーミアにそう言って離れる。霊夢に挨拶してくると言うと言霊夢は適当に返事をして宴会の中へと消えていった。

「さて…挨拶って言っても一人だと辛いなあ…」

どこから挨拶しに行けばいいのか迷い、周りをキョロキョロする。

「あら、あなたが璃空ね」突然話し掛けられた。声の主の方へ振り向くとそこにはとても美しい女性がいた。桜を思わせるような髪色で、肩よりやや短いくらいでとてもその女性に合ってる髪型だった。しかしどこか威圧感があるが…気のせいではないかと思わせるようなふわふわとした感じがとても印象的だ。

「初めまして。あなたは?」

「私は西行寺幽々子よ。幽々子と呼んでね」

うん、印象通りかなりふわふわとしてる。

「俺のことを知ってるの「紫から聞いたわ」さいですか．．．」
「どうやら幽々子だけではなく、幻想郷で有名になっているらしい。」

「あの…私を無理しないで頂けますか…？」

幽々子の隣に銀髪のおかつぱ頭で黒いリボンを付けた少女がいた。
って、そのふわふわと浮いてる白い物はなんでしょうか…

「申し訳ない。俺は璃空、よろしく。」

「いつものことなので気にしませんけど…私は魂魄妖夢です。よろしくお願ひします」

妖夢さん…あなたいつもこんな扱いなんですか…

「じゃあ俺は他にも挨拶しに行くからまた」

そう言いその場から離れる。ってか、幽々子さん…食べ物食べ過ぎですよ…かなりの勢いで用意されていた食べ物消費していた。

次は…じゃあメイドの服を着た人と羽が生えてる少女のところでも行こうかな。（どうみてもあの少女は人間ではないだろうけど．．．）

「初めまして。お楽しみの処申し訳ない。俺は璃空。今挨拶をしに回ってるんだが…」

「あなたが最近来た外来人ね。私はレミリアよ。レミリア・スカレット」

（また凄い威圧感があるな。カリスマ性を感じるのは気のせいではないだろう）「私は紅魔館のメイド長をやらせて頂いてる十六夜咲夜ですわ」

「レミリアは悪魔なのかな？どうみても人間じゃないよな？」

そうよと言い、お酒を一口飲む。まあ見るからに悪魔だね。っつか、そのなりで酒を飲むはかなりインパクト的なんだが…

「何か言ったかしら？」

「いえ何も…咲夜も悪魔なのか？いや、いやそんなわけないか」

「いえ、私はあなたと同じ人間ですわ」

うん、そうだろうね。に、しても咲夜さんは大人びてるな。可愛いと綺麗の両方を兼ね備えてる。

「褒めても何も出ませんよ」

やべ…口に出てたみたいだ。

その笑顔はそこらの男をイチコロにする程度の能力があるよ咲夜さんまあ俺には効かないけどね。

（おっと…少し時間をかけすぎたな）

「そんじゃもう少し挨拶してくる」

場を離れる際、レミリアが今度紅魔館に遊びに来なさいと言われた。悪魔の住む屋敷にご招待させるのもなかなか怖いものだが…

適当に歩いていると突然

「璃空じゃないか」

（この声は魔理沙だな）

振り向くと魔理沙が女の人と二人で飲んでいた。

「やあ魔理沙。そちらの方は？」

魔理沙から女の人に視線を変える。

「私はアリス・マーガトロイドよ。アリスでいいわ」アリスって今日魔理沙が会いに行った人か。

「よろしく、アリス。アリスは人間か？」

「私は妖怪よ。でも元は人間よ。」

…そんなこともここでは可能なのか。まあ今さら驚くことはないが。そんな話をしていると思いの外、魔理沙とアリスと三人で長話をしってしまった。そして魔理沙に軽く酒を飲まされたのだが…

どうやら酒は弱い方ではないらしい。まあまだあまり飲んではいないが…まだ10杯を一気したくらいだ。つい乗ってしまっで一気をしてしまった。魔理沙とアリスも俺と同じペースで飲み比べ、二

人は軽く酔ったのかべたべたしてる。

…おまいらは夫婦か！！

と突っ込みを入れたくなるほどだ。

（さて、そろそろ次のところへ行こうかな）

「魔理沙、アリスすまない。そろそろ違う処へ挨拶に行くよ」

二人に別れを告げ、酒が入ったコップを持って次の処へ向かう。

周りを見渡すとあと挨拶してないのはルーミアと話している…んー
多分妖精？うん、？だ。その隣にはゴキブリ？いや、それは失礼か
…触覚みたいなのが生えているおと…女の子だ。そして三人を介護
しているしっかりしている大ちゃんと呼ばれてる子もいる。そう三
人して飲み過ぎたのかかなり酔っぱらってる。
うん、酔っぱらいは関わるのはやめておこう。

周りを見る限り一通り挨拶し終わったみたいだ。

（神社の中に霊夢はいるのかな？外にはいなかったみたいだけど…
挨拶も終わったし言ってみるか）

「霊夢ー？…ってなんでみんな集まってるんだ？」

神社の中へと入り、襖を開けるとそこには霊夢、魔理沙、幽々子、
妖夢、そして紫がいた。どうやらアリスは帰ったようだ。

「璃空、飲むわよ」

どうやらここで二次会ってところか？

まあ挨拶も終わったし、俺も本格的に飲むか。

酒を一口飲み、みんなに質問する。

「そっぴゃ、みんなの能力を聞いてなかったな」

「私は空を飛ぶ程度の能力よ」

自称楽園の素敵な巫女…霊夢は素っ気なく言う。

「魔法使う程度の能力だぜ」

初めに助けてくれた白黒魔法使い・・・魔理沙は笑いながら話す。
おまい絶対酔ってるだろ・・・

「死を操る程度の能力よ」

ゆ、幽々子さん・・・なにそのチートの能力は・・・

この人は敵に廻したくないと思った璃空だった・・・（亡霊だけどね・・・）

「私は剣術を操る程度の能力です」

辻斬りみよんの妖夢は礼儀正しく言ってくれた。でもいじられるのねw

そして・・・最後に

「スキマを操る程度の能力よ」

クマさんよろしくな冬眠加齢sy（ry

なるほど、スキマを操ってその中を移動するってことか・・・しかし紫さん、あなた飲みすぎじゃない？

「ああーもう二次会始まつてるー。」

おやま、つるぺたの萃香ではありませんか。

どうやら探してたみたいです。

そんなハプニングもあつたが・・・

30分後俺は酔いと眠気でその場で寝てしまった・・・

宴会後、新聞記者現れる（前書き）

璃空の隠された過去が少しずつ分かってきます。
また、題名にあるように射命丸文が登場します。

引き続きお読み頂ければ大変嬉しく思いますm（――）m

宴会後〜新聞記者現れる〜

（…またここか）

またあの真つ暗な空間にいた。お決まりのように光輝く者はそこにいた。

（エレメントマスター。記憶はまだ戻らないようだな）

能力の一部である光輝く者はまだ俺が記憶が戻らないことも知っているようだ。

（ああ、ところ名前は？前に聞きそびれたからな）

（ほほう、少しは口調も戻りつつあるな。我が名は・・・幻獣麒麟だ）

（き…りん？）

ズキ…

突然頭痛が襲う。

（痛ッ…お前のことを知ってるはずなのに思い出せない…くそ）

そんな俺を見て躊躇っているのか、少し間を置く。

（いや…記憶は戻らない方が良さだろう。それより我がお主の夢に具現化してきたのは他でもない。忠告をしに来たのだ）

（戻らない方が良いとは一体どういうことだ？麒麟、お前何か知っているのか！？）

忠告よりも戻らない方が良いということが気になってしまふ。

（すまぬが我からは言えぬ）

（そうか…）

どうやら深い訳があるようだ。気になるが麒麟は言う気にならないようなので聞くにも聞けない。

（忠告だが璃空よ。能力は極力使うな）

…能力を使うな？一体どういうことだ。確かに人間にしては強力すぎる力はあるが悪用しているわけではない。昔は分からないが…（これはお主のためなのだ）

そういうと麒麟はスツと消えていく。それと同時に真っ暗だった世界も次第に明るくなり眩しい。目が覚めるのだと察する。

（待ってくれ！まだ聞きたいことが…ッ！！）

そこで意識は途切れる。

「う…」

夢から覚める。その瞬間全身にダルさが襲いかかる。軽い二日酔いのような感じた。重たい体を起こし、先ほどのことを思い出す。麒麟が言っていたことが気になる。

（能力を使うなって一体…）

ふと周りに視線を向ける。周りを見渡すと霊夢と魔理沙がまだ寝ていた。そしてあちらこちらに飲み散らかした痕跡がひどいくらいあった。

どうやら寝てしまったあとも盛大に盛り上がったのだろう。

（しかし…これはいくらなんでも汚すぎだろ…）

霊夢も魔理沙もまだ起きそうにない。姫君の々幽々子と妖夢、つるぺた萃香、加齢s y（ry：紫の姿がないことから帰ったのだと悟る。まあスキマを使ったのだろうけど。

「二人ともまだまだ子供なんだな」

寝顔にまだ幼さがある。

このままでは風邪を引いてしまうかもしれない。毛布をかけてあげることにした。しかし毛布は一体どこにあるのだろうか…

（んー…この押入れか？）勝手に開けるのは悪いが開ける。案の定毛布があった。それを二枚取り出し、二人にそつとかける。

（これで体は冷やさないだろう…さて、後片付けでもしておくか）

30分後ひどいくらい散らかっていた部屋はきれいになった。我ながら頑張ったと思う。ほんと。

まだ起きる様子もないようだ。

（どこかに出掛けてみるとするか）
置き手紙を分かりやすいところに置き、
外へ出る。博霊神社を出てから数分後…

「また迷った…」

この辺の地形に関して皆無の璃空はまた迷ってしまった。

少年迷うこと数分後。

「……」

彼はまだ迷っていた。ここまでくるともはや遭難といってもいいかもしれない。途中妖精から弾幕を打たれたがすべて蹴散らす。おかげで無駄に疲れたわけだ。

「あゝあゝもう嫌だー…」

あまり能力は使いたくないのだが…麒麟の言っていたことも気になるし…

（この際仕方ないか）

風を操り空へと飛ぶ。すると少し離れた処に人里らしき村があった。どうやら迷いながらも人里に近付いていたようだ。
人里へかなり低燃費で進む。

ヒュンツ！！

いきなり強風が吹く。

「あやややや、あなたはもしかして噂の外来人ですか？」

もの凄い勢いで風が通り過ぎたと思ったたらいきなり黒い翼の生えた天狗のような格好をした少女が目の前に現れる。

「そうだが…君は？見たところ天狗のようだけど」

「私は射名丸文と言います。あ、これ今月の文々。新聞です。あとで感想聞かせてくださいね」

幻想郷に新聞記者がいるだなんて…

「あなたは確か璃空さんですよ？取材をさせてもらいたいのですが、今お時間大丈夫ですか？」

（取材つて…何かデマでも書かされそうだな）

「別に構わないが…取材なら一度地上へ降りてもいいか？」

「？取材をさせてもらえるなら私は構いませんよ」

少年、少女地上へ（ry

「で、取材つて何を聞くんのだ？」

「ではまず…璃空さんはどうやって幻想郷へ来たのですか？紫さんのスキマですか？」

（紫のやついきなり連れてきたりもするのか…）

「分からない。気付いたら森にいたんでな。しかも記憶喪失なんだ」

文に事情を話す（ry

「あやややや、それは大変でしたね。では能力を教えてほしいのですが」

「（能力か…全部はさすがにまずいな）エレメントを操る程度の能力らしい」

「エレメントですか…なかなかチートな能力ですね…私の能力はあなたの一部でしかないと言うことですか…（さすがにショック受けます…）では取材はこの辺で。ありがとうございました」

そついうと文は用事があるので風の如く消えていった。

人里（前書き）

人里へ辿り着くと慧音がいた。最初は警戒されてしまっが・・・？

人里

「さて、人里にでも行くか。そんなに離れていないし、方向もわかったことだし歩くか」

少年人里へ向かう（ry

1時間後、人里へ辿り着く。立派とは言えないが、そこには人々で活気が溢れていた。

（良い処だな…）

「おい、そこで何をしている？」

不意に話し掛けられる。声の主の方へと振り向く。長く綺麗な髪で巨乳の女の人が険しい顔をしている。侵入者とも思われたか？まあ知らない奴が来れば誰だってそう思うか。

「人里へ挨拶をしに来た璃空です。あなたは？」

「璃空？ああ例の外来人か。私は上白沢慧音。ここで教師をいている。それと敬語はいいぞ。慧音でいい」

そついうと慧音は家へと案内してくれた。

「妹紅、帰ったぞ。こちらは璃空だ」

そこにはパソコンに夢中になっている。慧音と同じくらい…いや、それ以上の髪の長さで綺麗な白髪。そして大きいリボンをしている女の人がいた。妹紅はパソコンからこちらに視線を変える。

「慧音か、おかえり。と、外来人か？私は藤原妹紅。よろしく」

軽く握手を交わすと妹紅はすぐパソコンに夢中になってしまった。まだ始めたばかりなのか説明書とパソコンとにらめっこ状態だ。

慧音はお茶を入れてくれた。お茶を一口啜り、挨拶回りをしていること、記憶喪失のことなどを話す。

「なるほど、聞くところによるとまだ宿も決まっていなみたいだな。もし困ったことがあれば私の処を訪ねると良い」

「ありがとう。とりあえず今日は他にも見て回りたくてな、また遊びに来るよ」見知らぬ尋ね者をここまで親切にしてくれる慧音はお人好しとよんでもいいかもしれない。しかしそれが彼女なのだ。慧音の優しさは素直に受け止めておこう。妹紅はというと未だにパソコンと格闘中であつた。

「じゃあそろそろ行くよ。お茶ご馳走さん。美味しかったよ」
「構わん。また来ると良い」

慧音に挨拶する。妹紅にもしたのだが聞こえていないようだった。

人里から出て、

またあの森へと逆戻りだ。さて、

次はどこへ行こうか…

人里（後書き）

展開早すぎますよね．．．

サーセンm（――）m

誰か私に文才を分けてください．．．

しかし小説書くのは良い暇潰しになりますね。

最近はこのおかげで忙しいです。

購読して頂いてる皆様、

このような出来損ないの小説をお読みになって頂き誠に嬉しく思います。

更新頑張りたいと思います。

とりあえず書かなきゃ．．．

奇襲（前書き）

話が發展します。

璃空の隠された過去が少しずつ暴かれます。

能力を極力使わないようにしたい処だが、そこにある組織の幹部の男が璃空の前に．．．

奇襲

森を歩きながらふと考える。能力を極力控えることにしたものの、正直先ほど少し使用したが何の悪影響もない。麒麟の言っていたことは嘘なのではないかと思うほどだ。しかし忠告は聞いておいて損ない。

極力能力は使わず、もし戦闘にでもなったら護身用の短剣を使用するしかないだろう。

突然茂みから殺気を感じる。

「ッ！！」

横へと転がりそれを回避する。

先ほどまでいた場所はプスプスと異臭を漂わせながら黒く変色していた。

それが飛んできた方を見るとそこには全身真っ黒で、身長はやや俺より高いくらいだろうか・・・だいたい180センチくらいだろう。身長と体型から男だと断定出来る。こんなやつは見たことないし、知り合いでもない。いきなり手荒な挨拶してくれたものだ（記憶はないのだが・・・）

「誰だ？」

少々殺気を込めるが、冷静に問いかける。

「…記憶喪失というのは本当らしいな。くくく、それは好都合。我らにとって貴様は邪魔者でしかないのな。記憶が戻る前に消えてもらう」

いきなり邪魔者扱いですか？おまいらに命狙われる理由なんて俺にはないはずだが？いや、記憶がない今はそんなことも言ってられないか。

「そうか。じゃあ正当防衛として、貴様を倒すとするさ」

能力は極力使うことは出来ない。まだ使い方もなれていない護身用の短剣で戦うのはさすがに不利だろう。やむを得ない時は使用するしかないか…

短剣を二つ抜き、真つ黒の…あぁめんど。黒（仮）へと全速力で近づく。そんな姿を見て黒はにやりと笑ったように見えた。

「くくく…お得意の能力は使わないのか？いや、今は極力使わないようにしているだけか。まあいい。貴様を始末するのに手間が省けるというものだ」

「御託はいい。それより自分の心配でもしたらどうだ？」

ぺらぺらと喋っている間にかなり近づくことが出来た。かなりなめられているがそんな挑発は効かない。どんな能力でも使う前に倒せば問題ない。勢いを殺さず、そのまま切りつける。

…が、短剣が黒に当たることはなかった。周囲に鈍いが響き渡る。ガギンッ…

あーあ、折角こーりんからもらった短剣が一つ折れてしまったじゃないか。

黒は黒い刀…そのままだが黒刀とでも言っておこうか。黒刀を片手で持ち短剣での攻撃を防いでいた。もう片方の短剣は折れずに済んだが片方折れてしまつては短剣では不利だろう。

かなり近距離の状態では黒は勝ち誇ったかのように再びにやりと笑う。「ここまで落ちてるとはな。さすがに驚いたが…まあ任務をこなすには楽だな。じゃあさっさと死ね」

目にも止まらぬ速さで切りつける。とっさの出来事に短剣を盾にした後ろへ飛ぶ。しかしあまりにも速すぎた斬撃を完全に回避することは出来なかった。

もう一つ短剣のおかげで致命傷ではない二つともおれてしまった。致命傷ではないものの左肩から胸にかけて激痛が走る。生温い真つ

赤な血が体を伝わり地面へと落ちる。

「ぐ…（ち…まずったな。焦りすぎたか…このままじゃこつちが殺られる…極力使用しないというのは撤回だな）」

激痛に耐えながらポケットからスペルカードを取り出す。

「『風符 烈風陣』」

体に風を巻き起こす。

続けて、

「『雷撃 雷神の逆鱗』」そう、実はスペルカードは最初からあったのだ。昔から使っていたのだろう。

雷撃のスペルカードを唱えると同時に視界が奪われる。不思議なものだ。完全に思いたせはしないが、体が覚えている。視界が奪われると同時に激しい雷撃が黒を襲う。雷の時は毎秒150kmという恐ろしい速さを誇る。そんな雷撃をかわすことは不可能だろう。雷撃が黒を襲う。

次第に視界が回復する。自分でも驚くほどの威力とスピードを誇る雷符を喰らって生きてるわけがない。実際俺が喰らっても死ぬ。誰でもそう思うほどの威力なのだが…

「…嘘だろ？」

黒は死んではいなかった。それどころか倒れてもいない。

「あゝ…対雷撃用の制服着てなかったら今のさすがにやばかったぞ」

しかし対雷撃用の制服とやらは上着だけ消し飛んでいた。

「まだ力は完全に戻らないようだ…（魔力も全盛期の何分の一だ？ち…これでもまだ力が戻ってないのか…あの方が恐れるわけだ。この化け物め）貴様はここで殺す」

ジャキ…

黒刀を鞘へしまい、今度は黒い装飾銃を取り出し銃口を向ける。直後一閃の光が俺に向けて放たれる。

「『爆弾 バーストブレット』！！」

だが直線にしか飛んでこない弾などかわすのは容易い。なんなく避けるが…

「あまい…『千爆 サウザンド・バースト・ブレット』!!」

もうひとつ装飾銃を取り出し、先ほどの攻撃は囷、近距離での攻撃が本命だった。

視界が光で埋め尽くされる。

(ツー!!…これは避けられな…?)

違和感が…

ドクン…

(なんだ…?)

力がみなぎる。

何だろうか…まるでリミットが外れたような感覚だ。魔力が今までの何倍も強くなった気がする。それにこの感覚は…?

「な、何だと…?」

黒は今の攻撃で完全に勝ったものと悟っていたが…

(千もの弾を一瞬にして消しやがった…それに魔力が全盛期の頃と同じくらいまで上昇だと!?)

「…化け物め」

恐怖すら覚える。目の前の男に。禍々しいくらい強大な魔力、威圧感が伝わる。「さっきのはさすがに危なかったが…どうする?まだやるか?」

にやりと笑い黒を挑発する。

「く…くくく…馬鹿にするな!『秘弾 バーストレイザー』!!」

先程の弾とは違い、魔理沙のマスタースパーク程ではないが太いレーザーが襲い掛かる。

「それが最大の技か?」

レーザーはかなりの威力だろう。しかしそれを消し去る。

「無効化だと…？」

最後の切り札さえ容易く消されてしまった。もはや黒に勝ち目はないだろう。

「そろそろ最後だ。『魔炎 エクスプロ…』 ツ！？」

ガハッ…

突然大量の吐血。

（体が…動かない）

その場に倒れ込む。

頭が割れるように痛い。 次第に意識が薄れていく…

意識が遠退く中、かすかにおぼえていることは黒が逃げっていくことと誰かが来たことだ。

奇襲（後書き）

進展が早すぎてる気がしてならない凜です．．．
こんなんでいいのか自分でもわからんです。

これから更新頑張ります。

相変わらず誤字、脱字がひどいです．．．

感想、指摘があればお願いしますm（――）m

謝罪と真実（前書き）

璃空の記憶が戻り、今までのことを思い出す。そして組織を潰すために協力を依頼…

璃空の消された記憶とは…？

謝罪と真実

気が付くとそこはベッドの上だった。

頭痛は今はない。体調も良好といったところだろうか。

すると女の子が入ってきた。歳は俺より2、3歳下といったところだ。

「気が付いたみたいだね…具合はどう？」

「良好といったところかな？君は？」

何故だろうか。

この子を知ってるような気がする。いや、とても懐かしい感じた。記憶がないというのは何とももどかしい。

「…私は妃奈だよ。璃空にい…いえ、璃空さん」

…何故そんなに悲しい顔をしているんだ？

俺のことを知っている…？俺の知り合いなのか？

「妃奈か…良い名前だね。君は俺のことを知っているのか？俺は記憶喪失ってやつらしくてね…良くわからないが妃奈、君は前から知っているような気がするんだ」

言い終わると突然泣き出してしまった。

ただ一言。一言言ってその場に泣き崩れてしまった。「ごめんなさい…」

突如スキマが開く。

スキマの中から紫が出てきた。紫を見ると険しい顔をしている。何とも複雑といった感じだろうか。場の空気が重い中紫が口を開く。

「妃奈：ほんとのことを言いなさい」

ほんとのこと…？

どういうことだ？紫も何か知っているような口調だった。妃奈は少し落ち着きを取り戻し、ゆっくりと話始めた。

「璃空さん：いえ、璃空兄さん。私はあなたの妹なの…そして記憶を奪ったのも私：幻想郷へ連れてきたのは紫さんだけど、私が頼んだことなの」

…どういうことだ？

今日の前にいるこの子が俺の妹だと！？

だとしたらあの懐かしい感覚に納得がいく。例え記憶はなくても、心で繋がっていたということだろうか。

しかし分からない。記憶喪失にされなければならない理由…そして幻想郷へ連れられてきた理由…考えれば考えるほど混乱していく。

「あなたの能力にリミットをつけたのは私。あなたは人間の世界である組織の暴走を止めようとして重症を負ったのよ。妹を守るため、そしてあなたたちの世界と幻想郷を守るため自分を犠牲に…ね」

その暴走とは、幻想郷に興味を持ったある人間の欲望により、人体実験などを繰り返し自分たちに能力を付けようとした。しかしそれは失敗に終わり、代わりに強力な武器の開発、及びキメラの実験に成功。人間が持つには強大すぎる力に幻想郷の住人…つまり紫はその組織を潰すことにした。そこで人間に協力を依頼するため、ある人間を探していた。それが璃空と妃奈の兄妹だった。二人は人間では極稀の能力の保持者だったのだ。しかし協力を依頼する以前に二人の強力な能力に組織は目を付け、妃奈を拉致。璃空は妹を救うために組織に一人で立ち向かった。そして一人で組織を壊滅まで追い込んだのだが、組織の中に一人だけ能力を持つ者がいた。それが組織のボス、紅だった。組織のボス、紅の能力は消滅させる程度の能力。壊滅まで追い込まれ、最後自分モ口とも世界を消滅させようと

した。妹を守るため、そして世界を守るために全能力を駆使し、阻止しようとしたのだが…

組織はあまりにも技術が進んでいた。ただでさえ強力な能力を技術によって強化したのだ。しかしそれに伴い自分では制御でない程の強大な能力となってしまうたのだ。そして能力の暴走…

全能力を駆使したのだが…暴走を完全に止めることは出来なかった。しかし暴走を世界に各地に広まることはなかった。

自分を犠牲にし、能力の暴走を防いだのだ。

しかしその代償はあまりにも大きかった。

自分の寿命を大幅に消滅され、また能力を使用することが困難な体になってしまった。

暴走の後妃奈は紫に頼み、璃空を幻想郷に連れてきてもらい、永遠亭の医者に薬を調査してもらい介護してくれたこと。危険な状態が続いたが何とか一命をとり止めた。しかし目を覚ました時に組織が完全に壊滅していないことを知れば自分の命など省みず、戦うだろう。世界が滅びないように、腐った欲望を消し去るために。妃奈は兄を心配し、

暴走の記憶を消すことにしたのだ。

体がボロボロの璃空は能力を使用すると体が持たない。無理して体を壊さぬようリミットを付けてもらうよう依頼したのだが…

どういうわけかエレメントを操る能力だけはリミットをかけられなかった。決して紫の力が弱いわけではない。幻想郷の中でも最強クラスである彼女の力は本物だ。

その他二つはなんとかリミットをつけられたのだが、組織の一員である黒（仮）との戦いでリミットが外れ、魔力の上昇。それにより体が悲鳴を上げ倒れてしまったのだ。

妃奈は自分の能力、璃空と同じエレメントを操る程度の能力と予知する程度の能力を保持している。

後者の能力で璃空の危険を察知した妃奈は、紫に幻想郷に連れてき

てもらったのだ。

妃奈の能力を聞いて拉致を回避出来たのではないかと訊ねると紅の能力により能力を一時的に消滅させられていたらしい。俺は無にすら能力を使用し、相殺できたため消滅はされなかったのだと言われる。

「なあ記憶を戻すことは出来るか？このことを俺に言っただけでそれはそいつを潰すんだろ？だったら記憶を戻してくれ。それにいつまでも妹を思い出せないのは切ないしな」

最後の言葉が恥ずかしかったのか、妃奈は少し赤くなっていた。

「…兄さん。今の組織は全盛期の頃より強大な力を持っているわ。紅も完全に回復してるし、何より…紅が新しい能力を覚醒したの」

…俺が不安になるとでも思っているのか？
逆だ。

「そんなことは関係ない。俺は奴らを潰す。今の俺では力不足かもしれないが協力する」

（その答えを聞いたかったけど…不安だよ…今度無茶したら死んじやう…。私にもっと力があれば…）

妃奈の浮かない顔で何を考えてるのか察する。記憶はないが何とも兄弟とは何とも不思議なものだ。考えることが分かってしまう。

「大丈夫だ。俺はそう簡単に死なないし、妃奈はよくやったよ。今まで一人で戦ってきたんだろ？背負い込ませて悪かったな」

「…ありがとう」

一言だけだが、とても感謝されているものだと言わん。

「さて、記憶を戻してもらおうか」

妃奈は頷き、俺の頭に手を乗せ意識を集中する。

直後睡魔に見た感覚が襲う。

記憶が蘇る。

今までの妹との生活。

組織に目を付けられ、逃亡の日々。

そしてあの日の出来事を…

「…まだ記憶が戻ったばかりで混乱しているが…本題に入るか。紫、俺らに力を貸してほしい。元はといえば人間世界での出来事。幻想郷の住人には関係のないことだが…今の俺らだけの力では組織を潰すことは出来ない。力を貸してくれ」
深々と頭を下げお願いする。

「あなたたちを放っておくわけがないでしょう。力を貸すわ」話は聞いたぜ。私たちも力になるぜ」…あらあなたたちも来てたのね」そこには飲みを共にした霊夢、魔理沙、幽々子、妖夢、アリス、萃香がいた。

「みんな…ありがとう」 見ず知らずの人間だった俺にこんなにも協力してくれる仲間がいてくれるなんて…俺は幸福者だな。

謝罪と真実（後書き）

どうもです。凜です。

後書きで々書かせていただきますm（――）m

まずは普通に後書きを…

やはり進展が早すぎる感じがしてならないです…

文才という素晴らしいものをどなたか私に譲ってください（ry

これからも更新頑張りたいと思いますが、保存してある下書きが底をつきそうです…

はい、頑張りますm（――）m

さて、少しお話を…

主人公、ヒロイン？の名前は私が子供に名前を付けたいと思っていた名前です。能力はほんと適当に思い付いたのでそれでいいや的な感じにしてみました…組織のボスもパツと浮かんだ名前でしたしw

そういえばまだ小説を書き初めて間もないのにお読みになられてくれている方々がいるとはほんと思ひもしませんでした…ましてやお気に入り登録や評価までしてくださるだなんて…

ありがとうございますm（――）m

これからも更新頑張っていきますので、宜しければお読みになられて頂ければ嬉しいです。

あ、そういえば勝手に次のページになってしまいました…うん、泣きたいです。

感想、指摘があればお願いしますm（――）m

永遠亭（前書き）

今回は永遠亭に行き、そこで璃空の状態が…

毎日更新がそろそろ出来なくなりますね…

すいませんorz

永遠亭

無事退院した璃空は妃奈と共に博霊神社に寝泊まりすることになった。何かあれば集まりやすいからだ。
霊夢にはこれからお世話になるな…

幻想郷は何も変わらないくらい穏やかだ。

この世界を壊させるわけにはいかない。例え命に変えても守って見せる…

「また小難しい顔をしてるわね。そんなに悩んでると老けるわよ」
お茶を啜りながら霊夢は何食わぬ顔で言いやがった。おま…まだ20歳にもなつてねえんだから老けるとか言うなよ！まだまだ若いわ！！

「それにまた自分は犠牲になってもいいとか考えてたでしょう？」
ギクツ…

妃奈さん…バレバレなわけね…

兄弟とは何とも怖いものだ。お互いの考えてることなど手に取るほど分かってしまう。

「璃空が読みやすいだけだぜ？」

ちよ…ま、魔理沙さん。それなんか傷付く…

つてか、いつからおまいはいたんだ？

「ついさっきだぜ」

また読まれた…

なんだか俺いじられてるよ…泣

「兄さん、今日は永遠亭に行くよ。えーりんさんに今の状態を見てもらわなきゃ」

永遠亭…そこには俺が瀕死の状態の時薬の調合をしてくれた医者？
がいるらしい。そこにはえーりん（医者）とその助手鈴仙。そして
てゐ。輝夜姫が住んでいるらしい。

「わかつてる。じゃあそろそろ行くか」

博霊神社を出てから約1時間後、
迷いの竹林の上空に差し掛かる。

ここは永遠亭の住人によって中に入った者を迷わせる細工がされて
いるらしい。何故かウサギが多々目撃させるらしいが…

俺を気遣ってか俺の代わりに風を操ってくれている。そこまで重症
ではないのだから…

竹林の上空を進んでいく。上空からだただの竹林にしか見えない
のだが…

数分後竹林の中へと降りる。そこからまた数分後、永遠亭らしき建
物が見えてきた。

「ここが永遠亭よ。…あ、鈴仙さん」

そこには何故か制服でうさみを付けた少女がいた。うん。おまい
何か痛いよ。鈴仙と呼ばれた少女はこちらに気付く。

「妃奈ちゃん今日はどうしたの？隣の方は…璃空さん？」

なかなか勘が鋭いじゃないか。

「初めまして。察しの通り璃空だ。鈴仙でいいのかな？あの時はあ
りがとう」

鈴仙に御礼を言う。

「私は何もしてませんよ。御礼なら師匠に言ってください。で、今
日は何の用でしょうか？」

「えーりんさんに兄さんの状態を検査してもらいたいのですが…え
ーりんさんはいますか？」

そう言う中へと案内してくれた。

ここは唯一の幻想郷の病院といったところだろうか。周りを見渡し
ていると、

長い髪を後ろに縛っている女の人が入ってきた。恐らく彼女がえー
りんだろう。

「あなたがえーりんかな？あの時はありがとう。あなたのお陰で命
を落とさずに済んだよ」

深々と御礼をする。

「御礼は妃奈ちゃんから沢山されたからいいわ。それと私はえーり
んではなく永淋よ。八意永琳。伸ばさないでくださる？」

これは失礼。妃奈がえーりんと呼んでいたのだな。えーりんが本名
かと思ったよ。ま、えーりんって呼ばせてもらうがな！

「えーりんさん。今日は兄さんの体の検査をお願いしたいのですが」
「…分かったわ。こちらに來なさい」

軽く不機嫌なのは気のせいかな？

検査されるのがこんなに不安になるなんて…

変な実験とかされないよな？

奥の部屋で色々と検査される。途中険しい顔をしていることから状
態は最悪と察する。多分えーりんの薬でも治らないだろうな。

検査が一通り終わり、

客間に案内され、そこで一時待機するよう言われる。鈴仙はその間
にお茶を出してくれた。

うん、やはりお茶は美味い。

数分後えーりんが戻ってきた。表情から状態はかなり深刻なものだ
と察する。

「結論から言うわ。璃空、あなたの寿命は私の薬でも治せない…消
滅の能力で消されてしまったものは元に戻せないみたいだわ。体の
方はある程度までなら回復すると思うわ。この薬を1日2回、食後

に飲みなさい」

薬を戴く。ほんとありがとうございます…

妃奈を見るとかなり落ち込んでいるようだった。寿命がかなり短くなってしまったことに責任でも感じているのだろうか。いや、純粋に死んでほしくないのだろう。誰だって人の死は悲しむ。そんな妃奈を宥めるように頭に手を置く。

「心配すんな。俺はそう簡単には死なないさ」

ニコツと微笑みながら妃奈の頭を撫でる。

少しは落ち着いたのだろう。釣られて妃奈も微笑む。「そろそろ帰るか。えーりん、鈴仙。ありがとう」

ほんとに感謝しても仕切れない。俺が今生きてるのはこの方達のおかげだ。

「また何かあれば来なさい。でも無理はしちゃだめよ？」

幻想郷の人たちはほんとに良い人たちだ。いつか御礼をしなくてはな…

「解決したら私の薬の実験台になってね？」

…訂正しよう。ほとんどの方々は良い人だ。

「…それは勘弁してくれ。妃奈行くぞ」

逃げるように永遠亭を出る。

「ふふふ、面白い人間だわ」

えーりんは逃げる彼らの背中を見て微笑んでいた。

「ハアハア…まじ洒落になんねえよ…」

実験台になんか誰かなるか！！俺は人間だ！決してモルモットではない。

「クスクス。兄さんはほんと面白いわ」

おまいまで俺をバカにすんなや…そろそろ泣くぞ？泣いて子供のように暴れてやるか？例えるならスーパーとかで小さい子供がお菓子

やら玩具を買ってもらえない子供のように。あ、それはただ捏ねて
るだけか。

「これからどうしようか…とりあえず時間もまだあるし、人里にで
も行くか？」

そう言えば慧音にもあれから会ってない。

「人里かあ…行ってみたいなあ」

うむ、決まりだな。

竹林を抜け、人里へ向かう。

永遠亭（後書き）

いかがだったでしょうか？

璃空の寿命は消滅して元には戻らないものの、えーりんには蓬莱の薬など、寿命を長くすることは出来ます。しかし璃空は人間離れはしたくないのです。まあいきなりそんなこと言われても誰だって困惑しますしねw

お読みなられて頂いてる方々、ありがとうございますm（――）m
次回↓人里へ向かうはずが…？

再び迷子からの…？（前書き）

人里へ向かうはずが再び迷子です。
そこである場所に行き着きます…
そこで待ち受ける運命とは？
あるお方がキャラ崩壊です。

再び迷子からの…？

…さて、ここはどこだろうか。竹林を抜け、人里を目指してたはずなのだがまた迷子だ。

け、決して方向音痴とかじゃないんだからね！

…自分でやってて気持ち悪いな…ほんとこの辺の地に詳しくないだけだ。もう一度言おう。決して方向音痴ではない。

「兄さん…ここはどこ？」俺も知らない…

逆に俺が聞きたいのだが。「いわゆる迷子だ…ん？」前方を見ると花…？向日葵畑か。綺麗な向日葵が一面に咲いている。

うむ、純粹に綺麗だ。

「あの向日葵畑に行ってみないか？あそこで少し休憩しよう」

「綺麗な向日葵ね…」

思わず妃奈も目を奪われる。

妃奈の能力で向日葵畑へと移動する。

数分とたたずに向日葵畑に着く。地上へ降り、向日葵を見る。

遠くで見るより近くで見る方がより一層綺麗だ。

ここまで綺麗な向日葵は自然では咲かないだろう。誰かが手入れをしているのかな？

向日葵に目を奪われていると後方からお姉さんが話し掛けてきた。

「あら、ここに人が来るだなんて珍しいわね」

緑色の髪に向日葵を連想させるような服装、日傘をさしたお姉さん風な…多分妖怪がいた。見た感じ普通に可愛くて良い妖怪。

「こんにちは。俺たちちよつと迷子でね…そしたら偶然綺麗な向日葵畑が見えたからここで一休みしようと思ったんだ。あ、自己紹介が遅れたな。俺は璃空。こっちは俺の妹の妃奈だ。あなたは？」

「妃奈です。よろしく願います」

「そう…私は風見幽香よ」

気のせいだろうか。微かに微笑んでいるように見えた。幽香が向日葵の世話をしているのか？

「よろしく。幽香がこの向日葵たちの世話をしているのか？とても綺麗だね。心が安らぐよ」

「そうね。ほんとこの向日葵は綺麗です。幽香さんに世話してもらってる向日葵たちもきつと喜んでいますよ」

すると幽香は満面の笑顔を見せてくれた。その表情はほんとに嬉しそうで、幽香は花が大好きなのだろう。

「ありがとう。私花が好きな。だからこの向日葵たちを褒められるとても嬉しいわ」

気分を良くした幽香はお茶を出してくれると言い、向日葵畑の近くの大きな気の下に設置されているテーブルとイスの処へ案内してくれた。

お言葉に甘えて戴くことにした。二人分の能力の消費をしている妃奈も少し疲れただろうし、向日葵を見ながらのお茶はさぞかし美味なのだろう。

ほのかに香るハーブの良い香り。そして手作りのバタークッキーの甘い香りがとても幸せなきぶんにさせてくれる。

「処であなたたちは外来人よね？先日鴉が置いてった新聞に書いてあったわ」

「鴉…？ああ文のことか？そうだが…それがどうした？」

「…あなたたちは私たち妖怪を怖がらないの？」

「最初は襲われたりして大変だったが、恐怖とかはない。人間も妖怪もさほど変わらないだろう。生きてることには変わりはないし」

ハーブティーを一口啜る。「兄さんの言ってる通りですよ。確かに妖怪は人間を襲いますが…逆に人間も妖怪を退治しますしお互い様ですよ。それに妖怪全員が悪い方ではないですし」

バタークッキーが気に入ったのか喋り終わると妃奈はまた食べ始め

た。「じゃあそろそろ人里へ向かうとするか。幽香、美味しかったぜ。ありがとう」「幽香さんありがとうございました」

テーブルの上にある程度片付け席を立ち去ろうとしたのだが…

「待ちなさい。あなた能力を持つてるいるわよね？強そうな魔力だわ…ふふふ。強そうな魔力だわ…ふふふ。私と勝負しましょう？」

…はい？何でそうなるんだ。おまいはえs…まさか！？「幽香つてもしかして…ドs…？」

「あら、分かったたの？じゃあ話が早いわね。ちなみに拒否権はないわよ」

さいですか…

「ちよ、ちよつと待つて幽香さん。兄は今怪我をしていて…」

「何ならあなたでも構わないわよ？最近虫やら人形しか来なくて暇だったの。あなたたちみたいに強力な能力を持った者と戦う（いじめる）のは楽しくって…」sだよおまい…こちら能力さえまともに使いたいのに。勝負になるわけもねえじゃんか！…それにこの異様なまでの妖力…そして威圧感から幻想郷でも最強クラスのレベルだろう。うむ、こんな状態ではいじめられ…ああなるほど。それでドsなわけね。おまい絶対弱い者いじめとかするだろ…

「妹に怪我をさせるわけにはいかない。今の俺じゃ相手にならないと思うが…それでも構わないか？」

「に、兄さん何を…」

「大丈夫だ。無理はしない。それにお礼も兼ねて少しくらいは相手にならないと失礼だろ？（少しどころじゃないだろうけど…）」

「でも…」

「決まりね。ただ、死んでも恨まないでね？」

妃奈の心配をよそに戦う気満々の幽香。仕方ない。死なない程度に戦うか…

「妃奈…下がってろ。大丈夫だ。心配すんな」

不安そうな妃奈を何とか落ち着かせる。まあ戦闘は回避出来ないし覚悟を決めるしかないだろう。

「ふふふ…せいぜい私を楽しませることくらいはさせてね？」

「お互い様にな？」

向日葵畑から離れる（花が傷付くのはお互い嫌だから）

能力は花を操る程度だと先程のお茶で言ってたし、能力自体は大したことがないのだろうが…

この速さは異常すぎだろ！！そんな攻撃喰らったら簡単に死ねるよ幽香さん。

「うふふ。うまくかわすわね」

（そりゃあ喰らったら死ねるからね…）

「でも…次は逃さないわよ？」

先程とは比べ物にならないくらいの速さで今度は蹴りを入れる。先程の速さでも化け物並なのにこの速さは異常…直撃は回避しなくてはならない…しかし避けることは不可能だ。腕を上げガードするが

……

バギベキ…

「う……がああああ」

腕の骨は完全に粉碎していた。激痛が璃空を襲う。ガードしたはずなのに衝撃で内蔵の何個かがやられた…

「もうおしまい？つまらないわ…」

「…幽香さんまだ終わってませんよ？」

さすが俺の妹だ。いや、能力でこうなることを予測していたのか？

「え…？」

苦しんでる璃空の姿は消えていった。

そうそれは残像。

「何を驚いてるんだ？お前らしくない。『光符 サンライトニング レーザー』」「ッ！！ちい…『元祖 マスタースパーク』」

光と光がぶつかり合い、物凄い光が周囲を覆う。視界が数秒間奪われる。

次第に視界が回復していくと…

兄さんも幽香さんもその場で動くこともなく、息を切らしていた。どうやら私が視界を奪われている間に攻防を繰り返していたのだろうか…

しかしそろそろ兄さんも限界…スペルカードを2枚使用してしまった。

「そこまです。これ以上は兄が持ちません…」
間に入り戦いを止める。

「まさかここまでとはね…なかなか楽しかったわ。これ以上はさすがに殺し合いになりかねないし、今日はここまでにしましょう（…まさか私のマスパを相殺するだなんて…出来る…）」

「そうしてくれると助かる…（魔理沙と同じ技を使うとは…それに元祖ということは魔理沙はパクったのか？ああやつはほんと色々なものを盗むな…ってか、今日はつてことはまたやるんすか幽香さん…命が何個あつても足りねえや…）」璃空の体調を心配してか、妃奈が近付いてきた。

「兄さん大丈夫？」

「ああ大丈夫だ…ッ！？」

その場に倒れる。やはり無理をしてしまったようだ。激痛が全身に襲いかかる。その場で気を失ってしまった…

どのくらい眠っていたのだろうか。外は薄暗くなっていた。まだ体を起こすことは出来そうにない。

視線を天井から誰かの気配のある方へ変える。そこには幽香がいた。「気が付いたみたいね。体調はどうかしら？」

「まだ力が入らない…だが、話くらいなら出来るぞ」「そう…じゃあひとつ質問するわ。あなた確かに私の蹴り喰らったわよね？あの時何故ノーダメージだったのかしら？」

「ああ…確かに幽香の蹴りは喰らった。（死ぬほど痛かったんだが

な…）だが、俺の能力で無かったことにしたんだ。初めて使ったから上手くいくか不安だったがな…まあ無効化の応用版だな。そのあとは空気やら光を操って残像を作ったわけだが、かなり魔力消費したんだぜ？」

「なるほどね…あなたのそのチートな能力に嫉妬してしまうわ。…なんてね。あ、今妃奈は博霊神社に行ってるわよ」

博霊神社？ああ、報告にでも行ったのか？さすがに何も言わないのは霊夢にも悪いだろうし…

「ところで幽香は何でここに？」

「ここは私の家よ。こうなってしまったのは私のせいだし、璃空が目覚めるまでここにいただけ」

少しは責任でも感じているのだろうか。幽香らしくないな…まあ何だか面白いし少ししいじめてやろう…

「そうだったのか…痛ッ…」

「え？まだどこか痛むの！？だ、大丈夫？」

「…大丈夫だ（ああおもしれえ！。幽香って何気いじりがあるな…）ってか俺もDSな分類に入るかも…幽香は大丈夫なのか？」

「え？私は大丈夫よ。軽い怪我したくらいだし」

「怪我したのか！？大丈夫だったか？」

幽香の肩を掴み心配する。あ、ちなみに動けないとか嘘だからね？w

「だ、大丈夫よ…それよりあなた動けないんじゃない？」「お前のが心配だったんだよ。それに…」

「それに？」

「こんな可愛いレディに傷を負わせてしまい申し訳ない」

「…ッ！！？」

真っ赤になっている幽香。これは楽しいわ。こんな幽香見たことない。（出会ってまだ一日だが…）かなり楽しんだし、そろそろ止めにしておくか…

「さて…そろそろ俺も博霊神社に戻るとするよ」

「え、ええ…わかったわ。（全く何なの？この人間は…怖がるどころかこの私をいじるだなんて…侮れないわ…）でも大丈夫なの？私が送っていきましようか？」「能力は…さすがに無理だな。じゃあお願いするよ」

外へ出ると幽香はいきなり翼を出しやがった。

…おまいそんなことも出来るんかい。

「じゃあ行くわよ。落ちないようにしてね？」

幽香に捕まり、空を飛ぶある程度上空へ行くとそこから物凄い速さで飛んでいった。

「ちょ…おち…落ちるううー……」

上空に璃空の悲鳴が響き渡る。

なんか前にもあったような…

博霊神社へ着き、

幽香に下ろしてもらう。

「うえ……気持ちわりい…」

これで二回目だよ…まじ勘弁してえなあ…

「あ、兄さんお帰り。ちょうど迎えに行こうかと思ってたんだけど…幽香が送ってくれたんですか？ありがとございます」

幽香にお礼する前に俺の心配しろや妹よ…

「いいわよ。じゃあ私は行くわ。また遊びに来なさい」

幽香は先程よりも早く飛んでった。あれでもセ

外へ出ると幽香はいきなり翼を出しやがった。

…おまいそんなことも出来るんかい。

「じゃあ行くわよ。落ちないようにしてね？」

幽香に捕まり、空を飛ぶある程度上空へ行くとそこから物凄い速さで飛んでいった。

「ちょ…おち…落ちるううー……」

上空に璃空の悲鳴が響き渡る。

博霊神社へ着き、

幽香に下ろしてもらう。

「うえ……気持ちわりい……」

これで二回目だよ……まじ勘弁してえなあ……

「あ、兄さんお帰り。ちょうど迎えに行こうかと思ってたんだけど……幽香が送ってくれたんですか？ありがとうございます」

幽香にお礼する前に俺の心配しろや妹よ……

「いいわよ。じゃあ私は行くわ。また遊びに来なさい」

幽香は先程よりも早く飛んでった。あれでもセーブしてたんかい……
やはりおまいは化け物やな……

神社の中へ入り、その日は飯も食わずに寝てしまった。

再び迷子からの…？（後書き）

幽香さんのファンの皆さんごめんなさいm ((m
ってか、

東方の ファンの皆様すいませんm ((m

朝から投稿かなり眠い（ry

紅魔館 前編（前書き）

パクリ要素があります。注意が必要です。
キャラ崩壊？かも

紅魔館へ遊びに来た璃空に待ち受けていた運命とは？

吸血鬼を悪魔と間違っていたので直しましたm(_____)m

紅魔館 前編

朝の温かい日差しで目が覚める。どうやらかなり寝たようだ。逆に寝すぎて疲れたぜ…

「さて、今日はどこへ行くか。まだ組織に動きはないし…あ、そういえばレミリアに紅魔館に遊びに来いと言われてたな。行ってみるか」

布団を片付け、霊夢、妃奈を探す。

が、しかし見当たらない。

どうやら出掛けてるようだ。うむ、仕方ない。一人で行くか。

置き手紙を置き紅魔館へ向かう…

のだが、場所が分からない。

さてどうしようか…

1、妖怪、妖精などに案内してもらう。

2、自力で向かう。

3、幽香の処に行き教えてもらう。

1…まあうん。一番妥当だろう。2…絶対迷う…。3…また戦う羽目になる…

まあしゃあない。とりあえず適当に行ってみるか。んで、妖怪、妖精に出会ったら教えてもらおう。人里は妃奈と一緒に行く。行ってみたいと言ってたし、そのときに慧音や妹紅に挨拶をしよう。

「確か…紅魔館は赤い屋根だったな。（目に悪い気がするが…まあさすが吸血鬼の住む屋敷と言ったところだろうか）」

風を纏い、移動する。

魔理沙がいれば案内してもらえるんだが…

あ、紫がいるじゃないか！ んーどうしたら紫を呼べるのだろうか…あ…あ…

「ゆかりんかわいいよゆかりん」

大声で言ってみる。さあ皆でせーのゆかりん。

「呼んだかしら？」

おおホントに来やがったよ。しかしかなり眠たそうだ。おまいまた寝てたろ？

「久しぶりだな。紅魔館に行きたいんだが紫のスキマで連れてってくれないか？」

「寝たのよ…まったく…せつかく気持ち良く寝てたのに人の睡眠を邪魔しないでくれる？まあいいわ。いくわよ」

するとスキマが開き落ちる。

中は目が複数あり、気持ち悪い…こんなところに丸1日いたら発狂しそうだ。

ある程度落ちると出口が見えてきた。

スキマから出るとほんとに赤い屋敷の屋敷があった。屋敷の外には門番らしき…中国（仮）がいた。

「すいませーん。レミリアに会いに…って」

中国は寝ていた。門番が寝ていて良いのだろうか…大丈夫か？紅魔館。

「中国起きろー。勝手に入っちゃうぞー？」

「うへへもう食べれませんよ咲夜さん…」

こりゃあだめだ…

勝手に入るとしよう。

門番を放っておいて中に入ると同時に物凄い爆音が鳴り響く。
バーンッ

壁が壊れたのだろうか。

煙が上がっている方を見るとそこにはレミリアに似た少女がいた。金髪に赤いリボン、そして赤いドレスを着ている。羽根はレミリアとは違い、骨のようなものに宝石のようなクナイがついていてとて

も綺麗だ。しかしそれで飛べるのだろうか…

レミリア妹（仮）の方を見ているとそこにはもう一人、俺のよく知っている人物がいた。

「魔理沙！？こんなところで何してるんだ？」そう、魔理沙だった。レミリア妹と喧嘩？いや、さすがの魔理沙といえど吸血鬼には勝てないだろう…

「フラン今日は何して遊ぶんだ？」

「もちろん弾幕ごっこ」

フランと呼ばれたレミリア妹は嬉しそうに無数の弾幕を魔理沙に放つ。

「せっかちな。まあ今回も私が勝つがな」

「魔理沙に負けたこと、私はまだ忘れてない。今度は私が勝つんだから」

…おまい以前吸血鬼に勝ったことあんのかよ。もうその時点で人間じゃねえよ！

「一度あることは二度あるぜ？…どうした？弾が私を避けてくぜ？」

「むーこれならどう？『禁忌 クランベリートラップ』」先ほどの弾幕とは違い、今度は魔理沙を狙う弾幕となった。クランベリーを摘む感じに見えるのは気のせいだろうか？

「まだまだこのくらいじゃ物足りないぜ。退屈しのぎにもなりやあしない」

全ての弾幕をかわす。吸血鬼相手に余裕の表情を浮かばせる。

「…『禁忌 スターボウブレイク』これで終わりだよ」

スペルカードを唱えた直後、魔理沙の頭上に上側が赤、下側が紫の虹色の弾幕が無数現れる。これを避けるのはさすがに難しいのでは…ああおまいすげえよ。全てかわしてやがる…おまいもはや人間ではないだろう。

「…魔理沙ほんとに人間？」

「私は普通の魔法使いだぜ。じゃあ今度はこっちから攻めるぜ？」
魔符 スターダストレヴァリエ」

綺麗な星が空一面に広がる。流れ星のように見えて何かお願いでもしたいくらいだ。って、俺ここで見てるだけでいいのかなあ…

「構いませんよ。今のあなたでは妹様の相手は大変でしょう」

紅魔館のPAD長…いやいやサーセンw

メイド長の咲夜が現れた。「…また心読まれたか？まあいいや。あ、遊びに来たんだが…これ終わってからレミリアに挨拶しにいくわ」

「わかりました。では終わり頃にまた来ますわ」

咲夜はその場から突然消えた。何かしらの能力を使ったのだろう。そっぴや咲夜の能力ってなんだろう…今度聞いてみよう。再び空を見上げると星は消え去り、フランが4人になっていた。

「こんな妹が4人もいたら大変だぜ…」

「これで終わりよ」

一人一人違う弾幕を打つ、1人でも避けるのが難しいというのに4人もいるだなんて…

魔理沙もかなりピンチだろう…

「これはさすがにきついぜ。『恋符 マスタースパーク』…！」
ミスティアを倒したスペルカードだ。

マスタースパークは幽香のを真似たのだろうが、その威力は絶大。人間はもちろん、妖怪、吸血鬼にさえその威力は変わらず効く。さすがのフランもこれは…！？

「危ないじゃん。もう少しで大怪我するところだった」無傷ですか…
つか、

分身を盾にしゃがったよ…他の分身も弾幕もマスパで消し飛んだ。さすがだ。

「次の弾幕はどんなのだ？魔理沙はあまり攻撃しないみたいだが…」
「次で終わりにする。『禁忌 レーヴァティン』」

ボツボツボツ

炎の剣を振り回す。

「…弾じゃなくね!？」

お、思わず濃ゆい顔になっちまったじゃねえか!!

ブンッ

思い切り切り付ける。

しかしそれが魔理沙に当たることなく、虚しくも空振る。

「（これはさすがにまずいぜ）…ッ!!」

「まだ遊んでくれるの？でもそろそろ壊れちゃえ」

再び炎の剣を振る。

しかし魔理沙はそれをかわし、フランの頭上へと移動する。

「そろそろ終わりにしようぜ?『魔砲 ファイナルスパーク』!!」

「ッ!!」

ドゴオッ!!

フランがファイナルスパークに飲まれ、飛んでくる…こちらに…!!?

「え!?!ちよ…」

物凄い勢いで迫り来るそれを消し去る。もちろんフランは無事だ。

消したりはしていない。

そして今フランは俺が抱き抱えている状態だ。

「おお璃空じゃないか。来てたのか」

「魔理沙…」

スパーンッ

周囲にはりせんで叩いた。とても…そりゃあとても、さぞかし叩いた本人は最高に気持ち良いだろうと思われるくらいの音が響き渡る。

「い、痛いんだぜ。なにしゃ「もう少して俺まで吹き飛ばふ処だったんだぞ?」…手元が狂ったんだぜ」それ嘘だろ…おまいわざとフランの頭上に移動したもんなあ。

「はあ…まあ良いや。お疲れさん。この子はどうするんだ?」

「璃空さん。私がお預かりますわ。屋敷を守っていただき、そして

妹様を守っていただきありがとうございました」

突然目の前に現れた咲夜。お礼言われるほどのことではない…

何故ならああしていなければ俺が消し飛んだからな。「いやいや、全然構わないけど…ひとつ聞いていいか？咲夜的能力を教えてください」

「能力ですか？時間を操る程度の能力ですわ」

「そうだったのか。ありがとう、ずつと気になってたんでね。…さて、そろそろレミリアの処に行くか。だいぶ時間も過ぎてしまったことだし…魔理沙も行くか？」「いや、これから私はアリスの処に行く用事があるんだ。じゃあ私は行くぜ」

簾にちょこんと座り、魔法の森の方へ（多分…）飛んでいった。

「では屋敷の中を案内しますのでついてきてください」

咲夜の誘導で屋敷の中に入っていた。

紅魔館 前編（後書き）

今回璃空の戦闘ではなく、魔理沙とフランでした。どうしても書きたかったんです（ノA、）

最近魔理沙を出していませんでしたし…

魔理沙、フラン、ゆかりんのファンの方々申し訳ありません…

そして保存していた下書きがなくなってしまい…更新スピードが大幅に遅れてしまいます…

申し訳ありませんm（——）m

GWは遊びまくるのでw

皆様も事故などにお気を付けて楽しくお過ごしください（^^）

/

紅魔館 中編（前書き）

今回は組織に動きが見られます。

そして一人犠牲になってしまった…

更新遅れてしまい申し訳ございませんm(_____)m

…見ていただいている方々が多少なりともいることを願って更新頑張っています（ノA、）

最高に眠い中書いていたので文が変なことになっているかもしれないません…

紅魔館 中編

屋敷の中へ入り、ある程度進むと大きな扉があった。この奥にレミリアがいるのだろう。

雑談だが、途中紅魔館の妖精メイドに何人か会ったがほとんど仕事をサボっていたように見えたのは気のせいだろうか？

「お嬢様、璃空様を連れて参りました」
「入ちなさい」

ドアを開けるとレミリアが座っていた。さすが屋敷の主だ。小さいが威圧感、そしてカリスマ性を漂わせている。

「レミリア遊びに来たぜ。途中色々あったがな」
「わかっているわ。あなたがフランを守ることと屋敷守ることもね」

「？レミリアの能力か？」

「そうよ。私の能力は運命を操る程度の能力」

「（運命？ああそれで俺がここに来ることも魔理沙のスペルを消すこともわかってたわけだな）なるほどな。さて、せっかく遊びに来たんだし、少し雑談でもしようじゃないか」

「ふふふ、そうね。…咲夜」

咲夜は返事をするとその場から消え去ったかと思うとすぐに紅茶持ってきた。

そしてテーブルに紅茶を置き、俺を椅子に座らせる。

「便利な能力だな。じゃあ最近あったことを話すとするか…」

記憶が戻ったこと、そして妹の妃奈のこと、そして組織のことを話す。

「…なるほどね。その組織をあなたは潰すのね？ 私たちも協力するわ」

「ありがとう。しかしくれぐれも無理はしないでくれ。奴らの力は未知だ…今のやつらの幹部は一人一人俺同様…いや、それ以上かもしれない。それに雑魚でもこちらの能力や弾幕相当の力を持っていると思われる。まだ組織に動きは見られないがそろそろ動き出す頃だと思うから気を付けてくれ」

「ふふふ、そんな心配いらないわ。吸血鬼が人間に負けるはずがないじゃない」「油断は禁物だぜ？」

「わかつているわ」

「ならいいが…そうだ！ せっかく遊びに来たんだし、屋敷内を見て回ってもいいか？」

「構わないわよ。…咲夜」

「はい。では着いてきてください。屋敷をご案内しますわ」

「よろしく頼む」

屋敷を案内される。

案内途中に図書館があることが判明したのでそこに行ってみることにした。

どうやら図書館は屋敷の地下にあるらしい。

しかし地下にあつては日も当たらないだろうに…

そんなことを考えているとすぐに着いてしまった。まだそんなに歩いてないはずだが…何故？

「時間を止めて移動しました。時間を短縮した方が良いかと思いついて」

なるほど。かなり便利な能力だな。

さて、ここが図書館だろうか？

ドア自体でかい。

咲夜がドアの前に立つ。

「パチュリー様、失礼します」

パチュリー？ああ先ほど案内されながら話していた図書館にいる魔法使いか。ほとんど図書館から出ないことから動かない大図書館と呼ばれているらしい。

ドアを開けるとかなり広い。周りを見渡しても本ばかりだ。図書館の中部らしきところまで約5分。そこに薄紫の髪色をした少女がいた。こんな日の当たらない場所でも髪が薄紫って…

紫もやしやな。

しかもあんさん細いがな。紫もやし決定や。

「初めまして。俺は璃空。人間の世界から来た外来人だ」

「初めまして。私はパチュリーよ。あなた魔力が高いわね。それに能力もチートだし…私の実験台になってくれないかしら？」

…おい。なんでそうなるんだ…俺は人間だ。モルモットじゃない！
…って前にもこんなこと言ったような…

「却下だ」

「…残念だわ（無理矢理にでも実験台になってもらっわ…うふふ）」
「……（何かよからぬことを考えているような…）」

奥の方から誰かの足音が聞こえてくる。

足音の方へ振り向くと赤髪で翼を生やした少女がいた。

「あ、お客様ですか？私はパチュリー様の使いの小悪魔です」

「俺は璃空。よろしく（小悪魔って名前なのかなあ？なんか長いしめんどいな…んー…こあでいっか）こあ…でいいか？」

「構いませんよ。皆様からそう呼ばれていますので」

挨拶を済ませ、何か本でも読もうかと思っていた矢先、屋敷の外から爆発音が鳴り響く。

「ッ！これは…」

「屋敷の外からですね。少し見てきますわ」

「咲夜待て。俺も行く…多分奴等だ。パチュ、こあ、また今度遊びに来るわ」

「分かりました。お気を付けてください」

「今度来たら実験d「却下だ」…むきゅー」

全くそれしか頭にならないのだろうか…

先程の爆発音が気になる。早く行かなくては。

咲夜の能力で一瞬にして移動する。

するとそこには猛獣…いや、キメラが3匹、そして組織の人間が1人がいた。端っこの方にやられたのか倒れている中国がいた。まあ寝ていたところをやられたのだろうか…

「おやおや…やっと出てきたか。こいつじゃ暇潰しにもなりやあしなかったぜ？」

…訂正。やられたのか…

倒れている中国の頭を踏み、にやりと笑いながら話している。

「美鈴！！（中国の名前）」

「…貴様…その薄汚い足を退ける…殺すぞ」

目の前の組織の人間に殺意が芽生える。

「はッ！貴様に出来んのかよ？そのボロボロの体でよあ」

更に力を入れ美鈴の顔を踏みつける。

ブチンッ…

「なッ!!」

組織の人間…髭でいいや。髭は目を疑った。

消えたかと思うと先程まで踏みつけていた女が消え、しかも踏みつけていた右足が切断されていた。

「ぐ……があああッ」

激痛が走る。片足を失った髭はその場で倒れ込みもがいている。

「美鈴大丈夫か？すまなかったな…咲夜。美鈴を頼む」

「…でもあなたは？」

「俺はこいつらを始末する。咲夜は美鈴を頼む」

咲夜に美鈴を預ける。同時に美鈴の先程の戦闘での傷と踏みつけられた後が消え去る。

傷を無くしたのだ。

ちなみに先程の瞬間移動らしきものは時間を無にし近付いたのだ。

ついでに美鈴を救出する時に邪魔な足を風を操り鎌鼬で切断した。

殺しても良かったが聞かなければならないことが山ほどあるため殺さないでおいた。

「…気を付けてくださいね」

「ありがとう。でも心配はいらないさ。こんな奴に負けるわけがない」

微笑みながらそう言うと殺気丸出しで髭とキメラを睨み付ける。

「…さて、貴様には聞きたいことが山ほどある。まずは貴様らは何故幻想郷を狙う？能力がほしいのか？しかしそれは失敗したんだろ

？」

「……くくく。誰が貴様何かに言うか！キメラ共！殺れ！！」

「ギヤアアアア……！」

髭の一言でキメラ3匹が奇声を発しながら襲い掛かってくる。

「……貴様らには恨みはないが……恨むなら組織を恨んでくれ。『魔剣
クラウド・ソラス』……！」

激しい光と共に獄炎の如く炎の渦が舞い上がる。

視界が回復するとキメラは跡形もなく消えていた。

「嘘だろ……？」

「さあ……次は貴様の番だが……答える気になったか？」　クラウド・ソラスを構え脅す。

「（これが紅様がおっしゃっていた最強の幻想武器……クラウド・ソラス……逃げるのは無理か……）……くくく……俺を舐めるなあ……！」

カチッ

何かボタンらしき物を押した。

その直後……

髭は朽ち果て、核兵器が爆発した並の爆風が巻き起こる。

「……え？」

咲夜が覚悟を決め目を瞑るが爆発はいつまでたつても来ない……

目を開けると爆発は消え去っていた。

「……馬鹿だよ……ほんと……」　組織のために自分の命を投げ出すことまでしなくていいというのに……

クラウド・ソラスをしまい、　咲夜と美鈴を抱き上げ屋敷へと一旦戻る。

紅魔館 中編（後書き）

うーねみいとです。

色々な方言が混じる今日この頃…

美鈴が犠牲になりましたね…美鈴ファンの方申し訳ありませんm（

—）m

そして戦闘が璃空の一方的な攻撃で終わってしまいました…

力が弱まっただけでも組織に通用することを伝えるためにそうしました。

次回予告！！

組織の幹部が紅魔館へ攻め込んできます。

璃空に待ち受ける運命とは…？

紅魔館 後編（前書き）

組織のボス、紅が姿を現します。
一体紅の目的とは…

紅魔館 後編

一段落し、屋敷へ戻る。

美鈴をベッドに休ませ、ついでにフランの様子も見に行くと、丁度良く起きた。怪我も大したことなく、元気そうで何よりだ。しかし起きた途端抱き着いてきた…どうやら助けたことになつたようだ。

…でだ、

今レミリア、咲夜、フランと話をしているのだが…

フランよ、なんでもまいは俺の上に乗っているんだ？しかも離れようとしなのは何故だ？

これじゃまるで俺がロリみたいじゃないか…

「フラン…近い…離れる」

「ええー嫌だよー。璃空は私のこと嫌いなのか？」

おい…頼むからそのウルウルした瞳をなんとかしてくれ…

まだまだ子供だから色気もくそも感じないが正直困る。

「嫌いではないが…」「じゃあいいよね」「…おい」

永遠にこのままのような気がする…

「さて…話を戻そうか。組織に動きが見られた今、奴等の動きは活発になるはずだ。幻想郷に攻めてくることは確実だ。くれぐれも気を付けてくれ。俺はこれから色々回らなければならない…」

「紅魔館は大丈夫よ。私がいる限りね」

「相変わらずだな。しかしレミリアの力は幻想郷でも最強の分類に入るだろうし問題はないだろう」

元々吸血鬼は強いし、レミリアは500年は生きている。戦う術は俺より知っているだろう。それにスペカも強力だから心配はいらな

い。咲夜もフランも強いから紅魔館は大丈夫そうだ。魔法使いのパチュもいるし、今は寝ているがサボリ魔中国もいるしな。

「一つ質問してもいいでしょうか？」

「ん？なんだ？咲夜」

「その組織はどうやって幻想郷に来たのでしょうか。博麗大結界を通って来たわけでも無さそうですし、八雲紫のスキマなわけでもないですし…」

博麗大結界とは幻想郷と外の世界を繋ぐ結界のことだ。この結界を管理しているのが博麗神社の自称楽園の素敵な巫女、博麗霊夢。神社と彼女がいなくては結界は消え去り、幻想郷は消えてしまっらしい。

「あくまで俺の推測だが…奴等は紫の能力を見て真似てゲートのような装置を作ったのだろう。多分今までの技全て真似られてる可能性があるぞ…まあ真似出来ないのもあるだろうがな」

「その通りです。そこまで分かっていらっしゃるだなんて…さすが私を追い詰めたことだけのことはありますね」

「ッ！！」

璃空が言い終わると同時にゲートが開き、白髪でミディアムでオールバックにしている…紅がいた。そして組織の幹部らしき人物が…1、2、3、4…5人か…これはさすがにこちらが不利だな。

「紅…」

「そんなに睨むこともないでしょう。私は別に争いに来たわけではないのですよ。ほら、殺気も感じないでしょう？に、しても…記憶が戻ったという情報はほんとだったのですね。ふふふ、これで役者

が揃ったとしても言うべきですかね」

「御託はいい。貴様の下らぬ野望を止める。組織を潰させてもらう」
「おやおや…血の気が多いですね。満足に力も使えないというのに。あなたの力は今…せいぜい全盛期の6割といったところでしょいか？そんな状態では榊や仁は倒せても私は愚か他の幹部でさえ倒せませんよ？」 榊？仁？…ああ黒（仮）と髭（仮）のことか？
奴等の名前など聞いてなかったからな。

「…榊とやらはどうした？逃げたはずだが？」

「いますよ。ほら、あなたの頭上にね」

「ッ！！」

黒刀を握り、抜刀する榊。抜刀を避けるが追撃が来た。

それを見てか、笑いながら再びゲートを開き、一言呟き紅は消えた。

「幻想郷は頂く」

「紅！待て！…ちッ」

「貴様は行かせん。あのとときの屈辱…今果たす！！」

「（…さてどうするか。紅はもう追うことは出来ない。今は目の前の敵に集中するか…榊の追撃は何とかかわすことが出来たが、そうそう容易くかわすことは無理だ。しかし屋敷内で能力は使えない…屋敷が崩壊してしまう…それに先ほどの戦いで大分魔力を消費してしまった。クラウ・ソラスは消費が激しすぎる…しかも爆発を食い止めるために無効化まで使用してしまった…残りの魔力で倒せるか…？さて、困ったものだ。…そうだ）榊とかいったか？すまないが俺も負けるわけにはいかないんでな…」
折れている短剣を二つ取り出し、構える。

「…何の真似だ？そんな折れた短剣で俺に勝てると思っっているのか？」

「当たり前だ。しかし見くびるなよ…これは最高の双剣だぜ？」

「…くく。俺を舐めるなあ!!」

物凄い勢いで襲い掛かってくる櫛。黒刀を振り下ろす。
ガギンッ

「なッ…」

黒刀が折れた。

短剣だったものは雷と水の双剣、雷水刃と化していた。

折れた先から雷と水を片方ずつに分け、その力を圧縮し、爆発的な威力が生まれたわけだ。

「レミリア、咲夜、フラン。すぐ終わらせるから待っててくれ」

「わかったわ」

「分かりました」

「うん」

「…でも…」 「…そういうわけにもいないのよ（わ）（よ）」
三人の方を見るとそこにはキメラが…ざっと10匹はいる…しかも
先ほどのキメラとは違い色が…赤い…あれは見かけ倒しではないだ
ろう…それにあの装備は…何かしらのスペカの真似だろうか…

「気を付ける！そいつらはただのキメラじゃ…ッ!!」

「俺を無視すんなよ。まだ終わっちゃいないぜ？」

黒刀が折れたにも関わらずもう一つの黒刀で切りつけてきた。

「こっちは大丈夫だから璃空はそっちに集中して」

「…わかった。怪我するなよフラン」

「うん」

「さて…あまり時間はかけられない。さっさと終わらせる」

「仁の野郎との戦いで魔力もあまり残ってないというのにそんなこ
とが出来るのか？」

こいつら…仁を餌にしやがったな。仲間を見殺しにしやがった…これでも計算の内ってことか。

「てめえら…仲間を何だと思っているんだ！」

「…仲間？あいつは俺の友人だ。しかし命令は絶対だ…仁が命をかけたんだ。無駄にはしない！！」

シュンッ

先ほどよりスピードが上がっている。しかし…仲間を平気で見殺しにする紅は…許すことが出来ない！絶対組織を潰す！！

…しかし、今は袖に集中しなくては…早めに片付けでレミリア達の援護に向かわなくてはいけない。

一太刀をかわし、反撃しようとしたのだが…

「油断か？」

「ッ！！」

シュッ

先ほど折られた黒刀を至近距離で投げ付ける。

双剣を振り下ろしている今防ぐこともかわすことも不可能だ…

ザクッ…

右肩に突き刺さる。

服が血で滲む。

「璃空！！」

「大丈夫だ。心配はいらないから集中しろ」

…とは言ったものの、
右肩が痺れていやがる…

黒刀を見るとバチバチと電気が帯びている。どうやら投げる際小細工でもしたのだろう。しかしこれはまずいな。抜いたら出血が止まらんだろうし。しかしこのままでは十分に戦うことは出来ない。

「くくく…麻痺して十分に戦うことは出来ないだろう」

「…俺もあまくみられたものだ」スツと立ち上がると、何事もなかったように構える。

「！？貴様…無効化したのか？」

「無効化も魔力の消費が激しいからな…そんなことはしない。ただ電気を操って空中に流しただけだ」

黒刀を見ると確かに電気は消えていた。

「…ちツ…だが傷は治らないのだろうか？それだけで十分だ」

ジャキ…

黒刀をしまい、前と同じ装飾銃を取り出す。

「またそれか…芸がないな（しかし魔力もかなり消費してしまったから無効化もそう何度も使えない。これは早めに決着つけないとまずいな…）」

「油断していると死ぬぞ？『雷弾 レールガン』」

普通の弾とは違い、物凄い速さで飛んでくる。聞いたことがある…確か電磁誘導で弾のスピードが上がるとかなんとか前読んだ本に書いてあったな。弾自体には電気が帯びないように樹脂を塗っておくとかも書いてあったが…これは弾にも電気が帯びてやがる…当たった対象物に貫通と麻痺をさせるためだろう。

レールガンを雷刃で切る。当たる前にレールガンの電気を操り、揉み消す。

弾は切り付けたことで消滅した。

「ちツ…属性はやはり無効化されるか…だが、無効化もいつまで持

つかな？『千爆 サウザンド・バーストブレード』」にやりと笑い
二つの装飾銃から千もの弾が放たれる。
しかし直前それは消え去る。

しかしやはり限界が近いのか息が上がってしまう。

「ハアハア…ちい…（さすがに能力の使いすぎか…魔力もほとんど
ない…か。早めにけりをつけないと俺がもたない…）これで最後だ」

距離を無にし、榊の目の前まで移動する。
そして雷水刃で斬りつける。

ブシュウ…

生々しい多量の血が床一面に飛び散る。

致命傷を負った榊はかるうじて立っている状態だ。

「ぐ…このままやられ「すまない…」ッ！」

雷水刃を心臓に突き刺す。榊はもがくがだんだん動きも弱くなり息
耐えた。

「俺にも守るべきものがある。俺は負けるわけにはいかないんだ…」
その顔はとても悲しい顔をしていた。殺すことなく解決出来れば良
いのだろうが…榊の決意は本物だ。たとえ説得してもだめだったろ
う。それに…最後のあの殺気は危険だと悟ったのだ

「レミリア！そっちは…って余裕か。さすがだな」

「私を誰だと思っているの？このくらい余裕よ」

キメラは全員見るも無惨な姿になっていた。

そこには体が真っ二つになっているものもいれば頭が切り裂かれた
キメラが山積みになっていた。

多量の血が周囲に流れ、屋敷は真っ赤に染まってしまった…血の独

特の匂い、そして死体の無惨な姿に気がおかしくなりそうだ…

ピク…

戦いが終わり集中を切らしてしまい誰一人気付かない。

この時まだキメラが一匹生きていた。

そして…レミリア、咲夜、フランに向かって璃空のスペルカード『
雷符 雷神の逆鱗』をマスパ化したレーザーらしきものが放たれる。

「ッッッ！」「ッ」

「く…間に合うか…」

レミリア達に当たる直前でそれは消え去る。

何とか間に合ったようだ。そしてレーザーを放ったキメラを見ると
絶命していた。どうやら最後の力だったようだが…

フラ…

「（やべ…完全に魔力使い果たした……倒れ…」

バタッ

能力の使いすぎと疲労、そして体の負担が思う以上に大きく、その
場に倒れてしまった。

紅魔館 後編（後書き）

かなり眠いです…

眠い中更新となりますのでかなり脱字がひどいかと思います…
申し訳ありません。

能力を使いすぎてしまった璃空は倒れてしまいましたね。

かなりの魔力も消費しましたし、

なんかチートのくせによく倒れますねw

申し訳ないですm(_____)m

では次回もよろしく願いします＼(^ ^)／

キャラ設定（前書き）

遅くなりましたがキャラ設定です。

キャラ設定

名前 璃空

種族 人間

危険度 極低

人間友好度 高

主な活動場所 色々w

能力

エレメントを操る程度の能力

無を操る程度の能力

召喚する程度の能力

武器

短剣

こーりんにもらった短剣だが、組織の幹部、黒（仮）との戦いで折れてしまい、使用不可になったのだが…？

クラウド・ソラス

光と炎の魔剣。最高クラスの威力を持つ。その威力はほとんどのものを一撃で蹴散らすほど。最強の幻想武器。しかし魔力の消費が高く、なかなか扱いづらい。

スペルカード

『風符 烈風陣』

身に風を纏い、身体能力の上昇。しかし上昇するのは主にスピード。攻防共にあまり上昇はしない。

『風雷 起風発雷』

竜巻を複数起こし、雷撃を放つ。威力はそれなり。

『雷撃 雷神の逆鱗』

相手に落雷を落とす。最大級の威力、スピードを誇る。かわすことはまず困難だ。しかし消費が激しいため継続して使うことは出来ない。

『炎符 獄炎門』

自分の周りに獄炎を出す。攻撃を全て焼き払い、防ぐがあまり長時間持続させると人間の丸焼きが完成する。また、これは自分の周りだけでなく、500m以内ならばそこに出すことが出来る。

『返符 燕返し』

弾幕や飛び道具を全て相手に返す。しかも2倍にして返すおまけ付き。だが、肉弾戦ではこのスペカは無力。

『魔炎 エクスプロージョン』

巨大な爆炎を相手の頭上に出現させる。

広範囲に効果的なスペルカードだ。威力も高い。しかしこれも消費が激しい。

『光符 サンライトニングレーザー』

魔理沙のマスパを真似て光を操ったスペカ。

威力はまあそれなりですね。真似ている分他のスペカより威力は無い。

『魔剣 クラウ・ソラス』光と炎の魔剣。スペカとして使用も出来

る。基本的にスペカを使用しなくても念じれば出せる。（魔力が大幅に消費される）

『爆水 リヴアイアサン』 巨大な波を出現させ、一面一体を飲み込む。ちなみに水は海水ね。しょっぱいから注意。『封符 完全なる世界』

エレメントの能力を駆使し半径500mにも及ぶ結界を張り、中にいる者に弾幕の嵐が襲い掛かる。

『無効化』

これはスペカではなく、そのまま使える能力。対象物を無効化する。

『召喚』

これもスペカではない。

色々召喚する。

例 幻獣麒麟

人物

基本的に自由気まま。

髪型はミディウムでツートン。フェイスラインがダークブルー、他は茶髪。服はパオと呼ばれる白い服。

人のためなら平気で命を投げ出すことが出来るが、よく妹の妃奈に怒られる。性格は温厚だが、多少天然なところも…

一時的に記憶喪失だったが、記憶が戻り過去を思い出す。それに伴い、自分の寿命の消滅。組織のくだらぬ野望を止めるために戦う。妹のために、人間の世界のために、そして幻想郷のために…

目撃報告例

最初は弱いやつだなと思ったんだが、実は最強クラスの力を持っていたんだ。でもその力を悪用しないし、良い奴だぜ。

（霧雨魔理沙）

最初助けてくれてありがとう。おまいも良い奴だぜ。

私以上の力を持った人間がいるだなんて…また戦いたいものだわ。
（風見幽香）

ゆ、幽香さん…もう戦うのはやめてほしいです…

落下していた処を助けてくれた。壊したくない人間。（フランドール・スカーレット）

壊さないでください！！まあ無事で何より名前 妃奈

種族 人間

危険度 極低

人間友好度 高

主な活動場所
博麗神社、人里

能力
エレメントを操る程度の能力
予知する程度の能力

武器

ダークスレイヴ
抜けば人の血を吸わずにはおかない魔剣。何故妃奈が持っているか

は不明だが、威力は最高クラス。リスクが高く、自分の血の代わりに多量の魔力を持って逝かれる。しかし、その代わりに力を貸してくれる。

スペルカード

璃空とほぼ一緒。エレメント系のスペカなら使える。

『未来予知』

そのままの意味だが未来を予知出来る。もちろんスペカではない。

璃空も妃奈も最強クラスのスペカを多々持っているが、消費が激しいため、あまり使用することはない。また幻想郷では力をセーブしてスペカを使用する。

人物

割としつかりしている。無茶をする兄が心配でならない。どちらが上かわからないくらいだ。

髪型は肩ぐらいで茶髪。服は鈴仙から借りている。

組織に拉致されたが璃空によって救出される。しかしその時に能力の暴走により兄が重症を負ってしまったため、幻想郷へ連れていくことを決意。兄の記憶を無くし、傷が癒えるまで組織に一人で立ち向かっていた。（時折紫の力を借りていた）

目撃報告例

家事は手伝ってもらえるし、楽でいいわ。家政婦として雇いたいくらいよ。

（博麗霊夢）

あの…家政婦はちょっと勘弁してください。

何事にも真面目ね。組織に一人で立ち向かうのは無謀だったけど、

彼女の力は私をも凌ぐ力よ。

（八雲紫）

紫さんのおかげですよ。それに私はそんなに強くありません。

人里で何度か見掛けました。妃奈さんの力は強力です。あの大妖怪八雲紫よりも強いとなると…今度東方求聞史記に書こうと思います。

（稗田阿求）

あ、阿求さん…今度人里へ行くときは気を付けなくては…

キャラ設定（後書き）

最近疲れて更新遅いつす…

申し訳ないですorz

番外編 前編（前書き）

番外編です。

魔理沙、アリスが主です。

番外編 前編

何だろう…

いつも突然来て、物は壊すし、私の大事な本は盗んでいくのに…この気持ちは…

私、アリス・マーガトロイドは紅茶を一口啜り、溜め息をつく。最近よくあいつのことを考えてる…

このモヤモヤ感はずいぶん嫌で鬱になってしまっただ。

昨日あいつが来たばかりなのにどこか寂しい…

「今日は来ないのかな…」

両手を顔に付け、また溜め息が出てしまう。

……

って私は馬鹿だろうか。

何であいつのことを考えてるのよ。

べ、別に好きとかじゃ……好き……じゃ……

自分の気持ちがよく分からない中、あいつの声が家の中まで響いてきた。

「おい、アリスー？遊びに来たぜ」

私、霧雨魔理沙は昨日もアリスの処に遊びに来た。最近このモヤモヤは何なのだろうか…

アリスといると楽しいし、もっと一緒にいたいと思うが…これは友達としてなのだろうか…？

それを確かめるために今私はアリスの家の前にいるわけだ。

そしてアリスを呼んだのだが……

返事がない……

もう一度声をかけてみる。

「アリスー？いないのかー？」

ガチャ……

やっとドアが開く。

と、いつてもアリス本人ではないだろう。アリスは魔法使いで、私やパチュリーともまた違う系統で、人形を操れる。

そしてアリスが操っている上海人形がいつも出迎えてくれてるわけだが……

「魔理沙……？どうしたの？」

どういうわけか今日はアリスが出迎えてくれた。

正直嬉しいが戸惑いが隠せない。

「ア、アリス？えつとな……あ、遊びに来たんだぜ」

何とベタな答え方だろうか……我ながら情けない……

魔理沙が来た……

ほんとに来るとは思わなかった。

今日はどうしたのだろうか。昨日も遊びに来たのに……まさか会いに来てくれたとかじゃないよね……？

返事をしなかったからか、もう一度声が聞こえてきた。

「アリスー？いないのかー？」

いつもは上海人形を出迎えに出すけど…
ちよつと行ってみようかな。

……

ガチャ…

ドアを開けるとそこには白黒の魔法使い、霧雨魔理沙がいた。
私がどうしたの？と聞くと彼女は少し戸惑いながら

「ア、アリス？えつとな…あ、遊びに来たんだぜ」

彼女が戸惑う処なんてあまり見かけない。もう少しいじめてみよう
かな…

「昨日も遊びに来たじゃない…」

「あ…そうだったな。じゃあ本を借りに来たんだぜ」

「…本はいつも盗んでいくじゃない……」

「う…」

ふふふ、

魔理沙はほんとに面白いわ。彼女と一緒にいると幸せ。でも素直になれずいつもツン…としてしまう。でも彼女はそんな私を嫌いになるわけでもなく、いつも遊びに来てくれる。そんな魔理沙と出会ったのは…まだ魔理沙が小さい頃かしら？ここは幻想郷の人里。人間が暮らす場所だ。その中でまだ幼い少女の怒鳴り声が響く。

「もういい!!」

勢いよく家を飛び出し、そのまま人里を離れる。私の家は人里で小さな道具屋を営んでいた。霧雨店という何ともシンプルな店はあまり私は好きにはなれなかった。

私は魔法について最近興味を持ち、私の店で働いてるこーりんに色々話を聞いた。

少しだが魔法についての知識も付き、簡単な魔法なら出来る程度になった。

こーりんも驚くほどだった。多少ながら魔法のセンスがあったのかな？

自信過剰になりすぎもよくないだろうけど、少なからず他の人間よりはセンスはあると思う。

そして…

何故私が家を飛び出したかというと…

私の両親に魔法のことをバレてしまったのだ。

そして魔法のことを学ぶのはやめろと言われ…

逆に前から疑問に思っていたことを聞いたのだ。

「何で家には魔法の道具は置いてないの？」

道具屋なのに魔法の道具…マジックアイテムが一つも置いてない。

「魔理沙…人間は神並の力を手に入れてはいけないわ…」

「意味が分かんない」

「人間が魔法を学ぶ必要はないんだ。強力な力を手に入れてしまつたら…人間は自分の欲でこの世界を消してしまう」

言ってることが分からないわけではない。

でも私は素直になれず

思わず家を飛び出してしまったわけだ…

今更帰ることも出来ないなのでこのまま家出しよう…

行く宛もなく、

とりあえず魔法の森に行こう。

あそこは不思議な茸や色々な物があるし、
暇潰しになる。

1時間後、

魔法の森に辿り着く。

相変わらずここは不思議だ。

でも妖怪が出るからあまりうろつろも出来ない…

いつもはこーりんが着いてきてくれるから安心だが、今回はいない。
妖怪はどこか、妖精に会うのも危険だ。

さて…魔法の森に来たのはいいものの、

どこに行こうかな。

あ、そういえば魔法の森に不思議な家があるのを聞いたことがある。
そこには人形が勝手に動いているとか何とか…

どうしても好奇心で行ってみたいと思ってしまい、すぐ行動する。

魔法の森の中心部らへんに一軒だけ聳え立つ、小さな一軒家があった。
た。

驚くことにほんとに人形が動いている…

…よし、中に入ってみよう。

「お邪魔します」

ノックもせず勝手に入る。そこには私の好奇心をくすぐる物ばかり

あつた。

魔法の書や人形、その他諸々あつた。

すると二階から声が聞こえてくる。

「…誰？」

外見は私より身長があり、歳はあまり変わらないくらいだろうか。

「人が住んでいたのか。人形が勝手に動いているから入ってみたんだ」

「はあ…それは不法侵入よ。迷ったわけでもないんでしょ？」

「もちろん。私は霧雨魔理沙。よろしく」

「自己紹介も遅いわね…まあいいわ。私はアリス・マーガトロイドよ」

「アリスか。ところで…」

「何よ？」

「お腹が空いた…」

ギュルルルウ…

思わず笑ってしまった。

いきなり入ってきた女の子は私を怖がることもなく、お腹が空いたなどと言ったのがあまりにもおかしく笑ってしまった。

「うふふ、中に入りなさい」

それからというもの魔理沙は遊びに来ることも多くなった。

ドアは何度も壊すし、実験台にされるし、本を盗まれたりで大変だったけど、魔理沙は私の一番仲の良い友達となった。

番外編 後編

魔理沙を家の中に入れ、いつものように紅茶を出し、二人で本を見ている。

だが…

会話がない……

いつも本に夢中になり会話はあまりしないのだが…
今回は気まずさが漂ってる。

どうしよう…

このままじゃだめだよね…

「魔理沙…」

「アリス…」

同時に名前を呼ぶものだから更に気まずくなる。

「な、何？」

「いや…アリスこそなんだ？」

「い、いや…先に魔理沙言いなさいよ」

「…ちよつと出掛けないか？」

「出掛けるって…もう夕方よ？」

「アリスを連れていきたいところがあるんだ。嫌か…？」

「い、嫌なわけじゃない」

何ともぎこちない会話だが、

二人は外に出掛けることになった。

「アリス…」

「何？」

「私の後ろに乗りな」

「？別にこのままでいいわよ」

「いや、それじゃだめだ。遅くなっちまうからな」

ムッ…

それは私が遅いって言いたいわけ…？

「…わかったわ」

私は渋々魔理沙の後ろに乗る。

でも…こんなに近くにいれるだなんて…
な、何？このドキドキは…

「アリス、飛ばすからしっかり捕まってるんだぜ」

「え…？」

直後物凄いスピードで飛んでいく。
落ちないようにしがみつくが…

やだ…

まだドキドキしてる…

これって…

ふと思い出す。

博麗神社に遊びに行ったときに霊夢に言われたこと。「あなた魔理沙が好きなんでしょ？何で告白しないのよ」

「だって…魔理沙が私のことどう思っているかわからないから…」

「はあ…それじゃいつまでたつても変わらないわよ。まあ…でも魔理沙はあなたのこと嫌いではないし、むしろ…」

「むしろ…？」

「あとは自分で頑張ることね」

「…いじわる」

30分が過ぎた頃だろうか、周り一面は暗くなってしまっていた。月が二人を優しく照らしている。

「着いたぜ。どうだ？星が綺麗だろ？この前偶然見付けたんだ」

「…ほんと綺麗ね」

そこからは夜空一面に輝く星空が見える。一つ一つ力強く輝く星たちは見た者の目を釘付けにするほどだ。

こんなに綺麗に星空が見れる場所は幻想郷にはないと思うほどだ。

「ここは星降りの丘っていつてな、星空も綺麗だがよく流れ星が見れるんだ。まあ星降りの丘ってのは私が付けたんだがな。なかなか良いところだろ？どうしてもアリスと一緒に見に来たかったんだ」

なんで私に見せたかったんだろう。疑問に思い思わず聞いてしまう。

「何で私に見せたかったの？」

「それは…ア、アリスが…」

好きだから」

「…え？」

…ずるいわ。

魔理沙はいつもそう。

魔理沙は真っ直ぐで、私には眩しいくらいで…魔理沙と出逢えて私は毎日が楽しくなった。魔理沙が来る日を私はきつと楽しみにしてた。

あなたはいつも本を盗んでいくけど…

私の心まで盗むだなんて…ずるいわ。

責任取ってよね…

「魔理沙…あのね」

「な、なんだぜ？」

「わ、私も魔理沙のことが好き…」

「い、いや！私の方が好きだぜ！！」

「な、何よ！私の方が好きに決まってるじゃない！！」

「大好き」

「大好き」

「大好き」

「大好き」

「大好き」×10

「「はあはあ…」」

「「ふふふ……大好き」」

満天の星空の下でどちらからというわけでもなく、自然と唇が重なる。

…

……

ハッ!!

「い、今私たち…」

「え? あ、ああ…」

「キスをしたわね。しかもとてもふかい、ディープキスを」

ふふふと扇子で口元を隠しながらスキマを上半身だけ出している八雲紫がいた。気配がなかったことからスキマから見ていたのだと気付く…

何とも恥ずかしい…

「ゆ、紫!? 何でお前がここにいるんだ?」

「あら、面白そうなことがある処にはどこだって行くわよ」

「見られた…」

真っ赤になるアリスと多少赤くなりながらも平常心を保つ魔理沙、そしてそんな二人を嘲笑う紫。

「アリス。そろそろ戻ろうか」

「そ、そうね」

「もういいのかしら? ロマンティックな夜はまだ始まったばかりよ?」

うふふと此方を見ながら笑う紫。正直一発殴りたいぜ…

「お前がいるから私たちが帰るんだよ」

「そうなの? もっと見てたかったけど、そろそろ私は消えるとするわ」

「…消えたわね」

「そうだな。じゃあそろそろ帰」待つて「…え？」

少しずつ近寄るアリス。

その距離はだんだん縮まり、近すぎて相手の息遣いも聞こえるほどに。

「さっきのは無意識だったから…」

「え…？」

今度はアリスからしてきた。素直に嬉しかった。

いつまでもこの想いを忘れない。

私はアリスを幸せにする。

この星空にそう誓うよ。

なあアリス、

お前がいいなら私…

「アリス、一緒に住まないか？」

「え？きゅ、急に言われても…」

「嫌か？」

「嫌な訳ないじゃない！」 「ふふふ、じゃあ決まりだな」

星降りの丘で二人は自分の想いを相手に伝えることが出来た。

それはすぐに幻想郷に広まり、星降りの丘はカップルが多く集まる場所となった。

もちろん広めたのは射命丸文だ。

そして二人に懲らしめられたのは言うまでもない。

え？そんなことより、

それから二人は仲良くしているのかって？

そりゃあ…ねw

激熱ですよ

それでは…光の屈折や空気をちよいといじってステルス状態にしていたわたくし、璃空からの報告でした。もちろん最初から最後まで見ていました。

これは内緒ですよ？

バレたら文みたいに懲らしめられ…

ってあゝあゝ！！？

「ゆ、紫…！？」

「良いことを聞いたわ。これはチクらせてもらっわよ」

「Nooooooooo！！！」

番外編 完

番外編 後編（後書き）

如何だったでしょうか？

多少知り合いが見ているので羞恥心というかなんというか…w
今回は控えめにしておきましたwww

今度書くことがあれば派手に行きます！！

あ、

そろそろ主人公がチートになります。つつか、最強になります。
そして組織に動きがあります。

妖怪化（前書き）

八雲家に運ばれた璃空は…おそw…

少しずつチートになっていきます。

妖怪化

どのくらい眠っていたのだろうか。外は完全に暗くなっていた。起き上がろうとするが、体が思うように動かない…

かなり無理をしてしまったようだ。また妃奈に怒られるな…

妹に心配ばかりかけてる俺は兄として失格だな…あまり心配をかけないようにしないとな。

上半身に力を入れ何とか起き上がる。周囲を見渡すとそこには薬と水がテーブルに置かれ、その横には点滴があった。

そしてベッドに覆い被さるようにして寝ている…

妃奈がいた。

どうやら俺が寝ている間ずっと傍にいてくれたのだろう。今はさすがに疲れたのか寝て…いない…

「…狸寝入りはやめろ。起きているんだろ？妃奈」

「あれ？バレちゃった？何でわかったの？」そりゃあ兄弟ですもの。分かりますとも。

「しかし…俺はどのくらい眠っていたんだ？」

「半日くらいだよ？まだ魔力も回復してないし、体の傷も癒えてないんだから安静にしててね？」

「わかってる。ところで何で妃奈がここにいるんだ？そしてここは…？」

「能力で予知したんだけど…こつちも組織に絡まれちゃってね。なかなか行けなかったの。ここは紫さんの家だよ。最初にえーりんさんを紅魔館に呼んで見てもらって、手当してもらってからこつちに連れてきたの」

「そうだったのか…妃奈は怪我してないのか？」

「無傷ではないけど大丈夫だよ」

どうやら俺が襲撃を食らってる間に幻想郷に攻め込んで来たらしいのだが全て追いついたらしい。小部隊複数だけを送り込んだらしいのだが、場所が場所だったらしく今の処被害はない。

とりあえず様子見といったところだろう。

小部隊といってもキメラ2匹に組織の奴ら2人を5組だけだった。

場所は太陽の畑、人里、魔法の森、永遠亭、地霊殿。

太陽の畑は幽香がいるからまず問題ない。人里は慧音さんや妹紅がいる。あの二人なら楽勝だろう。魔法の森にはアリスや魔理沙がいるから大丈夫だ。永遠亭にはえりんや鈴仙、ニート姫にてゐがいるからまず問題ない。そして俺は行ったことないが地霊殿には地霊殿の主、古明地さとりとそのペットがいるから大丈夫だったらしい。そして俺と妃奈の処には幹部が来たわけだ。妃奈はそのとき霊夢と一緒に買い物に行く途中だったらしい。一人じゃなくて良かったとほっとする。

例え組織が幻想郷に攻め込んで来てもまず負けることはないだろう。しかし被害計り知れない…多くのものが死ぬことになるだろう。それだけは何とか食い止めなければならない。それが俺の唯一取れる皆への恩返しだ。

「さて…今日はもう寝るか」

「うん、ゆつくり休んでね」

妃奈はそう言うのと部屋を後にした。

俺はそのまま横になり深い眠りにつく。私、妃奈は朝早くに目を覚ます。それには理由がある。家事を手伝うためだ。泊めて頂いてるのに何も手伝わないのはJK失礼だからだ。

こう見えて実は家事が得意だったりもする。

布団をたたみ、紫さんの式神の八雲藍さんのところへ向かう。

といっても彼女は家事を一人でこなしてしまうほど家庭的で私がやることはほとんどないだろうけど…

考え事をしてしていると藍さんのところへもう着いてしまった。ちなみに彼女には尻尾がある。彼女は九尾の妖怪であるからだ。尾が多いほど強力と言うのだから彼女もかなりの実力者であることが分かる。それを従える紫さんは…化け物クラスですね。

ああその尻尾でもふもふしたい…

「…藍さんおはようございます」

「妃奈か。早いな。どうしたんだ？（何だあの目は…）」

彼女は今料理の最中で一度此方に視線を向けたがすぐ料理の続きを始めた。

「泊めて頂いてるので何かお手伝いと思ったのですが…（も、もふもふがしゅ）」

「そこまで気を遣わなくても構わないさ。妃奈はゆっくりしてて構わないよ（何か身の危険が…悪寒がする…）」

やはりそう来ましたか。でも実際料理は藍さん一人で十分。

「でも…あ、じゃあお皿並べておきますね（もふもふしたいけど我慢しなきゃ…）」

「働き者だな。助かるよ。ありがとう（狙いは何だ…？そのキラキラしている目でこっち見んな！）」

も、もふもふ… ああもふもふがあ…

壊れた思考を元に戻す。

お礼を言わなければならないのは此方なのに…
私たちは色んな方々に親切にもらっている。ほんとに有難いことだ。

…皿を並べることはすぐ終わってしまった。

そろそろ皆起こしてこような。

まずは…橙を起こしに行こう。橙の処へ行く間に少し橙について紹介しておこうかな。

橙は藍さんの式神で化け猫の妖怪。自分の式神なのに藍さんは橙のことが大好きで仕方ないらしい。よく、ちええええん！！

と叫んでるほどだから相当好きなのだろう。自分の子同然なのだろう。

まあいいや。

説明してる間に橙の寝てる部屋の前に着いたし。

「橙？入るよー」

スッ

襖を開けるとまだ寝ている橙がいた。

寝顔は可愛らしい小さな女の子。
何だか妹みたいだ。

「ほら、橙起きなさい」
布団を奪う。

「うう…まだ眠いよあ…」

布団もないのに丸くなりまた寝ようとするので…
橙の耳に息を吹き掛ける。すると橙は驚いて飛び起きた。

「ふにゝやあ!？」

「ふふふ、橙朝よ。早く起きないと藍さんに怒られちゃうよ？」
「ハアハア…み、耳はらめえ…」

橙は耳が弱点だったりする。この反応が楽しくってついやってしま
う。…もしかして私ってSなのかな?「起きないのが悪いのよ。じ
やあ先に行ってるね」

さて、

璃空兄さんだ。

多分起きてるだろうけど…ちなみに紫さんはスキマの中だから起こ
すにも起こせないわけだ。ご飯になれば起きてくるだろう。

橙の部屋を後にし、兄さんの所へ向かう。屋敷の中は広く、最初は
迷子になるかと思ったけど、1時ほど屋敷内を歩き回ったら覚えた。

「璃空兄さん入るよ」

スッ

襖を開けるとベッドに座っている璃空がいた。
やはり起きていた。

「妃奈か。もう朝飯か？」

「うん。だけど歩ける？」

「病気扱いするなよ。1日寝たらだいぶ良くなったから大丈夫だ」

「なら良かった。じゃあ先に行ってるね」

俺は約1時間前に起きたのだが、

薬と睡眠のおかげでだいぶ良くなった。

魔力も8割は回復したし、体の傷も癒えた。さすがえーりんの薬だ。
昨日は起き上がることも辛かったのが今は普通に起き上がるほどだ。

体を起こし、窓の方へ行く。

外からは小鳥の囀りが聞こえる。

「綺麗だな…そういうえば今あいつらは何してるんだろうか…ここに
来てまだ1週間もたっていないがあいつらに会いたいものだ」

璃空は空を見ながら人間界での学校の友達のことをふと考えていた。
ちなみに俺は大学生だ。一応な。組織に狙われてからは不登校にな
ってるが…あまり気にしてない。生活が崩されたのは恨むが…

空を見ながらそんなことを考えたらだいぶ時間が過ぎてしまっ
ていた。

ベッドに座ること数分後妃奈の声が聞こえてきた。

どうやら起こしに来たのらしい。

軽く会話し、妃奈が出ていってから後を追うように俺も部屋を出る。

そういや…

飯食べる場所ってどこだ？ この家の内部が全く分からない…

これは困ったな…

下手に動いても…ん？

すると奥からまだ眠たそうな…猫が歩いてきた。あの子に案内してもらおう。

「おはよう」

「ふあ…あ、璃空しゃまおはようございます。どうなされたんですか？」

「いや…屋敷内が分からないから案内してもらおうかなあって思ってたんだ」

「そういうことですか。確かに紫しゃまのスキマで来ましたし、ずっと寝てましたもんね。分かりました。案内は私、八雲橙にお任せください」

橙か。

しかし変わった名前だな。ちえんだなんてあまり聞かないな。

橙と会話しながら歩いていると、

あつという間に着いてしまった。

そこには朝から豪華な食事が用意されていた。

そこには妃奈と紫、そして…九尾の妖怪がいた。

九尾の方を見ていると妃奈が紹介してくれた。

「あ、兄さんこちらは藍さんだよ」

「妃奈から紹介があつたが、八雲藍だ。よろしく」

「分かっていると思うが俺は璃空。よろしく」

軽い挨拶を済ませ、食事を頂くことにした。

全て上品な味で朝なのにくらでも食べれるくらいだ。

そして食事を済ませお礼を言い、朝考えていたことを紫に言ってみることにした。

「なあ紫、人間界に一時戻れることは出来るのか？」

「出来るわよ。いきなりどうしたの？」

「朝空を見ていたら大学の友達のことを思い出してな、懐かしくなつたんだ」

「ふふふ、あなたらしくないことを言うのね。でも今はまだ組織と緊張状態が続いてるから今は無理そうね」

「確かにな。さて、今日はどうしようか…各地を色々見て回るか」

「それもいいと思うわ。でも無理はしないこと」

「わかってる。しかし…この体は治らないのか…」

「妖怪にでもなればいいんじゃない？」

…おい。

それはさすがにまずいだろ。まあ確かに能力は人間離れしているが…だが、完全に妖怪になるわけではなく、半妖になればいいか。そうすればこの程度の体のダメージは消え去るだろう。

「…妖怪になるにはどうすればいいんだ？」

「私があなたに妖力を分け与えればあら不思議。人間ベースの妖怪の出来上がりよ」

「何だそれは…まあいい。お願い出来るか？」

「ちょッ…兄さん正気!？」「ああ。力に溺れることはないが、皆を守る程の力が必要なんだ」

「わかったわ。じゃあ私の部屋に来なさい」
「？わかった」

するとスキマが俺と紫の真下に現れそのままなす術なく落下する。
落下すると同時に意味不明な事を囁く。

「妃奈ちゃん、璃空は頂くわ」

落下すること数秒、紫の部屋らしき場所に辿り着いた。しかし先ほどの一体なんだったんだろうか…

「で、どうやって妖力を渡すんだ？」

「うふふ…それはね…」

「ッ!？」

ガッ

いきなりベッドに押し倒される。これってまさか…

「そのまさかよ。やることによってあなたに妖力を渡すことが出来るの」

「ちょ…」

「じゃあ頂きます」

ぎゃあああゝあゝあゝあゝ

!!

八雲家に俺の悲鳴が響き渡る。

「く、喰われた…」 「そんな落ち込まなくてもいいじゃない。あなたも何だかんだで楽しんでたんだし」

まだ全裸で隣にいる紫は薄気味悪い笑い方をしている… まあ初じゃないからいいが… 初がこれだったらまじ泣けるだろうな。

「…とりあえず服着ろ。風邪引いても知らんぞ」

「あら、案外優しいのね（襲われたのに…）」

「まあな。それに過ぎた事は気にしてても仕方ないじゃないか」

「あら、聞こえてたのかしら？」

「顔を見ればわかる。…ってか何も変わらないぞ？」 「そうかしら？ あなたから妖力を感じるわよ？ あと…魔力もまた上昇したわね。

あ、そういえばあなた霊力は使わないのかしら？」

「あ…」

「…忘れてたって顔してるわね」

すっかり忘れていた…

記憶喪失になってから多分一度も使ってないな。まあ魔力が切れた時の保険として使用する程度だし、構わないか。

つつか、やけに体が熱く… ツ！？

な、なんだこれ…

「あらかっこいいじゃない」

慌てて部屋にある鏡を見ると髪が伸び… 真っ赤に染まっていた。

「な…なんじゃこりやあああああ」

再び八雲家に声が響き渡った。

少年暴走中…

「な、なんだこれ！？どうなったんだ！？何これ食えんの？美味しいNOオオオオ！？」

少女説明中…

「…とりあえず今俺は妖怪化しているだけであって、妖力を使うときにだけこうなるわけだな？」

「そういうこと。じゃああとはその妖怪化になれることね。じゃあ私は寝るわ」

言うこと言って紫はスキマの中に消えていった…

あのやろっ今度会ったただじゃおかねえ…が、これで皆を守れる…か

そのあと妃奈の処に行き、八雲家にまた再び悲鳴が響き渡ったのだった。

うん、すいません。紫さんに襲われました…

妖怪化（後書き）

話が進まねえっす!!!

まだまだ出したいキャラいるのに…

ああ最近進まねえっすよ。

とりあえず紫ファンの方々申し訳ないです…

かなり眠いっす…

白玉楼（前書き）

幻想郷各地で協力を依頼をしに行く璃空はまず始めに白玉楼に向かう。しかしそこには妖夢の師匠の妖忌がいた。幽居し、行方不明になったはずの妖忌が何故いるか？

…大人には事情ってものがあるのです。

何それ美味しいの？食えんの？

ってな感じで話は進みます。

白玉楼

「前回のあらすじ」

八雲家にお世話になり、そこで紫に喰われ、妖力を手に入れた。どうやら妖力を使用すると容姿が変わってしまうようで、まだ上手くコントロール出来ない俺はそのまま妃奈の処に行くと案の定驚かれ、八雲家に悲鳴が響き渡ったのだった。

そして今俺は1人白玉楼へ来ている。久々に来たかったのとある用事があるわけだが…

「ふう… やつと着いたか」

来るまでに妖力を何とかコントロール出来る程度にはなったのは幸いだ。また驚かれるのは勘弁だからな。ちなみに妃奈は今博霊神社に行っている。多分魔理沙もいるだろう。

すると白玉楼の門の処から老人の声が聞こえてきた。

「お主は誰だ？」

「俺は璃空です。白玉楼の主である亡霊姫君、西行寺幽々子に会いに来たのですが…」

「幽々子様にか。ふむ。通りなされ」

「ありがとうございます。あ、あなたもしかして… 魂魄妖忌さんではないですか？」

妖夢と同じ白髪で顔に傷があり、老人なのにマッチョなこの方は… 妖忌さんに違いない。しかし老人といっても1000年は生きてる

らしい。

「おおこれは失礼。わしとしたことが…しかしわしを知っているのは何故だ？」 「妖夢から前に聞いたことがあるので」

「ほほう。では璃空殿は妖夢とお手合わせしたと？」 「いえ…したことないですね。宴会で会ったきりだったので会いに来たんです」

「そうだったのか。では私とお手合わせ願おうかの」

「…え？」

「私じゃ不満か？」

「いや…丁度妖夢にもお手合わせしてもらおうかと思っていた処ですし、その師匠とお手合わせ出来るだなんて…好都合ですよ」

「ほほう…では中庭に案内しますぞ。着いてきてくだされ」

「はい。お願いします」

妖氣を使う良い機会になりそうだ。それと靈力も使えるだろうし…妖忌さんには申し訳ないが相手になってもらう。

白玉楼の門を潜り、中庭へと案内される。

お手合わせをするにあたって幽々子、妖夢が見学しに来た。

「お師匠と璃空さんのお手合わせだなんて…どちらが強いのですかね？」

「妖忌は百戦錬磨だけど、璃空の能力は最強よ。それに新たに妖力も身に付けたわ。普通に考えたら璃空の方が強いわね。でも妖忌は一筋縄では勝てないわ」

「なるほど…これはほんとに見物ですね」

その早い情報は一体どこから仕入れているのだろうか…

まあ俺がここに来る前に紫が言いに来たのだろう。

「さて…そろそろ始めますか妖忌さん」

「そうじゃのお…では…」「行きますぞ（よ）」「
シュンッ

妖忌が視界から消える。

消えたかと思うと一瞬にして目の前に現れ、抜刀する。

何も構えてない状態でしかも反応出来ないほどのスピードで抜刀されては回避は不可能。致命傷を避けることがやっただ。

ズバッ

片腕を切断されてしまった。物凄い出血でこのままでは出血死してしまう…

「ぐ…」

「あのくらいは避けるかと思ったのじゃが…もう終わりかのお？」

「何のことですか？」

「ッ！？」

先ほどの抜刀で片腕を切断したはずが…

何事もなかったかのように再生していた。

そして目の前にいたはずの男に一瞬にして後ろを取られた。

不覚…武士が後ろを取られるだなんて…

「何を驚いているのです？このくらいで驚いていてはだめですよ」

「お主…わざとか？」

「いえ、あれはほんとに避けることは難しかったですよ。でも俺に

はその程度は効きません」

「能力か…厄介じゃの」

「そうですね…では、俺もやらせていただきます」光符 サンライ
トニンググレーザー」

妖忌に向かってスペカを放つが…

光符は呆気なく消されてしまった。

やはりこの程度では無理か…

しかし俺のスペカは大技ばかりで扱いづらい。

「その程度じゃわしには勝てないぞ？」

「いえいえ。まだ3割程度ですのでご安心を。ちなみにあれは真似
事に過ぎませんから」

「そうか…ならわしをもっと楽しませてくれ…よ!!」

先ほどよりも速い。

しかし二度も喰らうほど俺も馬鹿じゃない。

どこぞの？とは違う。学習能力はちゃんとある。

抜刀を容易く避ける。

銃もだが、刀の軌道を読むのは容易い。妖怪化になってからか、身体能力がかなり上昇した。通常でもそれはあまり劣るうことはない。最早油断しなければ誰にでも勝てる気がする。もちろん自信過剰なのかもしれないが…

「妖忌さん…すいません。すぐ終わらせます……」

『魔剣 クラウ・ソラス』

周囲一帯に激しい光が放たれる。そして獄炎の炎も舞い上がる。そして視界が戻ると同時に獄炎の炎も静まり返り、漆黒の光と炎の最強の幻想武器の一つ、クラウ・ソラスの真の姿が現れた。

今までは体の負担を減らすために良くて6割程度の力しか出してなかったのだが今は体の心配もなくなり、クラウ・ソラスの力を解放したのだ。

正直これはかなりチートだ。自分で言うのは何だが…これで負けることはまずない。一瞬にして敵を蹴散らすことも可能だからだ。

「なんだそれは…」

「俺の最強の武器です。たまにはこいつの力を全解放してやらないと申し訳ないですか……ら？」

あ…やべ…

全解放したら魔力を根こそぎ持ってかれた…

霊力はあるが…ここは妖力だな。

丁度良いし。

妖力解放…

「体が軽い…力がみなぎる……」

「…身体能力、妖力共に上昇か。それに容姿も変わるようじゃな」

ポカーンッ

と何とも間抜けな顔でこちらを見ている妖夢がいた。幽々子も多少驚いているが…

「そうですね。で？かかってこないのですか？」

「抜かせ」

今度は突きですか…

それ…。藤○の牙突ですかね？なんだか懐かしいですが…

牙突を受け流し、

切り付けることはせず、

思い切り蹴飛ばす。

蹴飛ばす際、

ボキベキッ

と、何とも鈍い音が奏でた。

感覚と音から肋骨ほぼ折れたな。

そのまま壁にぶつかり気を失ったかと思いきや…

さすが妖忌さん。

気絶処か立ち上がるだなんて。

「ぐう……まだじゃ……まだお主の力を見せてもらってないのに倒れるわけにはいくまい」

その根性は尊敬に値するが…

無理をすると死にますよ？

「そうですね。では…死なないでくださいね？」

直後わしは気絶した…

何をされたのか…わしは死んだのかさえも分からぬまま…

「う…」

「お師匠！！良かった。気が付かれましたね」

「妖…夢？わしは一体…」

「璃空さんにやられちゃったんです…最初は跡形もなく消えてしまったのですが、璃空さんの能力で死なずに済んだんです。でもほんとに死なずに済んで良かった…」

「そうだったのか…ところで璃空は？」

「璃空なら私と話をして帰ったわよ。それにしても…あの子はどこまで伸びるのかしらね…底が知れないわ…」

いつにもなく真面目な顔で話す幽々子。こんな彼女を見るのはあまりない。いつものふわふわした感じは微塵も感じられなかった。

彼女が何故このような顔をしているかは分かるだろう。しかしそれだけではない。璃空が幽々子に話したも含まれていた。

…

「妖忌さんには申し訳ないことをしてしまったな」

「そんなことないわよ。妖忌も全力で戦ってもらえて悔いはないと思うわ。で？私に用事とは何かしら？」

「うん…実はな…組織のことなんだが…そろそろ本格的に活動してくることだと思っんだ」

「紫から聞いてるから分かるわ。もちろん私たちも協力するから大丈夫よ」

「助かるよ。ありがとう…だがそれだけじゃないんだ。実は…組織にはクローンが存在することが紫の偵察で判明したんだ。まあクローンといっても能力を持たない個体だろうけど…」

「じゃあ問題ないじゃない」

「いや、数が増えるということは戦力の上昇…そしてそれが1人1人幻想郷の住民のスペカをモチーフにして作られた武器を持つことになれば…？」

「ッ!!」

……幻想郷は潰される可能性があるんだ。

それを言った後璃空はこの事をもっと色んな人に伝えなければならぬ。そして協力者が必要だと言い、行ってしまった。

白玉楼（後書き）

妖力を手に入れた璃空はもはや最強です。

体の心配もなくなり、全力を出してもぶっ倒れることはもうないです。やっと主人公最強になりました。

最初はやや弱い方が良かったかなあと思ったので記憶喪失や体がぼろぼろな設定にしました。

次回！！

妖怪の山に出向き、天狗の長に会いに行き、協力を依頼します。

依頼（前書き）

幻想郷各地に協力しているもらえるよう依頼しに出向く。知り合いの場所からまだ行ったことのない妖怪の山、三途の川や彼岸へ…

射命丸文の案内で各地へ向かいます。

依頼

白玉楼で妖忌とお手合わせをした後、
幽々子に協力の依頼をし今の状況を伝えた。

そしてそのあと人里に行き、慧音、妹紅にも協力を依頼。組織が攻めてきたこともあり、どうやら状況を理解してくれたみたいだ。

その他、永遠亭、太陽の畑、紅魔館、博霊神社、魔法の森、香霖堂にも出向き、同様に協力を依頼したのだが、全員心良く承諾してくれた。

太陽の畑では幽香と死闘をするはめになったが…

仕方ないので瞬殺して黙らせた。もちろん能力で傷はなかったことにしたから無事だ。

ショックで拗ねたのは見なかったことにしておこう。

そして今俺は…妖怪の山という処に来ている。

ここには天狗や河童がいるらしいのだが…

天狗といえば文がいるはずなのだが。

「さて、来たことない場所だからまた迷子になるのは嫌だな。文が来てくれれば良いのだが…あ…」

我ながらNiceなアイデアが閃いた……うふふ

「あ！あんなところにネタが…」

シュンッ

疾風の如く現れやがった。釣れやすい奴だな。

くくく、まんまと引つ掛かりやがったな？うふふ…（ドス黒）

「ネタ！！ネタはどこですか！…あ」

「久しぶりだな」

「お久しぶりです。で？ネタは？」

そんなキラキラした瞳で見んな。

そして騙されたことにいい加減気付け。

「嘘だ。それより案内を頼みたいのだが…いいか？」
ガーン…orz

「だ、騙したんですね…うつ」

「騙される方が悪い。そして嘘泣きはやめい。そう簡単にネタがあつてたまるか！…で、案内をしてくれるのか、しないのか？」

「…その殺気をどうかしてくれたら案内しますよ……（怖ッこの人怖ッ！！…断つたら瞬殺される勢いだよ…）」

「なら良いだろう。天狗の長の処へ連れてってほしい」

「何かあつたんですか？」

「文も知ってるかもしれないが組織に動きが見られる。詳しくは後で話す」

「例の人間界のですか。分かりました。では着いてきてください」

文の後を着いていくこと数分、集会所らしき処に辿り着く。そこには鼻が長い一般的な天狗から身分の高い天狗まで幅広い天狗が集まっていた。すると奥から天狗？…には見えない犬耳を生やした少女が現れた。

おまいが長……なわけねえか。

「先輩。その人間はどうしたんですか？」

「外来人の璃空さんですよ。椛」

椛と呼ばれたわんこはどうやら文の後輩？らしい。

しかし…見るからに犬だ。フリスビーを投げたい気分だよ…

「初めまして。私は犬走 椛です」

「ご丁寧にも。俺は紹介があつたが璃空だ。よろしく。（……フリスビー…な、げ、た、い…）」

すると他の天狗とは違う威圧が漂う天狗が現れた。

どんだけ出てくんだよ…

「射命丸。何をしている？」

「大天狗様。外来人の璃空さんが天魔様に何やら依頼をしたいと…」

「ほほう…貴様みたいな下級動物が天魔様に会えるとても？」

「…これは一刻を争うのです。あなたほどの頭の持ち主ならすぐ理解すると思いますが？それとも私が気に入らないのですか？それなら相手になりますよ。報酬はそうですね…あなたの身分などには興

味ありません。ましてや命などにも全く興味はありませんね。あなたみたいな天狗がいても邪魔ですからね」

周りの天狗がざわめく。
かなりの数だが何とかなる。その気になれば全員消すことも可能だからな。

「ちょ…璃空さん。失礼で「ガハハ、気に入ったぞ人間。我を恐れる処か喧嘩を売るだなどとは…名は何と申す？」…およろよ？」

「試されてるのはわかっていたので。あのくらい言えば十分でしょう？しかし先ほどの御無礼をお許しを…俺は璃空です。そして人間と妖怪の中間って処ですので間違いないく。」

「これまた面白い。天魔様。どうぞこちらに」

奥から大天狗とも比べ物にならないくらいの威圧感…並の妖怪ならば気を失ってしまうだろう。

天狗の長というのだからかなり年がいつてるはずだ。さて…どんな容姿をしている……え？

「我は天狗の長、天魔じゃ。人間と妖怪のハーフよ。我に話しとはなんじゃ？」

現れたのは見た目は俺とほとんど変わらないくらいの年だと思われる女の子だった。

身長は150近いくらいだな。

しかし長の威厳さや威圧感が何とも似合わない容姿だな…

「初めまして。お会いできて光栄です。私は外来人の璃空と申します。早速ですが…本題に入らせて頂いても宜しいでしょうか？」

「構わん」

「私の世界の…人間界にある組織がある野望を持って幻想郷に攻め込んできます。私情だということは十分承知しておりますが…どうか私に力をお貸していただけないでしょうか」

深々と頭を下げる。

「…あの八雲が認めた外来人じゃ。我ら天狗も協力を約束しよう」
「ありがとうございます。もうひとつ宜しいでしょうか？」

「ん？なんじゃ？」

「幻想郷でまだ行ったことない処が多々あります。そこで文を案内役として一時連れてつても構いませんか？」

「え？ちょ…璃空さ「構わん。文、これは命令じゃ」…わかりました」

「ありがとうございます。では組織については後々お伝えします。じゃあ文、すまないがよろしく頼む」

「はい。こちらこそよろしく願います」

妖怪の山を後にし、

次は幻想郷の閻魔様に会いに行くことにした。

案内役の文には人間がそこに行くのと魂が引つ張られてしまい、あら不思議。気付いたらポツクリだなんてこともあるらしい。

笑い事ではない。洒落にもならん…

こんなところで死んでたまるか！！

そして時はもう16時。 朝から行動していたのにもうこんな時間だ。

でだ、今文と中有の道を通り、三途の川にいるわけだが…
赤髪で極端に大きな大鎌を持っている死神らしき少女がいた。
だが寝てる……

確か霊を彼岸に船頭し運ぶのが彼女の仕事なはずだが…
サボっているな。

これ見られたら閻魔様に怒られんじゃないか？
よし…ここは一つ俺が…

「起きろおおおおおッ！！」

「きゃん！…ひ、昼寝なんかしてませんよ！ちょっと眠気が来てしまつて寝て……ってあれ？あんた誰だい？」

…それを人は昼寝と言ったが…
しかも言い訳にもなっていない。

それに最初のきゃんってなんだ？

「閻魔様が変わって起こしてやつただけだ。それと俺は璃空。よろしく」

「映姫様が変わって…まあいいか。あたいは小野塚小町。で、人間と鴉が何の用だい？」

「閻魔様に会わせてもらえないか？話がある」

「あたいは構わないけど…あんた行くまでに死ぬかもよ？」

「だろうな。だが大丈夫だ」

「「？」」

「俺には無を操ることが出来る。彼岸で死ぬことはないさ。ただ魔力の限界もある。だから…」

スッ…

容姿も微妙に変化し、妖怪化する。

「驚いたねえ…妖怪化出来るだなんて…ましてや無を操るとは…まあじゃあ行くかい」

「取Z「黙れ」…う」…orz

そんなに凹むな。

暇があれば取材だろうがなんだろうがしていいから。

「ほんとですか！？では今度お願いします」

聞こえたのか？

おまいは読心術の心得でもあるのか？

いや、

俺が無意識に声に出してしまったのだろうか。
まあどちらでも構わないか。

「ほら、早く乗った乗った」

何ともシンプルな船に乘せられる。しかし船頭するのはいいがその大鎌を肩にかけるな。そして刃が此方に向けるな。危ない。おまいは俺を殺す気か？ポックリ行っちゃったらあらごめんなさいだけじゃすまないぞ？そしたら呪ってやるからいいさ…うふふ

「さて、着いたよ。映姫様の処に案内するから着いてきな」

…な！さっき乗ったばかりだよな…？

…なるほど、小町の能力は距離を操る能力だろうか？

何とも便利だな。

閻魔様がいる場所へ案内される。

閻魔様というと怖いイメージしかない…

俺も何やら裁かれそうだ…

すると少女の声が聞こえてきた。小町の部下だろうかと思っただら…

「何をしていますのです？小町。またサボリですか？」

「ち、違いますよ。映姫様に会いたいという人間がいます…」

映姫様？

この少女が閻魔だとおおお！？

あはは、

そんな冗談やめてくれ。こんな少女が閻魔なわけが…

「初めまして。私は数多くいる閻魔の一人、そして小町の上司の四季映姫ヤマザナドゥと申します。あなたは？」

…閻魔でしたか。どうみてもかわいいかわいい少女にしか見えねえ

って…

だがしかし悔悟の棒を持っていること、そして小町の反応を見る限り本物のようだ…

「私は人間界から来た外来人の璃空と申します。お会いでき光栄です」

「私の時とは全く違うねえ…」

「偉い方には敬語を使うのは常識だろ？おまいからは偉さの欠片も感じなかったからな」

「それはあまりにもひどいんじゃないかい？」「んなの知らん。で…映姫様。あなた様にあるお願いをしに此処へ来たのですが…」

「何ですか？」

天魔同様内容を話す。協力してくれるといいのだが…

「…なるほど。分かりました。私もあなたに協力しましょう」

「ほんとですか！？ありがとうございます」

「それは構いませんが…あなたは罪を犯しましたね？」

…へ？

何の事だ？

俺何もしない…はずだが…

「…あなたは人間なのに強力すぎる能力、そして妖怪化…これは罪に値します」

「え？ちよ…待って」「言い訳は聞きません」

そのあと2時間みっちり説教を喰らった…

映姫様長いよ……

ワタクシツカレタネン…

説教が終わった後、映姫と別れ（疲れ果てたが…）小町にまた船頭を頼む。ちなみに三途の川は深い霧に覆われ、昼も夜もない。そして船が進んでも水の音がしないという何とも不思議な場所なのだ。

これからどうしようか。

また行っていない場所は…

守矢の神社かな？

そこには神がいるらしいのだが…

文に案内を頼むか。

「ほら着いたよ」

「小町ありがとう。助かったよ。時が来たらおまいにも協力してもらうと思う。その時は頼むぜ。…じゃあ次は守矢の神社に案内してくれ文」

「わかったよ。気を付けていくんだよ」

「わかりました。では着いてきてください」

小町と別れ、守矢の神社へと向かう。

そういや守矢の神社は元々外の世界にあり、信仰を求め幻想郷に神社ごと移住させたらしい。そして妖怪の山に移住させたのだが…最

初は天狗に警戒されていたが、和解したらしい。
妖怪の山にあるなら先に行っておけばよかった…
さて、向かうとするか。

依頼（後書き）

次回は守矢の神社…そしてさとりさんを出せたら出したいです。

ちなみにわたくしは魔理沙、さとり、幽香、フラン、幽々子、アリス、文、咲夜など…ほとんど好きですね。

まあ魔理沙が一番だな！！

では、次回！！

俺にもどうなるかはわからんが楽しみにwwww

EX（前書き）

守矢の神社に向かうとEX…のある方が暴走していた。

そして流れで…？

EX

何だかんだでもう夜だ。1日過ぎるのが早いな。さて、早めに用事を済ませて帰るとするか。

「ここが守矢の神社か」

「そうですよ。早めに用事を済ませて今日は帰るとしましょう」

もちろんそのつもりだ。

さすがに今日は疲れた…主に有難い閻魔様の説教で……さて、早めに用事を済ま……

何やら守矢の神社の中が騒がしい…

何か嫌な予感が…

「私は頑張っていますかー」

「A H A H A」

……

うん、

やっぱり今日は帰ろうか。これ関わっちゃいけないっつー俺のめんどいリーダーが過剰に反応してる。早いとこ逃G…

「あれー？あなた誰ですかー？なでなでしてくださいーい」
…遅かったか。

厄介だ…

しかも絶対酔ってんだろおまい…

「却下だ。まず酔い覚ませ酒乱ルイーシ」

「酔ってないですよーえへへ」

だーめだこりゃ。

まじ帰ろう…

絡むのめんどくせえや。

「文帰るぞ。めんど…」

文がない…

拉致られたか…？

「おやおや、こんな時間にお客さんか？珍しいじゃないか」

「客ってわけじゃないが…ところでおまいは誰だ？俺は外来人の璃空だ」

「例の外来人か。私は八坂神奈子だよ。ここの神さ」

おまいが神か。

じゃああの酒乱は東風谷早苗か？

「そうか。ところで連れの文を知らないか？」

「文？あああの鴉のことか？？あれなら神社の中で出来上がってるよ」

…無理矢理飲ませたのか。なんでも潰せば良いという訳じゃないぞ神様よ。

「なでなでしてくれないんですかー？」

暴走する早苗…

絡むのは疲れそうだから無視し、文のことも気になるしとりあえず神社の中へ行くことにする。

「ケロ？あなたは誰ー？」

早速蛙のようなロリ少女と出会す。これまた酔ってるな…

疲労パネエ時にこの絡みはさすがに堪えるな…

しかもこれ飲まなきゃいけないみたいな雰囲気だ…

そもそもうデロデロになっている文がいる…

軽くはだけてる服が色っぽいが興味はない。

「…俺帰っていいか？」

「帰らせませんよえへへ」

文…頼むから暴走しないでくれ。

「わかったわかった。だから近付くな」

「むー…じゃあ璃空さんも飲みましょう」

「ッ！！」

無理矢理飲まされる。

なんだこれ？

…ウイスキーか？

ウイスキーは癖があるから俺はあまり好きじゃないんだが…って瓶全部飲ませんな！

「えへへどうでした？」

「…まずい」

「なかなか良い飲みっぷりだねえ。飲み比べといこうか」

そのあと残っている酒を神奈子と飲み比べる羽目となった。
疲労& amp・空きつ腹での酒はこれ以上ないほど辛い…

あ、意識が…遠…の…く…

夜が明け、外が歩くなっていた。
俺は目を覚ますのだが…
言葉を失った。

夜が明け、外が歩くなっていた。
俺は目を覚ますのだが…
言葉を失った。

まずこの状況を説明しよう。

女四人が裸で俺も裸。

そして布団で俺中心で左右二人ずつ女が寝てる…

…これは夢だ

ああそうだ夢に違いない…ってか夢であってくれ…

頼むよ神様…

あ、神様はこいつ（神奈子）だったか。

じゃあもはやどうしようもないか…

「…動けん」

そうです。

両腕が塞がっています。

皆様一度はあるでしょう。腕枕ってやつです。

動いたら起こしてしまう…ここで起こしたら気まずい。

それだけは回避しなくては…

「ん…」

「ッ!」

左隣の文が起きやがった…なんつータイミングの良さだよ…

おまい素晴らしすぎて泣けてくるよ…

ちなみに文の隣はケロちゃん（仮）だ。

そして俺の右は早苗。そして早苗の隣は神奈子という順になっている。

「あれ…？何で璃空さんが隣に？…ってキャッ／＼／」

まあ当然そうなるわな。

良いタイミング、そして良い反応だ射命丸文。

「り、璃空さん…私あの…」

「俺にも分からん…だがもしかしたらその可能性もあるかもしれないな…」

すまない。自分の不甲斐なさに苛立ちを…っておい！そのまま抱き着くな…

慣れてない訳ではないがこっちは両腕使えず無防備なんだから…抵抗が出来ないんだ。

「もう少しこうしてていいですか？」

「…何故？」

「何だか落ち着くんです…
さいですか…」

そのあと全員起き、もちろん大騒ぎだ。

酔っている間に何があったのかさえ全員…いや、一人を除いて分からない。

神奈子のあの笑い方…全て知っていやがるな…

しかし周りを見渡すと避妊道具…ゴムがあるではないか（4つほど）
これでもはや確定…

わたくし璃空はやったわけか…

これネタにされたら終わりだな…

ああもう死にたいよ…

ちなみに一番大変だったことは目を覚ました早苗だ。

全く覚えておらずよほど恥ずかしかったのか慌てて服を着た。

大丈夫。行為は覚えてないがきっちり見えたから。

ルイージと言ったがおまいは胸だけは霊夢に勝っているよ。うふふ

やっと落ち着きを取り戻し…

本題に入る。

話を進めると全員真剣に耳を傾けてくれた。
どうやら内容は理解出来たようだ。

「なるほど。じゃあその組織の野望を食い止めればいいんだね？」

「そういうことになる」

「もちろん私たちも協力しますよ（やつちゃったし…）」

「ありがとう（何を考えている早苗…）」

「ケロケロ、具体的に何をすればいいの？」

「組織に動きがあつた以上、幻想郷に攻めてくるのはあと…5日程
度だと思う。それを阻止してくれば良いだけだ。その間に俺がボ
スを叩く」

協力してもらえて良かった…さすがに幻想郷各地に攻め込まれては
俺一人では対応しきれない。

そのためには皆の協力が必要だ。

さて…早いとこ次に行かなくては…

次で最後だな。

場所は地霊殿。

古明地さとりがいるところだな。

「じゃあそろそろ俺は行く。時間がないから急がないとな…その時が来たらよろしく頼む」

深々と頭を下げお願いと同時に感謝する。

「大丈夫ですよ。それに困っているときはお互い様ですよ」

早苗の今の笑顔は眩しいな。そして優しさ、温かさで軽く瞳が潤む…

「ほんとにありがとう。文次で最後だ。地霊殿に向かうぞ」

「分かりました」

守矢の神社ご一考に別れを告げ地霊殿へと向かう。

向かう途中に文は顔を赤くしていた。

もしかしたらと思いあることを訪ねると

どうやら初めてだったらしい…

更に申し訳なくなってきたよ…

へこんでいると

「璃空さんは彼女いないんですか？」

「…へ？」

予想だにしてないことに声が裏返る。

「…いない。組織に狙われてから別れたんだ」

「なるほど…じゃあ私と付き合ってくれませんか？」

「…はい？」

更に予想だにしないことを…

これはどう返事をするべきか…

別に文が嫌なわけではなく、彼女がいてはいざ…

組織と戦う時に迷いを生じてしまうかもしれない。

それでは組織を潰せない。

「今の俺は…「わかっていきますよ。勿論組織のこと、そして体のことも。でも私はそれを承知で言っただけです。やったとかじゃなく…純粋に璃空さんに…あの…ほ…惚れたんです…」／／／「文…」

ここまで思われるとは…

予想外だな。

組織がどうかそんなことより彼女の純粋な気持ちが嬉しかった。そして俺は彼女を守ってあげたいとも思うようになった。俺の答えは…

「文…」

「は、はい」

裏返っているぞ？

あまりの可愛らしさに笑ってしまった。

「…ぷ…あはは…」

「ふえ？あの…璃空さん…？」

「文の純粋な気持ちを大切にするよ。同時に絶対守って見せるからな」

「ッ／／／」

照れるな照れるな。

そんな文を優しく抱き締める。

相手の心臓の脈が伝わる。そして温もりも…

こんな俺にも大切な人が出来てもいいよな…？

その後は文は恥ずかしいのかあまり喋らなかった。まあ可愛いのがな。だから少しいじめたりした。

他人から見たらただのバカップルだろうなと思いつつやるのが俺。

え？Sだって？

違う違う。

俺はDSなんだって。

そこそこお間違いないw そんな話をしている間にあっという間に地霊殿に着いてしまった。

さて、これで最後だ。頑張るか。

EX（後書き）

最近主人公が暴走& a m p・キャラ崩壊しているような気がする…
まあそうさせているのは俺なんだけどね…苦笑

私情ですが

毎朝5時30分起きは辛い…o r z

眠いのなんのって…

地霊殿（前書き）

さとりいいいいいい！！

つ、ついにさとりさん登場……

長かったなあ……

だがしかし正直地霊殿に関しての知識皆無に等しい……w
こんなんで書けるのか……

それは勿論……ねw

温かい目で見てやってください（――）（

地霊殿

「文、案内ありがとうな。ここからは俺一人で行く」

「…一緒にいたいんですけど……だめですか？」

離れるのが相当嫌なのか

かなり声のトーンも低く、元気がない。

あとそのうるうるした目やめてもらえますかね…？

「離れたくないのは俺も一緒だ。だけど…文にはもう一つ仕事を頼みたいんだ」

「仕事…ですか？」

思いがけないことに頭を傾げる。

まあそりゃあ案内だけだと思っていただろうし、そうなるわな。

「ああ。新聞を今日1日で作ってもらいたい。俺が各地を回って伝えるのはさすがに無理があるからな…それと無線機でもあれば助かるんだが…」

「新聞は構いませんよ。これでも幻想郷の新聞記者ですから…ね」

あ、無線機というか機械に詳しい子はいますよ？」

なんと！

これは助かった…

しかし残り5日で作れるものなのだろうか…

「新聞の内容はここに書いてある。あとはアレンジして書いてくれ。じゃあもう一つ頼みたい。機械に詳しいその子に無線機又は電話で

いいから作ってもらえるよう頼めないか？」

決戦の際情報がほしい。

それによって作戦も変わるし、勝率も大幅に上がる。

「分かりました。大急ぎで行ってきますね。
璃空さん…無理はしないでくださいね？」

「勿論だ。文に心配かけるようなことはしないよ」

そう言うのと笑顔で頭を撫でる。

それがよほど嬉しかったのか恥ずかしかったのかは分からないが顔を赤くしている。

しかしとても幸せそうだ。馬鹿げた野望を早く阻止し文と幸せに暮らしたいものだな。

「では行ってきますね」

「ああ頼むぞ」

優しく抱き締め、

キスをする。

別れは俺だって辛い。

このくらいはしないとな。

すると文は物凄い速さで飛んでいった。

さすが幻想一の速さを誇るだけのことはあるな。

「…さて、さとり…でいいか？依頼をしに来たんだが話を聞いてもらえないか？」

「…おや？気付いていたんですか？」

奥から姿を現す。

その姿に俺は目を疑う。

何せ見た目は10代前半…地霊殿の主というのだから紫みtainな感じなのかと思つたが…これじゃまるで…

「…ロリですか。確かに見た目はそうかもしれませんがあなたの500倍近くは生きてますよ」

…さすがだな。

まあ妖怪だし、そんなことだろうとは思つたがな。
ん？ってか今心を読まれた…？

「そうです。私はこの第三の目で相手の心の内を見ることが出来るのです。勿論それによつてあなたのトラウマを探しだし、目の前に出現させることだつて可能ですよ？」

左胸部にあるアクセサリーのような目の形をしたものを両手で抱えさとりはどこか悲しい目をさせる。

「…さすがと言つたところだな。しかしそれはまた便利な能力だな」

「確かにこの能力は便利ですね。…しかしこの能力は皆から嫌われます。あなたも……え？」

「?どうしたんだ?」

「(この人からは何も感じない...?能力を知った上で何も思わないだなんて...ふふ...なかなか面白い人間がいたものですね)いえ...何でもありません。ところで名前は教えていただけないのですか?」

「俺は」「璃空さんですか。なるほど」...おい」

クスクス

思わず笑うさとり。

どうやら名前は最初から分かっていたみたいだ。
全く...怒るぞ?

「すいません...クスクス。ほんとに変わった人間ですね。...で、私に話しとは?」

あまりにも笑いすぎ、涙が出てきている。そこまで笑うことないと思うのだが。

「...話の内容も分かっているんじゃないか?」

「ええもちろん」

またクスクスと笑い始めた。

小馬鹿にしているようだがなんだか憎めない奴だ。

「じゃあ話す必要はないな。協力してもらえないか?」

「幻想郷が壊されてはたまったものではないですし、勿論協力しま

すよ」

「…そうか。ありがとう、助かるよ」

「しかし私は戦闘は苦手ですよ?」

…絶対嘘だ。

トラウマを出せるということはその気になれば幻想郷にいる全員のスぺルカードも使えるということ。
チートだなこれは。

「チートなのはどちらでしょうか?あなたの能力の方がチートだと思いますけど」

「その気になれば俺のスぺルカードも使うことが出来るのだろう?それをチートと呼ぶすに何て言えばいいんだ?」

「ふふふ、まあそうかもしれないね。お茶を出しますからこちらにどうぞ。ここまで来るのに疲れたでしょうし」

「ん?すまないな。ありがとう。じゃあ少しだけ頂くとするよ」

地霊殿の主である古明地さとり。

それは悟の妖怪で相手の心を読むことが出来、その能力はそれだけに留まらず、相手のトラウマ…つまり相手の嫌なスぺルカードを使用したりも出来る。ここまで来ると幻想郷の中でも一番強いと言っても過言ではなさそうだ。

見た目はほんと口リ。

悟りを分解すると小、五、口、り…

小五のロリって……

しかも見た目も10代前半で上着が水色で…幼稚園児の幼児服、スモッグに見えるのは俺だけだろうか？

性格は人をおちよくったりするのが好きみたいだ。Sっ気もある。

まあこんなところか？

テーブルに案内され、待つこと数分、
紅茶を持ってさとりが戻ってきた。

「どうぞ」

「ありがとう」

紅茶を啜る。

うん、やはり紅茶はうまいな。

「そういえば地霊殿にはさとり以外に誰がいるんだ？誰の姿も見えないが…」

「ペットと鬼がいますよ」

…ペット？

まあしかしペットと言っても人間が飼うようなペットではないだろう。

「具体的にどんなペットがいるんだ？」

「そうですね…猫とか鴉ですかね」

あれ？

案外普通だな…

「いえ普通ではないですよ。猫は猫でも火焰猫ですし、鴉も地獄鴉です」

…さいですか。

「なるほど。じゃあペット達にも言っておいてくれ。主であるさとりが言えば言うことを聞いてくれるだろう？」

「確かにそうですね。しかし璃空さんが直接言えばいいのでは？」

「俺は組織との決戦の前に能力の強化、そして身体能力の向上。このままでは奴らに勝てるかどうか分からないからな…そのためにこれから3日間修行する。すまないが言っただけで与えられると助かる」
「なるほど。でも修行はどこでやるのです？…って決まってるんですか。ならここで修行していったらどうですか？」

「そうしてもらえると助かるが…いいのか？」

「私は構いませんよ。それに能力を見ておきたいですし」

ズズ…

さとりは紅茶を啜りながら言う。

確かに場所は決まってる。それに一人で修行するよりさとりに修行の協力をしてもらうのも悪くない…か。

「じゃあ頼む。修行に付き合ってもらえると尚助かるんだが…」

「私にも仕事があるのでそのあとでしたら付き合いしますよ」

「ありがとう。助かる」

言葉に甘えてここで修行することになった。

さとの能力で幻想郷全員の能力を使ってもらおう。

幻想郷には強い妖怪が沢山いる。もちろん妖怪だけではないが…

全員のスペルカードを使用してもらえばかなり良い経験になるだろう。

しかしさとりは仕事があると言い席を外してしまった。

…仕方ない。

とりあえず一人で修行しよう。

だがここは狭すぎるため広場へと移動する。

そして半径10mくらいの結界を自分を中心にして張る。

これは弾幕を避けるための練習だ。

その練習とは…

俺の中での弾幕最強

『封符 完全なる世界』
だ。

これを自分自信に放ちそれをひたすら避ける。

勿論妖怪化はせず、

死ぬ直前までは能力を使用しないという他からみたらただのバカにしか見えないだろうがこれが大切なのだ。

窮地まで自分を追い込み更なる力を手に入れる。

そうでもしなければ俺は限界を越えることは出来ない。

ましてや組織に勝つことも出来ないだろう…

さて、

そろそろ始めるか…

「全能力解放…」

その直後物凄い弾幕が璃空を襲い掛かった……

地霊殿（後書き）

かなり妥協したような感じでの更新となりましたね…申し訳ないです…

活動報告を見てもらうと分かるかと思うのですが
間違って消してしまつて…

昨日はやる気が出ず寝ましたw
んで、

朝でっち上げたわけですよ。

さて、

次は二作目をでっち上げます。

感想、指摘、コメントをお待ちしてます（――）

番外編 人間界（前書き）

かなりパクリ要素があります。

わたくしが本当にやったことを面白おかしく改良した版を載せてお
ります。

真実だったり嘘だったりしますが…

ゆっくりしてってね！

番外編 人間界

今俺は大学に来ている。

不登校気味だったのだが急遽人間界に戻ってきた。そして一週間ぶりの学校なわけだが…

「お？璃空じゃないか！久しぶりだな」

早速声を掛けてられる。声の主の方を見ると見慣れた顔があった。

「煉^{れん}か。久しぶりだな」

そう、

こいつは煉。俺の幼馴染みだったする。

煉は俺とは異なり異常にテンションが高い。

だが煉がいると不思議と周りも笑顔になるムードメーカー的な奴だ。ちなみにノリが良すぎてよく煉とバカなことをしたりもした。

「あ、璃空だあ。もう体調は大丈夫なの？」

「…久しぶり」

煉と話していると

同級生の留衣^{るい}、そして元カノの…美夜^{みや}が来た。

「留衣に美夜か。久しぶりだな。体調は大丈夫だ」

「そつか。ならよかったよ」

ちなみに大学ではこの四人でよく行動を共にしている。留衣とは大学で知り合い、美夜とは中学ん時に知り合った。

「璃空ー今日久しぶりにこれやろうぜ」

…懐かしいものを持ってきやがったよこいつ。

それは少し前にどこぞの女子生が呼吸困難になり救急車で運ばれたことでも有名なメントスコーラだ。

余談だが前にやったら教室がコーラでべたべたになりこっぴどく怒られた。まあ当たり前だが。

それをこいつはまたやろうとしている…？
だな。

「今回は違うぞー！前の失敗を踏まえ…今回は時限式にしてみただ」

は？

何をこいつは言ってやがるんだ？

メントスコーラはすぐ溢れてくるし時限式だなんて出来やしない…まあメントスを入れすぐキャップを閉めることは可能だったけど…

「ふふふ、今回はこれを使うのだ」

裁縫で使う針、そして糸を取り出し何とも楽しそうに語る煉。
バカとしか言いようがないな。

「…で？それでどうすんだ？」

「おやおやテンソンが低いですぞ？そんなに別「グフツ」

溝に蹴りを喰らわす。

勿論身体能力が向上してるためかなり力はセーブしている。
だが人間だったら気絶するくらいの力でだ。

「……ッ！痛いじゃないかー！」

おお気絶どころか痛いで済ませるとは…肋骨を複数折ってやろうと思っただけになかなかやるじゃないか。蹴りが当たる瞬間に後ろに飛び、威力を軽減しやがったのか…
さすがだな。

「今のは煉が悪いよ」

やれやれという感じの留衣。

「そんなことより早くやろつぜ璃空」

「わかったわかっただからそう騒ぐな。俺は疲れてるんだ」

煉は璃空の手を引っ張りどこかに連れてってしまった。

「…やれやれね」

「まあ仲が良いってことだよ」

そんな二人の背を見ながら二人は言った。

「さて…これよりメントスコーラ（時限式）を作っていきたいと思っています！隊長！準備はいいですかあ？」

「…ああ」

久々に会ったがまじ変わってねえ…

久々といっても一週間ぶりだが…

まあこいつはこうじゃなきゃ逆におかしいか。

「まずはだなメントスに針を通して……………通し……………」

沈黙……………

「通らねえじゃん」

煉の行動を他所に顎に手を添えテーブルもたれる。

「…おかしいなあ…あ、璃空火あるか？」

「ん？あるぞ。ほれ」

真っ黒に銀の蝶が描かれたZipproを投げる。

ちなみにこれは他では売ってない貴重なものなのだ。

オーダーメイドだから当たり前だがな！！

ポッ

火を付け、針を炙る。

なるほど、

熱でメントスに穴を開けるわけか。

「よし！！こんなもんでいいだろう。そおおい！…あ…」

針は見事に真っ二つ。

いくら熱で針が通りやすくなつてるとはいえ力任せにやる馬鹿がどこにいる…

あ、現時点でこいつがいるか。

そのあと何度かチャレンジを試みるとやっと通った。メントスが真っ二つになったり、炙りすぎて針が熱すぎて火傷をしそうにもなるというテラ馬鹿なことを繰り返していた。

「…やっと通ったな。これであとは糸を通して…：コーラのキャップの部分に糸を引っ搔けて…：出来た！！我ながら傑作だな」

なるほどな。

開けた時にメントスが落ちて爆発ってわけか。

だが、

誰に喰らわせるんだか…

「コーラとメントスまだあるか？」

「あとコーラは2つあるぞ。メントスももうひとつあるぞ」

「そうか。じゃあ貰うぞ」

「おう。だが何を……え？」

まず俺が何をしたのか説明しよう。

コーラを開け、その中にメントスを二つ入れ、すぐキャップを閉めたわけだ。

時限式とまではいかないが煉のやつが苦勞して作ったものを俺はただかだか30秒程度で作ったわけだ。

…orz

おお凹んでる凹んでる。

煉ザマアwww

「で？誰に喰らわすんだ？二つも」

「あ…ああ…それはだな…考えてなく「おい」…留衣とか？」

あいつらが喰らうわけがないだろう。

まず先程の話を聞いていただろうし。

「結局無駄になったってわけか？」

「なんならセンコーにでも喰らわすか？」

「…後々がめんどいから却下」

停学にでもなったら最悪だからな。

まあ不登校気味だったから別に停学だろうが退学だろうが変わらな

いがな。

結局誰にも喰らわすことなく放課後に…
しかしそこで事件は起きた。

ブシューウウ

…あ

喰らっちゃったよ……

しかも校長…

コーラで全身びちよびちよの校長。体を微妙に震わせてることからかなり頭に来ていることがわかる。

俺と煉はお互いに目を合わせどうするか考えていた。これリアルに退学になるかも…A H A H A

そして二人同時に、

「…逃げるが勝ち!!」

バレる& a m p ;捕まる前に逃げる二人だった。

だが勿論バレてしまい校門付近にて捕まりこっぴどく怒られてしまい、

退学の危機に陥ったが能力を使い、なかったことにして退学を回避W
いやぁ能力って便利だな。

そんでもって今は煉の部屋に留衣、美夜という。

何しに？

それはこいつ（煉）が久々に俺が来たからとのことで祝ってくれるらしい。留衣も美夜も内容はわからないみたいだったがまあ多分飲みだろう。

「じゃあ今から始めるとしますかね！！今回は俺の自腹じゃー！」

「「「おおー」」」

こいつにしては気が効くじゃないか。やはりこいつは良い「まず」の賞味期限がかなり切れたポーションを入れてー」…は？

今テメエなんつた…？

ポーションっておまいまさか…

嫌な予感が的中してしまう。

「今回は祝いとしてハイポーションを作ってみようＺＥ＼（^^）

／
」

ああその顔とテンソンうぜえ。

まだ俺だけならまだしも留衣や美夜まで巻き込むな。

あれはほんとゲボルから嫌なんだ。

。犬さんの真似事で前にも一度やって、

腹が面白いことになったのにまたやろうとするその勇氣は称えよう。
だが、

今回はあの時とはレヴェルが全く違うじゃないか！！それは俺に死ねって言うてるのかね？

そんな俺を他所に一人大きめの鍋を持ち出し、楽しそうにセッティングする煉。そしてポーションを鍋に入れ……

買ってきた物を一つ一つ入れていった。

『赤まむし』

100ml

¥ 8 3

『エスカップ』

1 0 0 m l

¥ 1 5 3

『チオビタドリンク』

1 0 0 m l

¥ 1 4 6

『リポビタミンD』

1 0 0 m l

¥ 1 5 0

『リポビタミンDスーパー』 1 0 0 m l

¥ 2 6 2

… まあここまでは栄養ドリンクだから普通に飲めるわけよ。
前回はここにバナナオレやらコーヒーやら入れたら……味が最悪に
なった。

なのにこいつは……

ある物を更に入れやがった

『目玉おや力EX』

1 0 0 m l

¥ 5 2 5

『宝起精』

50 ml

¥997

『カリスマ如意棒』

50 ml

¥1281

『マカ 皇帝倫液』

50 ml

¥725

『宝仙堂の凄十 龍の雫』 50 ml

¥980

『マカ 自信回復液 エックス』

50 ml

¥1580

『精泉マカビンビンZ』

¥2940

50 ml

わー素晴らしき勃起薬だーあははー
これまじ死ねるって。

軽く放心状態の俺を知ってか知らないかは分からないが追い討ちを
かけるように秘密兵器を入れてきた。

『すっぱんエキス』

120球

¥2580

「これを適量…」と

5、6、7…8球くらいか。まあそのくらいが妥当だ」

ポトポトポト

全部入れやがったー！？

ちよ、てめえ何してんだゴルラァッ！！

○適当

×適量

じゃねえかよ！！

キャラ崩壊しながら突っ込みを入れたにも関わらず煉は何事もなかったかのように続ける。

…こいつ後で殺す。

『天狗が如く』

120粒

¥3980

「適量適量♪」

…やはり全部入れやがった。もう突っ込むことも出来ません。
パト。ツシュ、僕はもう疲れたよ。

計

900ml

¥16352

のハイポーションが出来上がりました。
無駄に金を出費したこいつは？としか言えません。

煮てもすっぱんエクスだけは溶けなかったため、
フォークで穴を開け完成。

ゲロのようなハイポーションが出来上がりました。
すっぱんエクスが溶けずに浮いてるため見た目はほんとに汚いです。

さて…

作ったからには本人に飲んでもらいましょう。

「さあ璃空、俺からの祝いをどーんと飲んでくれ」

「…ふざけるなあー!!」

…少年暴走中。

悪ふざけが過ぎた煉に神の鉄槌が下されました。

作った物を全て飲まされ、そして今完全にノックダウンしてる煉だったものがトイレにてリバースしています。

先程の元気だった彼の姿はもうそこにはありませんでした。

げっそりとし、熱も出てしまいほんとに辛そうですが自業自得です。そんな中俺らは帰りました。

何故ならめんどいから。

これは余談だが丸1日地獄を見たらしく、もう二度と飲みたくないらしい。ポーションを口にするとき青ざめ物凄い表情を浮かべることから味も最悪で、ほんとに丸1日地獄だったようだ。まあ？だから仕方ない。

そんなこんなで俺の久々の人間界での生活は終わってしまった…

主に煉の馬鹿げたことに付き合わされ終わってしまった…

まあでも久々に会えたわけだし、

楽しかったからいいか。

良い息抜きにもなった。

と思う。

番外編 人間界（後書き）

馬犬さんのパクリでした。 実際わたくしは大学ではなく専門なんですが…

あとはZippoとかも無くしたし、オーダーメイドなわけがないw
確かにほしいですけどw

ってなわけで息抜きとしての更新でした。

博麗神社（前書き）

妃奈の行動を書きました。かなり短いですが…
更新頑張らなくては？

博麗神社

博麗神社に疾風が巻き起こると同時に女の子が現れる。

「あ、霊夢さん。こんにちは」

「妃奈じゃない。どうしたの？」

「いえ、暇だったもので遊びに来ました」

「そう。ま、上がりなさい」

私、妃奈は璃空兄さんが各地に協力を依頼しに行ってる間に霊夢さんの処へ遊びに来ているわけです。
遊びと言うわけではないのですが…

兄さんに好きにしていっていいと言われたのでお礼も兼ねて博麗神社に来ているわけです。

中に入ると魔理沙さんがいた。どうやら彼女も遊びに来ていたみたいだった。

「こんにちは。魔理沙さん」

「妃奈じゃないか。今日は璃空はいないのか？」

「兄さんは今各地に依頼をしに行ってますよ。多分此処にも来ると
「霊夢ー？いるか？」…ほらね」

「お、そこにいたか。魔理沙も一緒のようだな。妃奈ももう着いたのか」

「璃空久しぶりだぜ」

「私もさつき着いたばかりだよ」

「まあ座んなさい。お茶入れてくれれば話聞かわよ」

…おい！

多分俺だけでなく皆そう思ったんじゃないか？

少しは働けよ自称楽園の素敵な巫女さんよ。

渋々お茶を入れ霊夢に差し出す。

「…うん。やはりお茶はうまいわね。で、何のようかしら？」

「組織との決戦が近いからな。それで協力を依頼しに来たんだ」

「なるほどね。まあ異変を解決するのが私の役目だし協力するわ。

魔理沙もするんでしょ？」

「もちろんだぜ」

「すまない。じゃあ俺は次の場所へ行くわ。じゃあまたな」

疾風の如く消える。

兄弟揃って同じとは…

「実は私からも2人をお願いがあるんですけど…」

「何よ（だぜ）？」

「私に稽古を付けてください！といっても弾幕戦で結構ですので」

「まあ暇潰しにはなるしいわよ」

「私も構わないぜ。ま、手加減はしないけどな」

「ありがとうございます。じゃあ早速お願いできますか？」

決戦まで残り5日

それぞれ決戦に向けて準備を整える。

…しかしこの時まで誰もあのようなことが起きるとは思っていなかったのです。正直…私にも…ね。

決戦まで残り2日（前書き）

いよいよ組織との決戦の日が近づいてきました。
一体どのような結末が待っているんでしょうか…
それは作者しかわからないっすよねw

決戦まで残り2日

地霊殿で修行すること3日。地霊殿の主、さとりに修行の手伝いをしてもらい、霊力、魔力、妖力の上昇。及び身体能力の強化に成功した俺は修行に付き合ってもらったさとりにお礼を言い、今博麗神社に来ている。

久々に妃奈、霊夢、魔理沙に会うと皆格段に強くなっていた。

どうやら修行をしていたのは俺だけじゃないようだ。全く…心強いな。

そして休む暇なく俺は決戦に向けての作戦を立てることにした。

作戦と言っても各地に住む幻想郷の住人にはその場所を守ってもらうだけなのだが…

幻想郷を破壊されるのは俺自身嫌だからだ。そして誰も死んでほしくない…

そのために俺は決戦の前に各地にいる皆に全霊力、魔力を使用し一度だけだがバリアを発動する仕掛けをしといたのだ。幻想郷にいる全員にそれをするのはさすがに死ぬかと思ったが…霊力、魔力が完全に尽きてしまった。今は妖怪化して回復を待っている状態。まあ残り2日あれば完全に戻るだろう。

「さて…本題に入ろう。妃奈には博麗神社を守ってもらう。博麗神社が壊されてしまったら幻想郷が成り立たないからな。そうなってしまったら取り返しのないことになってしまう」

「うん。わかった」

「霊夢は勿論博麗神社を守ってもらう。魔理沙はアリス、そして妖精と魔法の森を頼む」

「了解だぜ」

「俺も最初は魔法の森を守る。だが、組織に動きがあったら俺はボスを潰しに行く」

「くれぐれも無理はしないでね？兄さん…」

心配そうに此方を見る妃奈。

「大丈夫だ。俺は簡単にはやられないさ」

「文さんのこともあるんだからね！」

「…あ、ああ」

そうです。

実は新聞を頼んだのだが…頼んだ内容はちゃんと書いてくれた。しかし…新聞を捲っていくと…

私、射命丸文はこの度璃空さんと付き合うことになりました！

…え？

つてなりますよね。

そりゃあまさかキスをしているところまで写真を載せられちゃあびつくりますよ。いつどうやって撮ったのかわからないが…

「ま、まあとりあえず…」

「璃空が動揺してるぜ」ヒソヒソ

「あらほんとね」ヒソヒソ

「なかなか見れないですよ」ヒソヒソ

…おいそれ俺に完全に聞こえてるんだが。
おまいらは一体何なんだ？

「とりあえずだ！決戦まであと2日。準備を進めないとな。魔法の森は広すぎるからな、俺が予め魔法の森の9割を結界で覆っておいた。あと博麗神社だが、博麗神社自体にも結界を張っておいたから並の攻撃では破壊されないだろう」

「そんなに力使って大丈夫なのか？」

「心配には及ばないさ。回復は早いからな」

「確かに…いつも何だかんだで1日で回復するわね」

「もはや人間離れしてるからな」

「最初からだけどね」

クス…あはは

自然と笑みが溢れる。

平凡なこの幸せが壊されそうになっているだなんて…想像もつかないな。俺はここが好きだ。まだ来てそう長くはないが皆良い奴ばかり

りだ。

そんな場所が…

そして大好きな皆に…

危機が迫っている。

それも俺たちの世界でのことで…

何としても阻止しなくてはならない。例えこの命に変えても…な。

「さて…あと残り2日もあるわけだし、各自自由に過ごしてくれ」

「じゃあ私は八卦炉の調子の確認と道具の整理をしてくるぜ」

「私はお茶でも飲んでるわ」

「じゃあ私は…」

「妃奈…少し付き合ってくれないか？」

「「？」」

二人を他所にだいたいのことが検討がついたのか、頷く妃奈。

「じゃあすまないが決戦当日だな。その日は色々と忙しくなると思うが…頼むぜ」

「わかったわ（ぜ）」

「では霊夢さん、魔理沙さん、また来ますね」

その場を離れる璃空と妃奈。

このあと二人は誰も居ないところで密談をしたらしい。それはとても深刻な密談で、誰も予想がつかないことだったのだとか…

その日はあるところへ出向く二人の姿があったという。そこで何をしていたのかはその主人と二人しかわからないだろう。

そして決戦前日…

この日は朝から文のところへ出向いた璃空。

出会ってすぐ新聞のことを文に言ったのだが…

あまりにも嬉しそうに語る文を見て許してしまった。

「今日は1日一緒に居よう。まだ霊力、魔力が回復してないからこのままの姿だけだな」

「大丈夫ですよ。私は気にしませんから」

ニコツと笑う文の笑顔が眩しすぎて明日の決戦のことなど忘れてしまふ。

純粹に俺のことを想ってくれる文が俺は大好きだ。文の全てが可愛くて、俺は文に惚れてしまった。そんな文と今日は1日のんびりと過ごす。

そしてそのまま文の家に泊まり朝を迎える…

「決戦当日…か。気合いをいれていかないとな。文、くれぐれも無理はするなよ？」

「大丈夫ですよ。それより璃空さんの方が心配ですよ」

「…心配には及ばんさ」

軽く抱き締めキスをする。文の温もりが伝わる。
戦いが終わったら一緒に住みたいものだな。

「じゃあ行ってくる」

「あ、璃空さん待って！」

「ん？」

チュツ…

「えへへ。行つてらっしゃい」

「文…」

今度は強く抱き締める。

「そうだ文。せっかくだし一緒に写真を撮ろうぜ」

「いきなりどうしたんですか？まあ構わないですけど」

寄り添ったまま一緒に写真を撮る。これは記念だな。うん。

「じゃあ行ってくる」

「うん。気を付けてくださいね」

ギィィ

ボタンッ

「…さて、ぼちぼち行くとするか」

人間界のある組織と幻想郷の全面戦争。
開・幕。

決戦まで残り2日（後書き）

もうそろそろ終わる感がパネエっす…

に、してもここ最近更新速度が格段と落ちてしまった…

しかし！！

今週は朝書けるので頑張ります！！

では続きをお待ちください（――）

決戦（前書き）

いよいよ組織との決戦の日。
しかし予想以上の組織の力に苦戦を強いられる璃空を含める幻想郷
の住人たち。

決戦

早朝から博麗神社に集まる。今まで見たことのない光景だ。
小鳥の囁きさえ聞こえない、ましてやまだ朝日も登ってない早朝からだなんて…これこそ異変だよ本当。

「早朝からすまない。今日が決戦となる日だ。俺からは一つだけ…
皆…死ぬな」

大勢の返答があった。

それもそのはず
携帯電話を作ってもらったのだ。それも改良版…のな。それで各地の皆とも連絡が取れるようになったわけだ。

「さて…そろそろ動きがある頃だろう。皆各地へ移動を頼む。…紫、
いるんだろう？姿を現してくれ」

「バレてたのね？私に用事みただけど何かしら？」

「…言えない。だがお前なら言わなくても察してくれるはずだ」
「…なるほどね。わかったわ。それと見回り役を私がやればいいの
ね？」

「ああ頼む。何かあれば連絡してくれ」

「わかったわ」

スキマの中へと消える紫を見送り、俺も配置へと着く。

すると俺の前に組織のボスである…紅が現れた。

ブォン…

突然時空が歪み、その中から紅が現れる。

紫のスキマとは違い、どうやらゲートのようなものようだ。

「やぁ璃空くん。お久しぶりだね。これから幻想郷を乗っ取らせてもらうよ」

「紅い…貴様の野望など俺が潰す。それと幻想郷は乗っ取らせない」

「ふふふ。では…始めましょうかねえ？」

ブォン…

ブォン…

ブォン…

「ギャアアアアゝア!!」

「第一部隊目はカメラたちです。この程度ではやられたりしないでくださいね？くくく…」

ブォン…

言い終わると同時にゲートの中へと消え去る紅。

「絶対貴様には負けない。魔理沙、アリス…そして妖精たち行くぞ」

「おお！！！」

全員一段となってキメラの集団に立ち向かう。

「数が多いな…ざっと30はいるか？魔理沙。マスパ打てるか？」

「特大のなら撃てるぜ」

「パワーアップしたってことが。本心強いな…じゃあ俺と一緒にタイミングで…頼む！！」

「『光符 サンライティングレーザー』！！」

「『恋符 マスタースパーク』！！」

…ッ！！こいつ…本当にパワーアップしてやがる。威力も元のファインルスパークと同レベル…いや、それ以上だとはな。どんな修行をしたのかはわからないが助かる。

「魔理沙！！そのまま右に半回転しろ！」

「了解だぜ！」

マスパ、そして俺の光符が打ち終わると数多くいたキメラたちは一瞬にして消し飛んだ。

ブオン…

「第二幕…開幕か」

先ほどのキメラとは桁が違うな。毛並みも違う。そして何より厄介なのは…キメラ、そして人間全員俺の烈風陣同様の風を身に纏い、キメラは起風発雷を撃てるだろうと思われる装置を装備してやがる…

「魔理沙…援護を頼む。アリスは妖精たちを頼む」

「わかったぜ（わ）」

「お前が璃空か…紅様に歯向かう馬鹿な野郎は。くくく…キメラア！！奴を殺れえええ！！」

「グガアアアア」

ヒュンッヒュンッヒュンッ

三匹のキメラが突っ込んでくる。やはり烈風陣が発動してやがる…攻防は上昇しないもののスピードが大幅に上がるからな…

「仕方ない…双剣…氷炎刃！！」

氷と炎の双剣。前にも出したが折れた短剣に属性を操り双剣に属性を付けたもの。短剣なしでも構わないが、あつた方が消費が低く燃費が良い。

「…俺の前から消え失せろ！！」

一匹目を切り刻む。氷の剣で皮膚を凍らせ、炎の剣で一気に刻む…凍結した直後の熱は想像以上の痛みを生む。

「グ…ギヤァ、アアァ」

もがき苦しむキメラに止めを差す。

「恨むなら紅を恨め」

ザシュ…

心臓を貫く。次第に息も弱々しくなり…息絶える。

「さてあと二匹…ん？死んでる？」

「璃空…あなたばかり良い格好はさせないわよ？」

「アリス…助かるぜ」

上海と蓬萊の人形で他の二匹のキメラを一掃。
さすがだな。

「さて…あとはどうするよ？」

「…準備完了…行け！おめえら！！」

「ッ…！！」

残りのキメラ7匹一斉に起風発雷を放つ。威力はオリジナルより劣るがこの人数…
さすがに危険だな。

「あれはまずいぜ…」

「魔理沙安心しろ。…その程度何ともない！」返符 燕返し」

「ッ！？な、なんだと…？」放った自分の技がそのままそっくり返ってきやがっただと…？

「ゲ…おおおあああ！！」

組織の連中に起風発雷が直撃する。

威力は2倍にするおまけ付きで返す。周囲が巨大なクレーターになってしまったことから相当の威力だったことが分かる。

砂煙が収まり、連中の方を見ると誰一人姿が見えない。風で吹き飛んだか、それとも…雷で蒸発したかのか。はたまた地に埋もれているのかは分からないが全滅はしたようだ。

「とりあえず一段落だな」

「…いや、まだ一段落には早いぜ」

「ッ！？な…」

目を疑った…

そこにはよく見る顔ぶれがあつたのだ。

そう…幻想郷の住人たちだ。

だが表情を見ると無表情。しかも一人ではなく何人もいる。いや…何体もと言った方が良いだろう。勿論魔理沙やアリスの姿も見えることからこれはクローンと断定できる。しかしただのクローンではないはず。オリジナルの何かしら一つのスペルカードを使用することが出来るに違いない。まずいな…さすがにこの数で一斉にやられちゃ…

「おやおや？あなたが紳さんや仁さんを倒した人間ですかね？僕あの人らの一応後輩になるんですよ。そして一応組織の幹部のリーダーをやらせていただいてる^{けやき}樫^きつて言います。以後宜しくお願いします」

見た目はまだ幼い子供。しかしその容姿からは想像を絶する程の力が伝わる。未知なる力を秘めているのだろうか。

「…ちッ。厄介だな…多分他でもこの状況だろうな。幽香とメディスンだけじゃ太陽の畑はさすがに辛いかな…仕方ない。ここは任せても大丈夫かな？」

「ちょっと辛いかもしれないが…何とかするぜ」

「魔理沙、諦めたらそこで終わりよ。璃空…ここは私たちが任せて行きなさい」

「すまない。だが俺の代わりに召喚獣を置いていく。…『召喚 麒麟』！！」

直後空は雷雲で包まれ、落雷が周囲に落ちる。

その中央に全身に雷を纏い、見た目はユニコーンのような召喚獣が現れる。白く輝くその美貌について目を奪われるほどだ。

「…久しぶりだな。璃空」

「そうだな。…すまないがここは任せてもいいか？」

「構わん。我一人でもな」

「…あれが幻獣麒麟。璃空さんの召喚獣ともなった最強の幻獣ですね。その白く輝く体に触れたものは一瞬にして灰と化す…しかし幻獣が認めた者は灰とならず、その背中にも乗ることも出来るという…しかし幻獣は3mはあると聞きましたが？まだ2m弱ほどですね。子供でも従えましたか？」

「よく調べたな。しかしこいつを見くびらない方が良いで？…じゃああとは頼む。紫！！太陽の畑まで飛ばしてくれ！」

直後真下にスキマが開き、落下する。

多少驚いたが…（主にあまりの速さに）

璃空がスキマへと落下した直後…

魔理沙が口を開く。

「さて…麒麟だったか？どうするんだ？」

「捻り潰すしかないだろう。貴様が魔理沙か？そしてアリスだな？」

我が奴らに突っ込む。貴様らは流れ弾から妖精らを守ってやれ」

「…この人数を一人でやれるのか？」

「我は幻獣…あの様な輩には決して敗北などせぬ」

「さすがだぜ…じゃあ頼むぜ？」

「話は終わりましたか？では…クローンの方々お願いします」

「…」

クローン全てが此方に突っ込んでくる。

さすがにこの人数を一人で相手にするのはきついかな…ってあら？

「灰と化せ…雷撃 雷神の逆鱗」

周囲に雷撃が放たれる。その数は璃空の数倍…威力も倍はあるだろうと思われるくらいの激しい雷撃がクローンたちを襲う。

たった一回の攻撃で半分近く消し飛んだ。やはり意思を持たないクローンは大して驚異ではない。しかしその数が問題なのだ。一度に大量のスペカを唱えられては時空が歪んでもおかしくはないくらいの力が生まれる。

「あらら…半分近くやられちゃいましたか。しかしこれも計算内のこと…そろそろ邪魔な幻獣を消すとしますかね。クローンの方々…やっちゃってくださいな」

幻想郷の住人一人一人のスペカを真似た弾幕が襲いかかる。半分消し飛んだにも関わらず前方は弾幕で埋め尽くされている。そしてこの強大な力の前ではさすがに…

「まずいな…我でもこれは防ぐことは不可能だ。万事休すか…」

「何言ってるの…諦めたらそこで終わりよ。妖精たちも協力しなさい！あれを相殺するのよ！」白符 白亜の露西亜人形『！！』

「アリスの言う通りだぜ！『魔砲 ファイナルスパーク』！！』

「確かに…我としたことが……お主らに言われるとはな。…出力最大！！幻雷 雷神の五十土！！』

互いのスペカと弾幕が交わると同時に周囲に激しい光と爆音が鳴り響く。一瞬にして完全に視界は奪われる。

「…なんだよこれ……」

太陽の畑にスキマで飛ばしてもらった璃空はその光景に驚きを隠せない。

太陽の畑は見るも無惨なものになっていた。あちこちにクレーターが出来、向日葵は全て吹き飛び、そして向日葵と共に倒れている幽香がいた。

「幽香！！』

直ぐ様駆け寄る。

…よし、まだ息はあるな。

「……璃…空…？はや…く……無名…の丘……に…メデイ…ス……」

そのまま意識を失う幽香。どうやら太陽の焔、無名の丘に攻め込んできたようだ。無名の丘には鈴蘭がある。そしてそこを好んで住んでいるのがメディスン。住み処を狙われたメディスンは直ぐ様戻ったのだらう。そして幽香は一人であの弾幕に立ち向かった。

いくら幽香が最強クラスといえどあの数を一人で防ぐのは不可能だらう…しかしあの幽香がやられるとは…

「幽香…今はゆっくり休んでいてくれ」

幽香を安全な所へ運び、傷を癒す。多少魔力も回復させておく。

「早く無名の丘に行かなくては…」

幽香を後にし、

無名の丘へと向かう。

決戦（後書き）

幽香がやられる程組織の力は強大です。
いつ死人が出てもおかしくない。

手強い相手に無事勝利することが出来るのか…

結末を知るものはわたくししかないwww

「当たり前だろうが!!」

バシッ

「痛ッ!!」

「早く更新しろ。へたれ作者が!!」
バシッ

「す、すいません…」

次回 『決戦 その弐』

メデイスンを助けに行った璃空が見たものとは…？

決戦 その弐（前書き）

無名の丘へ辿り着くとそこは見るも無残な光景に。
メデイスンを救うためにやってきた璃空だったのだが…

決戦 その貳

無名の丘に着くと太陽の畑同様荒れていた。

鈴蘭は踏み潰され、一面綺麗な鈴蘭だった場所は見ても無惨になっていた。

一面鈴蘭畑だった場所の丁度中央部に位置する場所にメディスンと組織のクローンらが見える。やはりここにもかなりの数を攻め入まれている。

「ハアハア…まだ…負けてない！」

「…」

かなりの傷を負いながらも反撃を試みるメディスン。しかし反撃さえ難くかわされてしまい、それと同時に紫のクローンがスペカを唱える。

「『紫奥義 弾幕結界』」

なんだと！？それは紫最強スペカ…それさえも真似出来るのかよ。冗談きついな…おい。

「させるか！メディスンそのまま動くなよ！！」

「え？っ、うん」

「スペルカード『炎符 獄炎門』！！」

メディスンの周囲に獄炎が舞い上がる。

しかし紫クローンによるスペカで獄炎ごと結界を張られ弾幕の嵐がメディスンを襲う。

「チツ…このままじゃまずいな。『雷撃 雷神の逆鱗』!!」

麒麟並の力を込めて放つ。メディスンに攻撃を仕掛けている紫クローンを狙う。

しかし予想外のこと起きてしまう。

クローンの中に俺の姿をした奴がいた。そしてそのクローンのスペカは…

『返符 燕返し』

力を込めたにも関わらず自分の元へ返ってくる。しかも威力もスピードも二倍で…

予想外のことに反応が遅れ、直撃してしまう…
だが、直撃する寸前に雷を操り威力を減少させたのだが、それでも威力は衰えずそのまま直撃してしまう。

「ぐ……」

多量の吐血…そして所々電撃により焦げていた。周囲に肉の焦げた嫌な異臭が漂う。

属性に耐性がある俺でなければ今頃焦げた処ではなく、間違いなく丸焦げになっていただろう…

吐血と身体中の激痛、そして電撃により若干麻痺を負いながらも何とか持ち堪えクローンの方を見る。すると俺のクローンは更に驚くことを仕出かす。

メデイスンの方に手を翳す。

まさか…！？

「ぐ…やめ…ろ……」

思いの外ダメージが大きい。そのまま倒れて込んでしまう。麻痺により思うように体に力が入らない。しかし何とか奴等の方を見る。すると…

フッ

「…え？」

メデイスンを守っていた獄炎はクローンにより揉み消され、そして弾幕の嵐がメデイスンに襲い掛かった。

「キヤアアアア!!」

「メデイスンっ!!」

メデイスンの悲鳴が周囲に響く。

そして弾幕の嵐が降り注ぎ終わるとクローンらはメデイスンの亡骸を確認する。メデイスンはピクリとも動かず、横たわっている。そして今度は此方に近付いてきた。

「…貴様ら…ぶっ殺す!!」

麻痺していたはずが何事もなかったかのように立ち上がる。そして容姿が変化し髪は伸び、赤く変色する。

妖怪化したのだ。

傷は一瞬にして癒え、妖力が大幅に増幅する。

「…俺の前から消え去れ。『魔炎 エクスプロージョン』」

クローンらの頭上に巨大な爆炎を出現させ、そのままクローンに直撃させる。あまりの広範囲に自分まで巻き込まれてしまったため、自分処は無効化する。

無名の丘に攻め込んできたクローンは全滅。

そしてメデイスンが死亡…今俺はメデイスンの亡骸を抱えそつと鈴蘭の上に置く。

爆炎が直撃する直前に即座にメデイスンの処まで移動しメデイスン、そして自分の周囲を無効化した。

「すまない…俺が無力なばかりに……」

小さな雨がメディスンにしたた落ちる。それは何とも悲しい音色を奏でながら弾けてしまった。その本人の心を写すかのようだった。

無名の丘にて

クローン全滅。メディスン死亡…

ここは幻想郷の地底に位置する地霊殿。

ここでも激しい戦いの最中だった。

「…さとり様。さすがにこのままではきついですね…」

「確かにこのままでは此方がやられかねませんね。しかも彼方にはトラウマがありません。第三の目で見ても何も読み取れませんし。意思を持たないクローンとやらは何とも厄介ですね。何より…この数が一番厄介です」

さとり、お燐、お空、そして勇儀の四人は地霊殿に攻め込んできたクローンに完全に囲まれていた。卅の陣をとりながら、そして神経を磨り減らせながら戦っている。

キメラは難なく倒せたのだが、クローンのあまりの数に手こずっているのだ。

いくらさとりが幻想郷の住人のスペカを使用することが可能だとしてもこの数を一片に片付けることは難しいだろう。

「あの子らが生きていれば…」

「…さとりさんよ。今は目の前に集中しといた方がいいんじゃないか

「あいつらの死を無駄にしないために」

「…そうですね」

キメラ戦でキスメが討死。そして目の前のクローンにヤマメ、パルスイも討死。

今では地霊殿も残り5人になってしまった。

だが決して諦めたりはしない。あの子らのためにも負けるわけにはいかない。そしてここ地霊殿…そして幻想郷のために。

「…そろそろですかね。皆さん構えてください」

「「「？」」」」

まるで何かを悟ったようなさとの口調。

するとクローンの背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「スペルカード『心符 没我の愛』」

声の主はさとの妹である古明地こいし。こいしは第三の目が他から嫌われることを知り閉じてしまった。心を読み取る力を失った代わりに無意識を操る程度の能力を身に付けた。無意識を操り、自分の存在を悟られず、クローンの背後へ回り込むことが可能だったのだ。

「さあ皆さん！今です！」

「こいしのやつ…よくやった！『力業 大江山嵐』！！』」

「あたいも続きますよ！『死符　ゴーストタウン』！！」

「『爆符　ギガフレア』！！」

「璃空さん…力を借ります。『封符　完全なる世界』！！」

4人によるスペカがクローンに直撃した後、さとりは完全なる世界を使用する。念には念を入れる。クローンは十分4人でのスペカで倒せるだろう。

しかし…さとりは気付いていた。クローンの中に邪悪な気配がする者に…

決戦 その式（後書き）

邪悪な気配…

それは一体誰なのか。そしてさとりたちの運命は…

次回 紅魔館での戦いとなります。

幻想郷最強の吸血鬼。

楽勝にも思えるのだが果たして…

決戦 その参（前書き）

あの紅魔館でさえ苦戦。その結末は何とも残酷だった…？

決戦 その参

紅魔館は今危機に陥っていた。クローンまでは楽に倒した紅魔館一家。

しかし組織の幹部である兕梼ゆむに苦戦を強いられている。

幻想郷最強の分類に属する吸血鬼をここまで追い込む兕梼の能力（装備）とは…

『あらゆるものを具現化する程度の能力』

これは組織のボスである紅の能力の弱小した能力にすぎないがそれでも強大な力を誇る。

「く…傷も治らない…このままではまずいわね…」

致命傷ではないものかなりのダメージを負う紅魔館の主であるレミリア・スカーレット。幸い誰もやられてはいないが皆ボロボロの状態である。

「お嬢様。ここは私がやります」

「下がってなさい咲夜。彼奴には敵わないわ。この私でも…」

「皆で協力すればきつと勝てますよ!」

絶望的な状況だがそれでも諦めぬとばかりに中国が言う。しかしこの状況で無闇に攻撃を仕掛けるのはあまりにも無謀…

與楸は銀のナイフを具現化し、吸血鬼に放ちそれによりレミリアは再生が出来なくなってしまう。吸血鬼は強力な力を持っているがその分弱点が何かと多い。まず日差しに弱い。そして水、銀のナイフにも弱い。

屋敷内でなければレミリア、そしてフランドールは今頃灰と化していただろう。

「んーそうだな。そろそろ終わりにしようじゃないか。俺もいつまでも遊んでる暇はない」

「ッ！！お、お嬢様！」

小さな太陽が屋敷内の天井付近に現れる。しかし日差しが照らされる前に時間を一時止めレミリア、フランドールを日陰になる場所へと移動させる咲夜。

「ありがとう咲夜」

「助かったよ」

「…いえ。無事で何よりです」

「邪魔な能力だな。これじゃいつまでたっても終わらないじゃないか。

ん？そうだな…こんなものを具現化したら面白そうじゃないか」

現れたのは

能力無効化装置…

「なんですかあれは…」

「…能力無効化装置だと思うわ。このままではまずいわ。太陽がある限りレミリア、フランは自由に動くことは出来ない…私たちだけで彼奴を倒すことは難しいわ」

絶望的なこの状況にある一つの光が現れる。それは…

「おや？お困りのようだね。私が力を貸そうか？」

「…萃香？」

「話は後。彼奴を倒すよ」

「ん？鬼か…？しかし鬼だろうが俺に勝つのは無理だ…ぜ？」

「そんなのはわからないよ？」

奥襟の胸部に萃香の腕が突き刺さる。鬼である萃香は身体能力もず

ば抜けている。ましてや軟弱な人間を殺すことなど造作のないこと。

「グ…ゴボツ……」

多量の出血、そして吐血。胸部に風穴を開けられた奥楸は最後の力を振り絞りあるものを具現化させる。

「…くたばれ化け物ども」

巨大な津波、大量の弾幕、そして一番脅威であった萃香を含め目潰しをするための激しい光が襲い掛かった。

「ッ！！ま、まずいつ！！レミリア、フラン何とか逃げて！」

しかし太陽があるため無闇に動くことも出来ずそのまま奥楸も含め津波に飲まれ、屋敷内にいる全員に弾幕の嵐が襲い掛かった。

具現化する道具は壊れ、太陽、弾幕は消え、津波は屋敷外へと流れ、周囲は静寂に包まれていた。

その中である者が意識を取り戻す。

「うッ…皆！？」

意識を取り戻した萃香の目に写るものは地獄だった。逃げ遅れた妖精メイドは全滅。そして力なく倒れ込んでいる咲夜、パチュリー、美鈴、そしてパチュリーの使いである小悪魔。

しかしその4人の姿は確認出来てもレミリア、フランの姿は見当たらない…

津波に流され、太陽の日差しが…

彼女は信じたくはなかったが真実を受け止めるしかなかった…

今は一人でも多くの命を救うのが優先。悲しいのは自分だけではない。

「皆！！大丈夫！？」

「う…」

「良かった…まだ息はある。今助けるからね！」

かすかだが皆息はあった。しかし皆重症で油断出来ない状態だった。すぐにでも治療が必要くらいひどかった。特に人間である咲夜がひどく、瓦礫の下敷きになり左腕と足、そして肋骨の骨が折れていた。そして容態を見る限り内蔵を痛めているようだった。

「大丈夫。今すぐ治療するからね！もう少しの辛抱だよ」

ここに来る前に妃奈から応急措置の道具を預かってきていた。まるでこうなることを予知していたかのように…

萃香は全員の応急措置を終え、また攻め込んでくるかもしれない

めここを動くことが出来なかった。今は容態は大分落ち着いてはいるもののいつ容態が急変するかわからないため離れるわけにもいかずこのままここを守る。紅魔館で一大事が起きてる中ここはいつも変わらず静寂だった。一つ違つたとすれば綺麗な桜の木の前で死体がそこらじゅうに転がっていること。力なく横たわっている死体の中にはカメラ、クローンそして組織の幹部らしき人物の姿があった。その中ここ白玉楼の主である幽々子はそんな死体を他所に空をボーツと眺め一言呟く。

「…愚かな人間……」

庭師である妖夢はそんな幽々子の背をただひたすら眺めていた。

ここに攻め込んできた組織は皆殺し。主に幽々子の能力によるものだった。偶然にも璃空の姿をしたクローンは一人もいなく、能力を無効化されることはなかった。

幽々子の能力は死を操る程度の能力。

それは妖怪だろうと人間だろうと即死を意味する。幻想郷の中で最恐といっても過言ではない。そしてその能力の前に組織の幹部であった者は名前すら言えずに幽々子の前で力尽きたのだった。

決戦 その参（後書き）

今回展開が早すぎましたね…そこらへんは申し訳ないですorz

私情ですが専門の県大会（カット&ブロー）に出場することになったのでこれから忙しくなるんですよ…なので更新速度が大幅ダウンします。

しかもこれから約1ヶ月先輩のところに泊まるので朝も夜も小説を書いてる暇がないですorz

あ、

そういえば皆様にひとつアンケートを取らせていただきたいと思います。

東方夢幻記の次回のことです。次回はどこの場面が見たいでしょうか？

次回らへんで周りの決闘をラストにしたいと思いますので…

見たいところがあればお願いします（――）

- 1、永遠亭
- 2、守矢神社
- 3、妖精中心
- 4、その他（他にあればその場所をお書きください）

あ、

なんだか最近苦戦ばかりでなんだこれー

って感じですが…

死人も出ましたし……

ネタバレはしたくないのであまり言えませんが最後には大丈夫です

！↑何が？w

とりあえずアンケートにお答えいただけると有り難いです。

とりあえずそれまでは二作目を更新しまーす。

アンケート期間は短いですが（主に忙しくなるので…）よろしくお
願いします（――）

決戦 その肆（前書き）

久々の更新です。

サボってたわけではないのですが…本当忙しくて…orz
次回も早く更新したいと思います。

決戦 その肆

幻想郷のとある湖上で妖精たちはクローンと対面してしまった。

「チルノちゃん…やっぱり帰った方がよいよ。璃空さんも大人しくしてろって言うてたよ」

「幻想郷の危機なのにあたいたちだけ隠れてられるか！」

「そうだけどさ…」

「大ちゃんは戻っててもいいよ。あたいは行く」

「チルノちゃんだけ行かせるわけには行かないよ。だったら私も行く…ッ!!」

「早速出てきたね。…ってあれ？リグルちゃん？…と…ゲ…幽香だ…」

「……………」

「？二人ともなんか変じゃない？ねえ大ちゃん」

「…チルノちゃん…あれが璃空さんが言ってたクローンだと思う…私たちだけじゃ勝てないよ。逃げなきゃ…」

「逃げてたまるかー！」

妖精でも多少のプライドはあるのだろうか、このまま逃げることはせず何の策もなく突っ込むチルノ。

「このおおお！」

「『マスタースパーク』」

「チルノちゃん！」

何の策もなく突っ込んだチルノを返り討ちにするのは容易かった。幽香のマスパによりぶっ飛ぶチルノを追いかける大妖精。

「チルノちゃん大丈夫！？」

「う…大ちゃ…逃げ…て…」

「チルノちゃんを置いて逃げれるわけないよ」

「だ…ちゃ…うし…ろ…」

「ッ…！」

「『季節外れのバタフライストーム』」

チルノ、そして大妖精に止めをさすべくリグルのクローンがスペルカードを唱える。大妖精は目の前の弾幕に自分の最後だと察し目を瞑る…

しかし不思議なことに痛みはいつまでたっても表れることはなかった。

恐る恐る目を開けるとそこには知り合いの顔があった。しかしどこか雰囲気違う。いつもは頭に付けているはずのリボンは頭上を回ったり浮いたりし、そして背中には漆黒の翼を生やし、右手には漆黒の大剣を持ち、左手に球状に集めた闇の魔力を構えている。

「ルーミアちゃん？」

「…大妖精か。邪魔だ」

「え…？」

此方を見るなりすぐに小さな球状の闇の魔力を圧縮した弾幕が放つ。避けることも出来ずチルノと大妖精はそのまま直撃し数メートル飛ばされてしまった。しかし不思議とダメージは少なかった。

「う…ルーミアちゃん」

「さあ始めようか…『魔剣 ストームブリンガー』！！奴等を一扫しろ！」

「『マスタースパーク』」

「『季節外れのバタフライストーム』」

幽香、そしてリグルのクローンは各々スペルカードを唱える。しか

しそれがルーミアに当たることではなく、それはストームブリンガーにより消滅する。

「私の前から消え失せろ……」

スペルカードを消滅後クローンを斬り付ける。不思議なことに斬り付けられると血が噴き出すことはなく、ミイラのように生氣及び血を吸われてしまいクローンは見るも無残な姿に変わってしまった。

「く……あははははは！……どいつもこいつも弱い……弱すぎる！
まだ血が足りないぞ……もっと……もっと血を吸わせろおお！！」

ギロツ

まるで血に飢えた獣のような目をしたルーミアは此方を見るなりストームブリンガーを構え物凄い速さそして表情で突っ込んできた。

「ひッ……ッ」

氣を失ったチルノは地面に横たわっているが、大妖精は辛うじて意識はあり、その表情に恐怖を覚えた。

「貴様の血も吸わせろおお！」

「きやあ、ああ、あゝあゝあゝ　ああゝ　あああ……」

逃げるにも足がすぐみ動けない大妖精はそのまま斬り付けられてしまふ。生気そして血を吸われ、大妖精はクローン同様無残な姿にな

「うーまた無効化ですか…やはり兄さんの能力は厄介ですね…
なんてね」『魔炎 エクスプロージョン』…霊夢さん結界お願いしますね」

「わかってるわよ」

爆炎が周囲を飲み込む。最初のうちに璃空のクローンはある程度片付けたため魔炎は無効化をされることはなかった。先ほどの無効化をしたクローンは霊夢が瞬殺。もう残りはいないだろう。

「あらら…まだまだいますね半分はやるつもりだったのですが…」

「被害があまりにも少なすぎるわ。幹部がいるようなね」

クローンの数、そして幹部がいるとなるとこの二人でもさすがにきついものがあるだろう…しかし皆各地を守るという使命があるため持ち場を離れるわけにもいかず、助けが来ることはまずないだろう。いや、一人だけいる。それは…

「すまない遅くなった。少しは苦戦しているようだな」

「何呑気に喋ってるのよ。今は奴等を片付けるのが先でしょう？」

「勿論。じゃあ二人は博麗神社を頼む。さすがにお前らでも紅相手じゃきついだろうからな」

「「ッ!!」」

「あの紅が来てるの…？で、でも予知出来なかったよ？」

「それは奴の能力で予知の能力を一時的に消滅したんだろう。まあ少なからず俺がいる限り消滅はされないから大丈夫だ」

「無理はしないでね…」

「ああ、さあて……まずは雑魚を片付けるとするか。『爆水 リヴ アイアサン』そして『雷撃 雷神の逆鱗』」

巨大な津波が発生し、一気にクローンを飲み込む。そして津波に雷撃を放ち感電させるという大技。

津波が引くとかなりの数のクローンが消え去っていた。流されたのが感電したのかは分からないが数が減ったお陰である男の姿が確認できた。

「やあ璃空君。よく僕がここにいると分かったね」

「貴様の考えていることなど分かる。さあ…始めようか」

無と消滅の能力が激しくぶつかり合う。しかし双方の能力は五分…この戦いの結末とは…？

決戦 その肆（後書き）

やっとここまで来ました…あと少しですね
頑張ります

今回はEXルーミア登場させました。
そして久々の主人公登場でしたね。

あー授業がだるい…
にしてもW杯日本勝ちましたね。
おめでとうですね。
はい。

決戦 その伍（前書き）

はい。

久しぶりの更新となります。

本当忙しくって…

しかも今回は長いですから更新が大幅に遅れてしまったわけです…
申し訳ない

では続きをお読みになってください（――）

決戦 その伍

莫大なエネルギーが生まれ、暴走しかけたが双方の能力でそれは消し去る。

そして今、双方ぴくりとも動かず睨み合っている。緊張状態が続く中痺れを切らした幹部の一人らしき者が言葉を発した。

「ずいぶん長いねえ…紅さん俺がやってもいいですかねえ？」

「おやおや…困った子ですね…まあ良いでしょう。好きにきなさい」

「りよー。じゃあ頼むぜエレメントマスターさんよお」

「…煉魔^{れんま}…生きていたのか」

煉魔とは俺が組織を一度壊滅状態にした時にいた幹部の一人。当時幹部のリーダーだったのだが…

確かにあの時殺したはず…しかし目の前にいるのは紛れもなく煉魔だった。しかもあの時には持ち合わせてなかった禍々しいほどの魔力を感じる…

「んー死にかけてたんだけどねえ。紅さんの能力で一命は取り止めたわけよ」

「能力？消滅と…創造を具現化する能力か。不老不死の薬でも作ったのか？」

「残念ながら不老不死ではないですねえ。まあ…あなたに教える義理もないんですが…ねえ！！」

「なッ！」

ボキボキ

やけに低音の鈍い音が響く。璃空の肋骨は砕け同時に激痛が走る。

「痛ッ…」

「あるねえ？こんなに弱かったでしたっけ？つまらないですねえ」

肋骨を抑えながらひざまずく璃空を嘲笑うかのように言い切る煉魔。

「…成る程。賢者の石でも作ったのか？それにより身体能力が高まり、そしてその禍々しい魔力…煉魔。お前も落ちたな」

「ッッ！！貴様に何が分かる！瀕死の俺を救うには最早これしかなかった…人間に復讐するまでは死ねないんだよ！！」

「下らない。復讐なんてものは愚かなことだと気付かないのか？」

「黙れ…貴様に…貴様に何が分かるんだああ！！」

璃空の挑発に容易く乗ってしまう煉魔。彼は幼い頃親を目の前で殺され、その時から人間を憎むようになった。子供ながら復讐を誓うが彼には力がなかった…しかしある日紅と出会い力を入れる変

わりに忠誠を誓ったのだった。しかし煉魔は気付いていなかったのだ。いや、記憶を消滅させられたのかもしれない。自分の親を殺したのが紅だと言うことに…

挑発により煉魔の攻撃は単純になり避けるのは容易かった。

「煉魔…」

「…貴様に…貴様に何が分かる」「分かるさ」…何？」

「お前のその苦しみも悲しみ…復讐したいという気持ちも分かる。だがな…そんなことをして一体何になる？…俺は仲間一人さえ救えなかったんだ。お前から組織の連中からな…だから俺はお前らを憎んだよ。正直殺してやりたくて仕方なかった…だがそれで一体何になる？仮にお前らを皆殺しにしたところで何になる？残るのは虚しさだけだ。復讐は更なる復讐を生む…お前はそんなに弱くない。自分の弱さに負けるな…本当は気付いてるんだろ？」

「くそ…何でだよ…何でお前はいつもそうなんだよ…」

「もうやめてくれ。俺はお前と戦いたくない。お前は組織にいるような人間じゃない」

「う…くそ…くそ…」

「煉魔…もうやめるんだ」

「……」

小さく頷く煉魔。

ドス……

鋭い物が煉魔を貫く。それが紅が放った剣だとは煉魔も璃空でさえ信じられなかった。

「え？…くれ…ない…さ…ん？」

「やれやれ。君には絶望したよ。まさか私を裏切るだなんて…あまりにも悲しく、切ないことだよ」

「煉魔！！大丈夫か！？」

「あ…ああ……」

ビクン…ビクン……

ヤバイ…完全に心臓を貫かれている。このままでは……

剣、そして傷を無くす。しかしボスである紅に刺されたという傷はあまりにもショックだったろう。

「…（無を操る能力…やはり素晴らしい代物ですねえ）ふふふ」

「霊夢、妃奈。煉魔を頼む」

フワッ

風を操り二人の元へ煉魔を運ぶ。

「わかったわ。怪我は…ないみたいね」

「兄さん…少し能力を使いすぎでは？」

「心配はいらないさ。それにそのまま煉魔を放っておくわけにもいかないだろう？」

「兄さんらしいね。でも無理はしないでね？あと…絶対勝って」

「ああ。俺は負けない」

「ではそろそろ私がお相手しましょう。幹部も全滅みたいですしね。本当に使えない連中ばかりで困ったものです」

部下をゴミのように扱う紅。そんな紅に怒りを芽生える。

「お前は…部下を…仲間を何だと思っているんだ！紅…貴様は部下をゴミのように扱い、そして何より部下に手をd「使えないゴミ（煉魔）を処理するのは当然でしょう。君ほどの人間が何を熱くなっているんですか？くくく…使えない物などただのゴミ同然でしょうに…ふふふ…あはははは」

「…やはり貴様は生かしておけない。貴様の狂った野望を断ち切る！」

「良いでしょう。やれるものなら…ね！」

「『雷撃 雷神の逆鱗』！！」

同じ技、そして同じ力のスペルカードを唱える紅。

「なッ…」

「何を驚いているのですか？君のスペルカードを真似ることなど容易いことだというのに…これしきのことと驚かれるだなんて思ってもいませんでしたよ」

何故だ…

真似されたことはどうでもいい。あの時も使ったからコピーされているのは計算内のことだ。

だが何故同じタイミング、そして同じ力…

偶然？

否、また何か隠してる何かが…

「…新しい能力か」

「能力？ふふふ。能力ではないですねえ。まあ教えるつもりなどありませんがね。さあ次行きますよ？『秘弾 そして誰も誰もいなくなるか？』」

紅の姿が消え、無数の弾幕が現れる。

フランドールのスペルカードを真似たのか。スペルカードを唱えた本人は一時的に消え、無数の弾幕が現れるスペルカード…だが俺には効かない。

「そのスペルカードを『無効化』する」

無効化により弾幕も消え去り、姿を現す紅。

「おやおやそんなハイペースで無効化を使っても大丈夫ですかねえ？無効化はかなり消耗が激しいですからねえ…くくく」

「『炎弾 メテオストライク』」

「無視とは何ともつれませんねえ。（しかし新しいスペルカードとは…やはり私は彼がほしい…ふふふ）」

上空から約1m近い無数の隕石が紅に落下する。

周囲に隕石の熱、そして落下による砂煙が起こる。

砂煙が消え紅がいた処を見ると隕石により地面はクレーターが出来ていた。しかし紅の姿はなく、隕石により吹き飛んだか…それとも潰れたのか…いや、こんなに簡単に死ぬ奴ではない。だとしたら一体どこへ…

「璃空！上！！」

「ッ！！」

目を疑った。

頭上に隕石が落下してきていた。

俺のミス？

いや、

これは…

「紅か…」

頭上の隕石を全て無に返すとすぐに此方に雷撃が放たれていた。

「ちッ…」

計算してのことか、後方には博麗神社、そして霊夢、妃奈がいた。避けるにも避けられずそのまま無効化の連発。

「（まずいな。このままでは魔力が底を尽きるのも時間の問題か…しかし紅の姿が見えないんじゃないや防戦一方になってしまふな）…ちッ」
「兄さん！助太刀するよ」いや、大丈夫だ妃奈が博麗神社を離れたらまずい」…でも……」

「大丈夫だ。このまま易々とやられたりはしない」

神経を研ぎ澄まし、紅を位置を計る。

「…そこか！『光符 サンライトニングレーザー』」

紅がいるであろうと思われる空間にレーザーを放つ。すると予想は当たりレーザーは消滅させられた。

「バレてしまいましたか。もう少し弱らせようと思ったのですがね

え。まあいいでしょう。だいぶ魔力を削ることが出来ましたしね…
ふふふ」

「相変わらずタチが悪いな」

「璃空！！大丈夫か！？」

「…魔理沙か。それにアリス…さとりまで。皆どうしたんだ？持ち場を離れるなど言っただが？」

「全部蹴散らしてきたから大丈夫だぜ。紫からボス以外残ってないと連絡も来たからな。助っ人に来ただぜ」

「さすがのあんたもきついでしょう。だいぶ魔力も消費してるみたいだし」

「璃空さん。協力しますよ」

決戦に勝ち残った幻想郷の住人は皆博麗神社へと集まった。残念なことに命を落とした者も中にはいた。命は落とさずとも皆それなりのダメージを受け、中には重症の者もあり、重症の者は永遠亭で治療を受けている。

「皆無事で何よりだ。だがダメージがありすぎる。皆は少しの間休んでいてくれ」

「そんなこと言ってる場合じゃ」頼む。こいつは俺にやらせてくれ」

…わかったぜ」

「…え？」

さとりは第三の目で璃空の心を読み取ってしまった。その内容があまりにも驚くことだったのだ。

璃空はさとりにあることを頼んだ。

（さとり…お前にしか頼めないことだ。頼んだぞ）

「え？ちよ…璃空さん？」

さとらの方を一瞬だけ見、ニコツと笑って見せる璃空。それが何を意味することか。さとり…そして妃奈以外知る者はいなかった。

「さあ…始めようか」

「ふふふ。待ちくたびれましたよ」

「『魔剣 クラウ・ソラス』！！」

「クラウ・ソラスですか。それはさすがに厄介ですねえ」

「奴を…焼き付くせ！」

ポツポツポツ

獄炎の炎が巻き上がる。
そして紅に斬り付ける。

しかし虚しくも紅に当たることなく空振る。

「そんな大振りでは私には当たりませんよ？」

「そうだな…このままでは…な！！」

「なッ！？」

妖怪化にスピードが上昇。あまりの速さに紅でさえ避けることが出来ず、斬り付けられる。

「ぐ…ガハッ…ま、まさか…妖怪化が出来ると…は」

「貴様に負けないための力だ」

「く…く…残念ながらこの程度では私はやられは…？な、何故道具が使えない…」

「全て無に返した。貴様の能力はもう無意味だ」

「ふ…ふふ。随分と甘いですね…。無と消滅の能力は五分。残念ながら私の能力であなたの無を消滅することは出来ませんが相殺することは可能…残りの能力で決着着けるとしましょうか…ふふふ」

クラウド・ソラスで斬り付けた傷を得体の知れない物で癒す紅。それが何なのかは分からないが…一瞬にして傷が癒えたところを見るとかなりの物だろう。

しかしやはり能力は五分か。これでは長引いてしまうな…

「『魔炎 エクスプロージョン』」

「エクスプロージョン…その巨大な炎で全てを焼き払う…しかしですねえ。私には効かないですよ?」

パチンツ

指を鳴らすとエクスプロージョンは爆発。
周囲に爆音が鳴り響く。

「やはり無意味か。やはりクラウド・ソラスで殺るしかないか…」

「ふふふ。クラウド・ソラスでさえほら…この通り」

ポツポツポツ

璃空のクラウド・ソラスを創造し具現化する。

「それがどうした?」

「ふふふ。最強の武器さえ真似られているというのに微動だにしないとは。さすがですねえ」

勢い良く地面を蹴り、そのまま紅へと突進する。

2、3度斬り付けるが全て憚れてしまう。

しかし猛攻を止めることはせず、緩急を入れながら、そして蹴りを

入れたり和不規則な攻撃を仕掛ける。

「ぐ……」

蹴りが紅を捉え紅は数m飛ばされる。

「……さすがに身体能力では負けてしまいますねえ……やはり賢者の石でも具現化しましょうか」

「させるか！！（これ以上はまずい……体が持たない）」

手を休めず、更に速く魔剣を振るう。賢者の石を具現化する時間を与えられず、防戦一方の紅。

「（まずいですねえ……このままでは此方がやられるのは時間の問題ですか……この状況を……）……ッ！！」

一瞬の間を見逃すことなく首を跳ねようとするがかする程度だった。光と炎の魔剣であるクラウ・ソラスで斬り付けられた紅の首は出血はなく、変わりに肉が焼け異臭が周囲に漂っていた。

斬り付けた箇所は獄炎により肉は爛れ、その箇所はまるでゾンビのようになっていた。

「痛ッ……ぐ……」

斬り付けられた箇所の痛みは想像を絶する痛みだろう。斬られた箇所は徐々に奥へ奥へと侵食していく。その度に激痛が走り、意識を保つことさえ困難なほどだ。

「このまま待つ気はない。一気に決める!!」

最大級の力を込め、斬り付ける。

「ぐ…あああゝ ああゝ あゝ」

激痛が襲う中横へと転がり逃げる。しかし完全に避けることは出来ず、左肩は切断され、そして腹部に深い傷を負ってしまう。

激痛により悲鳴に近い声を発する。あまりにも醜く、見ている幻想郷の住人の中には目を背ける者もいるほどだ。

「あの世に行ったら自分の行為に後悔しろ。そして一生償うが良い…これで最後だッ…？」

妖怪化による反動。妖力は尽きた訳ではない。体が悲鳴をあげたのだ。元々生身のごく普通の人間だった璃空には妖怪化に耐えるほど体は強くなかった。

妖怪化は解け、その場に倒れ込む。

「く…そ…最後だと言うのに…」

「ふ…ふふ…まさか二度も敗北するとは…しかしこのままでは終わらせませんよ…ふふふ…」

どこに隠し持っていたのか光る物を取り出した。手に取ると同時に激しく輝き出し光は紅を包み込む。

「ッ!!兄さん!!紅は私たちごと幻想郷を消滅させる気だわ!!」

「何!?!く…無理矢理相殺を打ち消しやがったのか…」

「あはははは…全て消えて無くなれええええ!!」

「ッ!!」

消滅の能力を極限まで高め、そして光輝く物により更に能力が強化される。その威力は簡易に幻想郷を消滅出来るほどだ。

「く…このままでは…」

「兄さん!!」

「来るな!!今来たら巻き込まれるぞ!!」

無の能力により消滅を食い止めてはいるが、戦いより魔力、妖力及び霊力をかなり消費してしまったことにより無効化することが出来ず食い止めることしか出来ない。消滅の能力に対抗出来るのは無以外にない。幻想郷の住人がスペルカードを使用したところで消滅させられるだけである。

「く…（あまりにも強力すぎる…今の俺では…）」

一瞬力が弱まってしまう。それにより一気に消滅の力が溢れ、幻想郷…いや、博麗神社は激しい光に包まれた。

決戦 その伍（後書き）

次回はやっとかライマックス？

となるんじゃないでしょうか！！

正直クライマックスになるかはわたくしにも分かりませんwww

では次回もお楽しみに！！

決戦 その陸（前書き）

今回も遅くなりました!!

久々の暇な休日で更新することが出来ましたよ…

いやいや。

本当に忙しくって泣けましたよ…泣

では結末をお読みになってください

決戦 その陸

光が博麗神社を包み込む中誰もが終わりだと思っていた。

しかし不思議なことに痛みはない。消滅は痛みを感じないのだろうか…？

いや、これは…

「…く……ハアハア」

「璃空！！」

「兄さん！！」

「何とか…間に合ったようだな…」

璃空により消滅は無効化された。しかしあまりに強大な消滅の力に打ち勝つためには妖怪化しなければならなかったため体にかかりの負担をかけながらの無効化だった。

「まさか…まさか再び憚れるとは…私の最大の…最強の……ありえない……」

「お前とは背負ってるものが違うんだ。仲間を大切にしないお前は…な」

「く…君さえ……君さえいなければ……死ねええええ！！」鋭いナイフのような物を具現化し突き刺そうと突進してくる。

「く…（体が動かない…）」

「璃空！！」

鋭いナイフが肉を突き破り周囲に血が飛び散る。

「…え？あ……や？」

「璃空さん…あなたを死なせはしないですよ？」

璃空に突き刺さる直前に文は己の命を省みずに飛び出したのだった。

「文…嘘だろ…？」

「璃空さんは幻想郷に必要な人材です。こんなところで死んでしまふようなら…ゴホッゴホッ……」

「文！！今直すから待って……ッ！？」

「ふ…ふふ。もう完全に底を尽きたようです…ねえ。先ほどは邪魔者が入りましたが…今度こそ殺してあげま……ッ！！」

黒刀を具現化し璃空に振り下ろそうとするがその前に紅の心臓に一つの刀が突き刺さる。

「ぐ……妃奈…く…ん」

「兄さんは殺させない。貴方の野望ももう終わりです。ダインス

レイヴ……吸い尽くせ……」

「ぐ……ああ、ああああ、ああ……！！！」

魔剣ダーインスレイヴにより全ての血を吸われる。全身の血を抜かれるその痛みは想像を絶する。

「人間とは何とも愚かな生き物ですね……」

妃奈の瞳は悲しみに染まり何とも悲しい瞳をしていた。

組織のボス紅は幻想郷にて死亡。一人の人間の野望により幻想郷は大きなダメージを負ってしまった。そして一人の人間にも……

「文……すまない……俺に力がないばかりに……」

「大丈夫です……よ……あなたのせいではないですから……自分を責めないで……」

傷口からは大量に出血する中、文は自分を責める璃空にニコツと笑って見せた。

「……文」

「あなたに会えて良かった。わたし……幸せ……でしたよ？ゴホツ……先に逝くこと……ゆるし……て……」

「文……いくな……くそ……う……あああああああ……！！！」

幻想郷の住人たちは彼に何も言えなかった。彼の悲しみでさえ少しも和らぐことの出来ない無力さ……誰もが自分を責めていただろう。

大切な仲間そして大切な人を無くした者も数知れない。皆が哀しみを抱いている中……やっと決戦が終わったと思っていた矢先のことだった。

「やはりか……」

「？」

一人の人間がいきなり声を発した。その意味が分かる者が果たして何人いるだろうか……

「璃空さん……やはり……」

「ああ……皆すまないが……俺も後少しの命のようだ」

「何を言ってるんだ！そんな冗談は……ッ！……そ、それは……」

「察しの通りだ魔理沙。……やはり完全には消滅を食い止められなかった。何とか俺だけで食い止めは出来たが……な」

璃空の右下半身から徐々に消滅していく。

「……兄さん……自分を犠牲にしないって言ったのに……う……う……」

「仕方ないだろう……決戦の前に”こうなること”はわかっていたん

だから。それに約束しただろ？泣くなつて……妃奈…お前にはこれからの幻想郷を頼めるか？俺たちに協力してくれた皆にこれからは妃奈…お前が恩返ししてくれ。俺はもう長くない…。さて、消滅する前に”あれ”をしなければな…」

「…兄さん…やはり”あれ”をするには魔力が足りなさすぎるよ。私も手伝うよ」

「ッ！！そんなことをしたらお前まで…」

「いいの。これは兄さんだけでは荷が重すぎるよ」

「…ふ。すまない。じゃあ始めるとするか」

「お、おい。一体これから何を始めると言うんだ？力が足りないと何かとか…」

「せめてやること位教えなさいよ」

魔理沙そして霊夢は璃空、妃奈の会話に疑問を抱く。しかしそれは彼女たち以外にも抱いていた疑問だろう。一人を除いては。

「璃空さん…やはりやるんですね……」

「さとり…貴女…」

「そうです。流石八雲紫。貴女は察しが良くて助かります」

「璃空！そんなことをしてしまったら貴方は……」

「いや、どちらにしろ俺はもう長くはない。この消滅は”タチ”が悪くてな？無効化出来ないんだ。まあ出来ないこともないんだろぅが元々する気などないんだがな…」

「一体何なのよ？私たちに分かるように詳しく言いなさい」

「そんなに怒るなアリス。お前と魔理沙をこれから見る事が出来なくなると寂しいんだからな」

「…ッ！！／／／」

「あはは。そんなに赤くならなくてもいいだろう？まあそんなに長く話してられないからな。これからやることだけ話す。幻想郷を決戦前の状態にする。俺の能力で”全て無かった”ことにするんだ。勿論亡くなった者も復活させる。しかしそれには今の俺では力が足りなさすぎる…」

「だったら私たちも力をk「いや、それじゃだめなんだ。さっきも言っただろう？この消滅は”タチ”が悪いと…それがどうしたって言っんだ…そんなボロボロな状態で任せるわけには…」

「今は何とか食い止めてはいるがそれもぎりぎりでな…いつ暴走するかわからん。だから俺はこのまま幻想郷を元に戻し後はこれを俺の体に永遠に封印してそのまま俺は死ぬ…これが俺が出来る唯一の恩返しだからな」

消滅は徐々に進行する中笑って見せた璃空。しかしその笑顔は皆辛かった。大切な仲間は戻るが一人の大切な仲間が犠牲になる…最初

からこうなることを予知していたことさえ言わずに戦っていた璃空。そんな彼を今怒りたいがもし仮に最初に言われていたとしても彼はこうしていただろうし彼女らにも…そして私にも何も出来なかっただろう。

「さて…後のことはさとり…そして妃奈頼むぞ？じゃあやるか…思い残すことはまだまだあるんだが…それも大丈夫みたいだからな。妃奈…力を貸してくれ！！」

「うん！」

「「全てを…『無』に！！」」

決戦 その陸（後書き）

次回で多分終わりです。

まだ終わりではないですが…

こんな感じに仕上げてみましたが…

如何だったでしょうか？

次回で終わり？

なので感想などをお待ちしております（――）

まだ最後じゃありませんがここまでお読みになって頂いた皆様ありがとうございます。

次回は早めに更新出来るよう努めます。

夢幻記（前書き）

決戦後のことを少し書きたいと思い書いてみました。
これでラストです。

夢幻記

「遊びに来たぜ霊夢… ってまたお前は休んでいるのか？」

「いいじゃない別に。私はのんびりするのが好きなのよ」

「別に私は構わないぜ。じゃあ私もお茶をもらおうかな」

「いいわよ…… ねえ魔理沙」

「ん？何だ急に？」

「もう”あれから” 2年過ぎるわね」

「… もう2年も立つのか。早いものだな」

それは7月22日の夏日だった。あの日も今日のように蒸し暑い日だった。

「彼が生きていれば今頃また騒がしくなっていたのだろうけど…ね」

「本当だな。そっぴや彼奴と最初に会った時は本当に面白かったな… つふふ」

「魔理沙… 貴女その笑い方やめたんじゃないの？」

「え…？あ…今のほち、違っんだぜ！！」

「ふふふ。別に構わないわよ。それより…璃空に会いたいわね」

「…そうだな」

博麗神社は最後の戦いの場となった場所でもある。神社の巫女である博麗霊夢。そして白黒魔法使いの霧雨魔理沙はある者のことについて話していた。それは2年前に起きたある人間の野望により幻想郷が危機に陥った時のことだった。自分の命と引き替えに幻想郷を守った者…その者の名前は璃空。璃空は最初から自分が死ぬことを分かっていながらも戦っていた。しかし璃空には未来を読み取る力はなかった。璃空の実の妹である妃奈の能力で決戦の前からわかつていた。彼女には未来を予知する能力があつたのだ。二人は決戦の内容。そして結末を知っていた。

そんな二人は最後…

自分らだけで幻想郷を元に戻しそしておまけにあることをした。それは自分等の存在を消すこと。一体何故そうしたのかはわからない。しかし不思議なことに能力を持つもの…璃空そして妃奈と関わった者たちの記憶は無に出来なかった。しかしそれでも妖怪や妖精は過半数は彼らの記憶は消され、そして人里に住む人間に関しては全員が彼らの存在を知る者はいなくなってしまった。彼らを知る者は極僅かとなってしまった。しかし幻想郷を救った二人を忘れてはいけないとある者が私を訪ねてきた。それは前世からの古い友人である…

八雲紫。

彼女に決戦のこと、そして二人のことを書き綴ってくれと頼まれた

のだった。

私は快く承諾した。

何故なら私自身あの二人を忘れてはいけないと思っていたからだ。そして私はあの出来事を『夢幻記』と銘々し人々に伝えていくことを決心した。

少し…夢幻記から外れ、あれからのことを教えよう。私はあの時人里へいた。勿論人里へも攻め込んで来たのだが人里には慧音や妹紅がいたため無事だった。勿論璃空さんの補助があったためだ。

そして最後…幻想郷が元通りになってからは璃空さんはもう消えていた…そして妃奈さんかというと…消滅の能力により未来予知以外の能力は消滅させられてしまい、璃空さんと同じく徐々に体が消滅していく呪いにかかってしまった。璃空さんがいなくなってしまう。今ではその進行を遅くする程度しか出来なかった…そして彼女はひっそりと人里で暮らすことを決意。力を失った彼女が人里を出ることはなかった。時折妖怪が訪ねて来ることもあったり、私の家を訪ねてくることもあったが…。そういえば彼女は最近結婚したとかどうか…体が消滅していくにも関わらず彼女を支えるという素敵な青年が現れたのだとか…まあ幸せで何より。

そして…璃空さんが愛した射命丸文はというと…ずーっと落ち込んでいたらしい。だが3、4ヶ月を過ぎた頃に体に異変があった。それは璃空さんとの子が自分に宿っているということだった。ちょうどその時にあの地霊殿の主であるさとり、そして妃奈さんが文の所へ訪ねたのだとか。

後々そのことを訪ねてみるとどうやら璃空さんは亡くなる前にさとり心に心を読ませあることをお願いしていたのだとか。勿論妃奈さんは決戦の前から知っていたらしい。

さて…私からもう伝えることはないですね。

あ、申し遅れましたが私は人里の稗田家の九代目にあたる稗田阿求と申します。知ってる方もいるかもしれませんが…

あの出来事を知りたい方は私の家を訪ねてください。私で良ければ話して差し上げます。

では…私はこれから新たな『求聞史記』の方を執筆したいと思いますのでこれで失礼します。

あ、失礼する前に最後に一つだけ…

あなたも大切な人を守るような強い人間になってほしいと心から思います。人間はいつ死ぬか分からない。ましてや強い生き物ではありません。一人では生きていくことが出来ないとても弱い生き物なのです。しかし人間には他の生き物が持っていないものがあります。それは心です。人間には感情というものがしっかりあります。自分の感情をしっかりとコントロールし他人に優しく、そしてあなたにとって大切な人を作りその人を守るような強い人間になってください。決して自分の欲望に負けるようなことはしてはいけません。あなたは弱い人間ではないのですから…

ではまた会えることを楽しみにしています。

夢幻記（後書き）

約2ヶ月間くらいで完結となりました。

長いようで短かったです。

正直本当に完結出来るとは思っていませんでした…汗

東方はわたくしにとって衝撃的なものでした。それを二次創作の小説という形で自分なりにアレンジし作品を出させていただけなんだなんて…とても光栄なことだと思いました。

さてさて、

ラストは阿求で締めてみました。

東方夢幻記とは阿求が書いていたという設定でした。最初から。

ナレーション的なのも阿求だったり…わたくしだったり何だかごちゃごちゃしたりしましたが…

最後はわたくしが皆様に伝えたいことを書いてみました。この小説で少しでも大切な人への想いが強まっていただければと思い完結することが出来ました。

最後までお読みになっていた方々…誠にありがとうございます。素人のわたくしの小説に付き合って頂き大変嬉しく思います。最後となりましたが

東方夢幻記の感想、指摘など御座いましたらお願いします。次の小説に生かせるよう頑張りたいと思いますので…

もし良ければ二作目もお読みになれてください。

では八神凜…第一作目 東方夢幻記 完結となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0390/>

東方夢幻記

2010年10月12日04時48分発行